

し時むべからざる清兵の爲保護を受けて北京より天津に赴くは薪を抱いて火に赴くよりも危げればなり

各國の婦人小兒皆英國公使館に移る
總理衙門の答書あり、二十四時間の期を延して四十八時間となすの請を容ると、既にして午後四時頃國公使館の方面に於て突然銃聲起り埃佛兵死する者各一人是れ清兵否清國政府が各國公使以下千人の外國人と七百の耶蘇教民とを二箇月の間死地に陥れたる手始なり
夜間流丸頭上を飛ぶもの多し

二十一日

敵丸は北、玉河橋より飛來るもの多し而も烟は見えて人見えず、大學堂教師佛人某あり吾陸軍隊守備線に來り共に兵を出して税關内を搜索せんことを求め六名の兵を率ゐて至る吾は二名を出し吾輩亦隨以行く滿邸間寂、未だ一敵兵を見ず

を代表して故なく官兵の發砲することを禁せんことを總理衙門に要求せり

二十三日

午前、敵は又た東北の方面に迫り埃兵又退て佛兵に合し佛國公使館に據る破裂彈交民巷に落つる者多く日本公使館門上彈片雨下すること兩三回、二十日以來第一の苦戦とす義勇兵中村秀次郎氏匪徒一人を斬る
翰林院、敵の爲に焼かる
夜、ハンダリー雜貨店焼く其吾公使館に近きを以て義勇兵大に消防に力め總に類焼を免がる

二十四日

午前、敵大に肅親王府を攻む、親王府は玉河橋を隔て西に英公使館等と對す、此地若し敵に占められんか敵は直に府内の林丘に據り英館を撃つを得べく又英館と日、埃、佛、獨、諸館との聯絡を失ふの虞あり是より

敵は昨日より主として吾陣地の東北より迫り來る埃兵戦利あり其公使館に火を放たる

耶蘇教徒皆決死の色あり此日突貫して義和團匪一人を擒にす此時官兵と團匪と既に相合して交民巷に迫れり

二十二日

朝來東北部の戦稍激しく午前十時頃埃兵支ふる能はずして退き次に佛國日本の兵亦退て英國公使館に入る蓋し豫め戦以利あらざれば各國兵は英館に入りて防戦する約ありし也、既にして各國兵又英館を出でて舊戦線に就く若し此際清兵大舉肉薄し來りしならば交民巷は久しからずして陥りしなるべし天祐なる哉敵は我退却するに際して毫も追撃をなさず遂に各國兵をして再び舊戦線に就かしめたり

英國公使館火起り一棟烏有に歸す婦人紅袖を捲て水を運ぶ者あり、聞く英國公使マゴドナルド氏は各國公使

先各國士官等兵少きが故を以て之を占領して敵を扼するを難んず、二十二日に至り我陸軍隊遂に意を決して之を占領せり、此日(二十四日)敵は府の北壁下に集り壁を破りて入らんとす吾兵苦戦し伊、佛、埃の兵若干來り援ふ午前十一時義勇隊長安東歩兵大尉(辰五郎)吾陸軍隊五名、埃、佛兵二十餘名を率ひ府東の民家の塙を破り門を埃り潜行して府北の敵を衝かんとし途に敵に要撃せられ退却す此時村井氏は通譯として隨ひ行けり一人の佛兵は尾して敵火の中を駆け込んだとして大傷を負へり退て營に歸るや英館急を告げ援を吾に求む安東大尉又た陸軍隊五名を率ゐて赴き援け英兵と共に突貫して敵を撃攘し火を館北の民家に放ちて歸る、敵、屍五六を遺して退く、皆董福祥の軍なり
傳ふ昨夜獨兵屋上にありて遙に二道の烽火を望む午後五時頃南方に殷々たる砲聲を聞く皆曰く援兵來れり

午夜敵大舉して親王府に迫る頃刻にして退く

二十五日

八時頃より砲聲雷轟親王府北に起る蓋し敵は今日も亦府北の壁を破らんことを力む、壁を隔て、耳を傾くれば其音々々として暫くも止まず我義勇兵府内の庫を破り絹帛の類を以て土嚢を作り胸壁を築きて守る青紅線白然とし人目を射る

是より先吾居留民は義勇隊を組織したれども其武器は多くは刀槍の類にして外に獵銃ピストル四五挺あるに過ぎず、此日佛國兵が敵を殺して得たる所のモーゼル銃六挺を譲り受け朝日の村井啓太郎、文學士狩野直喜、東京日々通信者古城貞吉の三氏は敵火を冒して胸膈外に出で銃二挺、彈丸數十發を敵屍の中より取り歸る、此時敵屍既に半は腐敗し肝膽露出して銃身に纏綿せり銃を用ふる事數日尙尙始めて去ると云ふ

二十六日

午後二時義勇兵中村秀次郎氏佛國公館を北に戦死す、夕、敵は頻りに喇叭を吹奏しつゝ、引き上げ去る、府北又一兵なきが如し、既にして聞く敵は北玉河橋上に白旗を樹て又「旨を奉じて使臣を保護し嚴に開鎗を禁ず文書の往復は橋上に於てせん」と書きたる板を掲げ出せりと、同時に彼の軍使らしき者來らんとしたるを英兵射撃したるを以て逃げ歸り吾より出したる使者(支那人)又敵に銃を向けられて行くを得ざりしとす、開戦以來既に死を決したる人々も之を聞て支那政府の意志真に一變したるにあらざるかを疑ふものありたれども多くは吾をして警戒を怠たらしめんとする支那流の謀ならんことを信せり果せる哉夜半突然四方より襲來し白旗の狂言に心を弛めたる早合點の連中をして大に膽を塞らせしめたり

親王府内外の防禦工事益々進む

公使館を守備せる義勇兵館門を閉て皆吾陸戦隊の防禦線に増加す、此日戦稍々閑なり

二十七日

午前三時四面夜襲を受く暫くして引き去る、味爽より敵は府北の壁を破らんことを力め暫くも休まず府の壁海からずと雖も固より三尺を過ぎず敵之を破らんとしてより既に三日、計るに今日頃には之を破り得て必ず突入し來らん、來らば來れ吾に備ありと片唾を呑んで待ち構へたるものありとも知らず午後二時に至り吶喊の聲大に起ると同時に一時に壁を破りて入り來れり、御座んなれと吾は三面より息をもつかず撃ち出せば彼は不意を襲はれたるもの、如く周章狼狽退却して屍を遺すこと二十四個、後に敵は長さ棒を穴より出して死骸を引懸け運び去りたるもの數個、敵陸戦隊町野兵右

衛門此戦に死す

二十八日

敵は府北の突入に失敗し今朝より方面を改め大砲を以て府の東門を破らんとす、彼破れば我繕はんはんとすれども敵火熾にして意の如くならず人夫の傷くもの十三人吾兵大に苦戦す、東門附近の樹木敵丸の中たるもの多く遂に寸青なきに至る、夜同方面銃聲絶えず

二十九日

敵砲を用ゆる事愈々多く七、五珊知の花環榴彈あり此日吾れ戦利あらず敵は遂に府北の破毀より進入し家數棟を焼けり、此日砲彈飛で日本公使館に落ちるもの多

三十一日
晝間戦稍閑なり、午後十時頃より翌日午前三時に至る

間敵大に親王府を攻む此時雷雨大に起り電光、銃火並に起り黑夜忽ち白日の如く凄じき事限なし陸戦隊鎌田萬次郎此戦に死す

誰が吹聴せしかは知らざれども今日外國人類に來り問ふて曰く日本公使は天津より日本兵近く北京に來べしとの通信を得たりと聞く眞偽如何と而して其實此事なれば知らずと答ふるの外なかりしも吾は何となく氣の毒の感に堪へざりき (未完)

北京籠城中外交文書(一)

六月十九日太沽砲撃の後列國より先づ開仗したるを責め二十四時内に一同の退去を求むる意味の公文

親王殿下及端親王に謁見せん事を求む至急回答あれ斯くて公使等は翌朝二親王に會見せんとしたるも第一着に出頭せんとしたる獨逸公使の遲延等ありて會見は見合せせとなり引續き在京の事を清國政府も承諾しながら却て官兵をして公使館を攻撃せしめ其翌日六月二十一日より七月十四日英國公使館使丁が官兵に捕へられて慶親王の書面を齎らし歸りたるまでは彼我の間に何等の往復もなし右慶親王の書面は左の如し

過る十日間兵勇及義兵と戦ありて互に交通の出來ざりしは吾輩の大に怨とする所なりし過般吾輩の意見を表白せんが爲め掲示を掲げしに恨む遂に何等の返事もなく却て外國軍は攻撃を再び始めたり是れ吾兵士及び人民の一般に駭異するところなりし昨日の一の教民金性を捕へ是れに依りて各國使臣の恙を了知し大に悦べり計らざりき不意の出來事は外國援軍の義和團の爲めに撃退せられたることなりし吾輩は若し以前の約束に因り閣下等を城外に護送せしなれば天津大沽間は義和團多くして路上如何なることを生ぜしも知る可からざりしなり吾人は今閣下等に望む先づ第一家族及び各國の

を清國政府より公使館に致したるに對し同日公使等より答へたる文書は左の如し

我々公使等は總理衙門より本日附の通牒を得て大に驚愕の至りなり通牒に所謂大沽砲臺の事變は我々の毫も關知せる所に非ず我々は總理衙門の宣言要求を領取するの外なく北京を立去るは敢て辭する所に非ざれども僅に二十四時間内に出發の準備を整ふるが如き實際に能くす可き事に非ず清國政府は宜しく我々外人中には多數の婦人小兒あり輸送の準備も大に整へざる可らざるの事實を考量せらる可し總理衙門は途中の保護を我々に保証せらるゝとの事なれども其保護は如何なる保護なるやを承知せざれば各地に無頼の徒の出沒極りなき今日容易に安心す可らず我々は我々に對して清國政府が非望を懐く可べしと疑ふものに非ざれども今や外國兵は來りて官兵に力を合はせ秩序を恢復せんとして既に其途中に在るが故に直に右の外國兵に報じて我々の許に來らしめ之と共に北京を退去せんことを期望す且つ我々は船車等の輸送具及び糧食を支給せられ尙ほ總理衙門幾名か同行せられん事を要求せざる可らず此等諸事協議の爲め我々公使等一同明水曜日午前九時慶

士民を連れ公使館を其兵士に委し而して我等は信據すべき官吏を派し之を嚴重に保護せしめ而して閣下等は暫時總理衙門に移られて以て閣下等を本國に護送するに就き將來の取極めを待ち因て以て終始厚誼の保存を計らんとを左れ公使館を去るに際し決して一人の武裝せる外國兵をも連るゝ勿れ若し然らんか吾兵勇人民に疑惑恐怖の心を生じ不意の事あるやも知れざればなり今閣下に望む閣下若し此信賴を表するを欲せば北京なる各國公使に此事を告げ明日正午再び此使者をして返事を齎らせられんことを然らば吾等は豫め公使館を立去るの日を定め得るを得ん是れ目下の急を救助する唯一の計なりと信ず若し期時に際して返事なくば今や致方なきを以て最早閣下等を救助する能はざるなり敬具

七月十四日

慶親王等

右に對しての返答には外國兵の攻撃云々の事を駁し彼等は唯清國官兵の攻撃に對して生命財産を保護するに過ぎざりしと云ひ總署行は出來難しと斷り終に答ん支那政府にして商議を望まれれば責任ある官吏に白旗を持たしめ送られん事を告げたり



彙報

事變の終局容易に非ず

皇帝西太后は董福祥の兵に擁せられ皇太子は端親王を奉じて各々北京を退去したるに付ては列國公使の北京に在るは恰も他の空屋に居ると同様にして前後處分を施さんにも殆ど手の付けやうなし逃げたるものは呼べども容易に來らざるは明白にして假令ひ或は其本人は歸京を欲するも部下の護衛兵は義和團の徒なれば他迄これを抑留す可きは疑ふ可らず或は其發源地より李鴻章輩に命を傳へて平和談判を開始せしめんか斯の如く頑固黨に擁せられて進退の自由を失ひたる主權者が何如なる詔勅を發するも其詔勅は正當のものと思ひるを得ず列國は之を相手として講和談判の開議に同意

せざることもならん左ればとて皇帝西太后を別にして新政府を作らんとするも容易に其人を見出す能はず平和條約の締結を告ぐるは何れの時にある可きや今日に於ては殆ど豫想するを得ず况んや曲りなりにも政府を組織して此に事件の一段落を告ぐるも列國兵は尙ほ支那の領土に駐屯し新政府の政令は普く行はれずして其間には此所彼所に紛擾を生じ一波又一波眞實事件の終局を告ぐるまでには數年を要す可しと云ふ

露國の提議

在北京露國公使は聯合軍が北京を占領するは講和に害あるべきに付一應北京より撤兵して大沽若くは天津に引揚げ清國政府をして講和に着手せしめんと本國政府に申出たるに本國政府も此提議を容れ露國公使は之を李鴻章に傳へたり

日本は撤兵せず

我政府にては聯合軍が北京を占領したる翌日に於て第五師團の兵が急に公使館を救はんが爲め非常の激運動を爲したるの結果甚しき疲勞の体に陥りたるを察し相當の成兵を殘留するのみにて直に他の全部の引揚を命せんとの議ありしも北清の一部局に對する運動は此まで總て他の列國と協同一致し來りたる經歷に對し單獨擅恣の行動を爲すを以て友誼を失するものと爲し遂に其まゝ今日に至りしが今回露國政府が獨り其軍隊を北京より天津に引揚げんとするに對し(多分は多少の成兵を殘すことならん)その意思の何處に在るに拘らず或は又之れと同様の處置を爲さんとの議も起る可し但し我政府は矢張り最初の意思を取り北清の一部局に限りては列國協同の範圍を出づるを不利とし英米其他の列國軍が一同引揚げに決するまでは依然として今の地位を保つ可しと

列國 破綻の端緒

外交の大局に就ては曾ても報せし如く奇矯なる獨國皇帝が露國を動かして如何なる態度に出でんとするやも知るべからずとの懸念ありしが外交社會にては露獨の間に密約成立し露は滿州を收め獨は山東より英國の勢範と稱する揚子江右岸に向つて爲す所あらんとし且つ我邦の福建に對する意向を摸索せんとする形勢ある旨沙汰し居れり獨帝が公使の被害に躍り上りて得たり賢しとされたる態度、約七八万噸の軍艦を東洋に増遣し過大の陸軍を北京畿定後に進發せしめんとする形跡に徴すれば此事は有られ得べき事實なる故帝國は固より之に對する覺悟あるべき筈にて今更驚くべきに非ず但だ政府が從來確たる方針を立て、之に對する計畫を全うし居りしや否やは疑問にして心元なき感無きを得ずと某外交家は評せり

天津附近の偵察戦

天津に在る日英聯合の歩騎兵は去月十九日郭家村（郭家は天津城の西南約三里に在り）附近にて偵察戦をなし騎兵は河南ブジョウ附近にて約六百の拳匪と遭遇し之を撃退したり敵の死者約七十又歩兵隊は郭家附近にて敵と遭遇し之を撃退したり敵は約四百にして小扁庄に退却せり敵の死者四十我負傷一なり

外兵の慎重、清兵の亂暴

支那ガゼットに達したる北京特電に據れば聯合軍は皇城にあり左れを禁苑に入らず尙は本國よりの訓令を待ち居れり清兵は外人の墓地を發ぎケツテル公使の棺を奪へり清人改宗者の婦人小兒三十名北堂教會に於て地雷火の爲に殺さると云へり

北京總攻撃と露軍

北京の南門に向ひし露軍は是迄になき勇敢なる働を爲

の食料を用意したるのみ左れば其後近隣の支那人の家に就きて米穀を買求め或は英國公使館よりも供給を仰ぐの窮境に陥りたり居留民が此の如く苦戦し此の如く粗食しつゝ病を醸さざるは必竟するに敵愾の氣、内に滿つるものあればなり

居留人の恫慄と教民の慘狀

公使館に籠城せし我居留人は何れも顔容枯槁して籠城中の慘苦を表彰せるもの、如し、聞く籠城中の食物は朝は玄米の粥、晝は麥飯、夕は麥にて作れる餅にて副食物とては昆布汁のみにて偶々馬を屠る時は無上の珍味と舌打鳴らして喰ふ有様なり、特に慘鼻に堪へざるは英公使館内に避難せし教民にして彼等は草木の葉を喰ひ辛ふじて露命を繋ぎ餓死せしもの亦少なからず

居留地の防備

居留地防禦工事は案外堅固にして其周圍及び支那街に

し午後三時頃には第一門を破りて進入し今や將に第二の城門破壊を企つる際我第五師團長山口中將は使を露軍に遣はし其形勢を聞取りしめたるに露軍司令官の所在不明なりしかば此處彼處と尋廻りたるが此時同國の某士官は我司令官は軍の先頭にありと告げたり使者は之を聞き彈丸雨飛の間を踏分けて漸く司令官の許に到りしに士官の語に違はず司令官は歩兵前兵の中に在りて熱心に軍隊を指揮し居たりと云ふ露軍が今回比較的早く其一部を城内に進めたる所以のものは全く司令官の率先して一軍を指揮したるが爲なりとて其勇敢なる働きは一般の評に上り居れりと云ふ

食物の欠乏

圍匪不穩の形勢ありと認むるや英國公使館の如き非常に苦心奔走して數多の糧食を用意し籠城中も食物には比較上困難せざりしに反し我公使館にては當初二週間

通ずる道路は一面に煉瓦を築きて壁と爲し殊に英國公使館の如きは最後の堡塞と爲りたる事とて樓上樓下一體に土袋を積重ねて障壁とし以て敵丸を避けたる等用心中々堅固なり而して居留地の防禦方略は大抵我柴中佐の方略に成り其評判頗る内外人間に喧すし

外國婦人の勇氣

籠城中に於ける外國婦人の舉動は甚だ大膽活潑にして捲巻の築造などを手傳いて善く陸戰隊及び義勇隊の動作を助けたるなど仲々目覺しかりしに引換へ我國の婦人は内に引籠りて外の騒ぎを聞くのみなりしと

進軍中の美人

（露國婦人の健氣）

北京の急を救はんと悍りに悍りし聯合軍は馬に秣する暇もなく自ら糧を採取するも時を惜みて直押しに進軍なし八月十日午前四時星を載いて支帝廟の露營地を發

し大安江家庄、隨庄を経て午後五時と云へるに全軍馬頭に着きにけり此日は引續ける炎天に宛から燬くが如く我國にては臺灣の外に見も知らぬ華氏百廿度と云ふ酷熱なるに數万の軍馬の進むことなれば熱砂は烟霞の如く飛び散りて征衣に塗れ日射熱に罹りて路に倒るゝ兵士も尠からず國の爲とは云ながら慘らしくも又哀なり斯る處に露西亞軍の其中に年紀三十路に足らぬ婦人あり姿優しく風にも堪へぬ風情なるに身には白色の衣袴を纏ひ腕に赤十字の徽章を懸け小き帽子を戴ける外騎馬傘さへ持たで甲斐甲斐しくも自國の兵や將軍の負傷を勵わり慰めつ死者を吊ふ健氣さは三軍も爲めに感激して進んで死すとも退いて此婦人に笑はれまじと願はぬものはなかりしとぞ此時我が軍隊にも斯る婦人の居たりせば多派多感の勇將猛卒は幾何計りか勵みつ奮ひつゝ今の手柄に上越す功名ありたらんに惜みても

を他の列國に切言したるの榮譽と共に宜しく之を英國に歸せざるべからず云々

清廷御前會議の顛末

北清日報は避難者の手より出でし北京公使館攻撃開始前清廷大會議の模様を掲載せり其一斑を譯載せん

に左の如し
清帝は和戰大會議の議席に臨御し沈黙を守り居られしも心痛の様子龍顏に現はれ眼に涙さへ浮べ居られしが此際帝は何事をも爲し得らるべき權能及勢力無く滿洲人の爲めに甚しく侮られ居らるゝことなれば只斯る消極的態度を以て滿洲貴族及大臣等の政略に不同意を表せらるゝの外他に詮方あらざりしなり然れども主戰論の勢ひ熾にして其勝を制せんとする模様見えければ帝は最早忍ぶこと能はず願ひながら御前の左一尺程に着坐せられし西太后に對ひ各國を相手として戦はんと

猶は餘りあり實にや彼の露國婦人こそ天の使と云ふべく万綠叢中一點の紅と云ふべけれ夫に引き替へ北京籠城の我公使館に居りたる婦人共の心がけ苦々しき限りと云ふべし

倫敦タイムズの社論

八月廿日發兌のタイムズ新聞は其社説に論じて曰く列國公使の救援は主として日本國の力に由る是世界全般の感荷する所なり他の列國が一擧して自其國人の生命を救ひ其國旗の榮光を保つ能はずして空しく其使臣の虐殺を傍觀するの屈辱及痛恨を免れしめたるものは日本國にして日本國は眞に歐洲列國の伴偪たるに愧ぢざるものなり日本國が人道の爲に此重要なる勞役に當るを辭せず亦能く之を成功したるは美舉にして列國に先して之を認識したるの榮譽は日本國が寛懷能く公道の爲に假すを吝まざりし貴重なる助力を求むるの必要

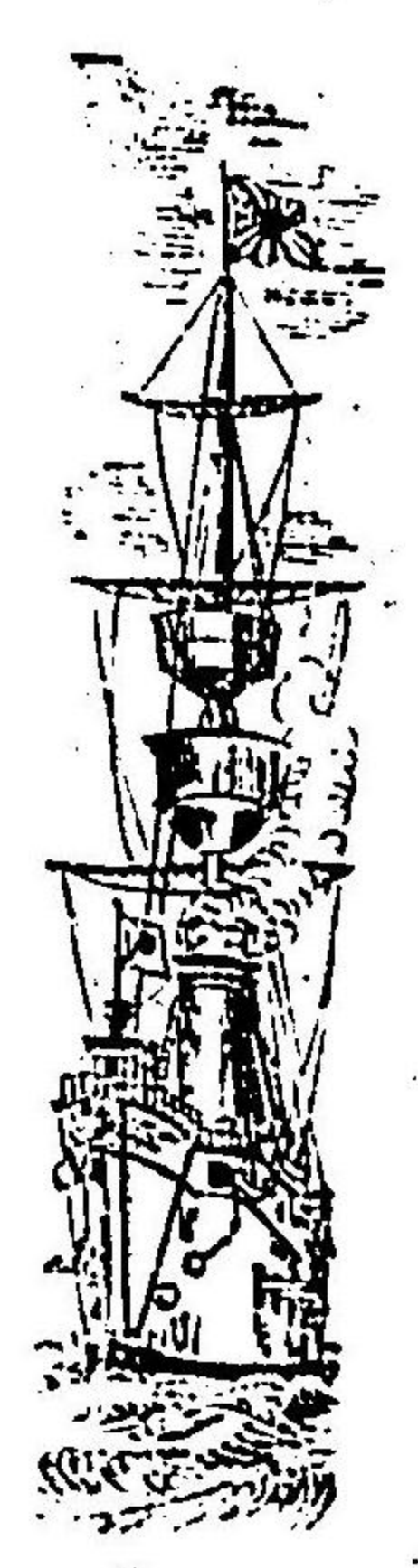
の決心に付ては再考あらせられたし一度斯る亂暴なる運動を始むる以上は最早將來に於て和を講ずる望絶の國家滅亡の端此に開けんと哀訴的に述べて尙も語を續けんせられしも俄に中止し給ひぬ何となれば西太后は朝廷の儀式あるにも拘らず帝の勅語を謹聽せずして公然之を叱斥し剩さへ帝に背を向られたるを以て帝も口を閉ぢ給ひしなり是ぞ漢人派(即ち非戰派)の最後の一言にして同派の言ふ事は後滿洲派(即ち主戰派)の器々たる聲に壓せられて聞えず滿洲派は異口同音に開戰の論を主張し且つ深く開戰に反對せし漢人派の同僚を嫉視し今は公敵及叛逆人を以て彼等を呼ぶに至りぬ滿洲派の勢ひ右の如くなれば漢人派は暫くは西太后に對し再び非戰を主張する機會を得ざりき同派の目的は先づ義和團解散の詔勅を發し若し其抵抗するに於ては兵力を以て團匪を鎮壓せんとするに在りき然る

此派は兵力を有せざることを其望を山東省巡撫袁凱世及び聶士成將軍に屬せり蓋し清國の將帥中義和團を鎮壓し騒々しき滿洲人を威服し國家の爲に平和を克復するに堪ふる兵を有する者は他に之れ無きを以てなり然るに端郡王及剛毅は漢人派を制して何事も爲す事を得ざらしめれば非戰派は如何に焦慮するも大勢如何に成行くやを知るべからざるに至り且つ同日以後は武装せる義和團甘肅軍及榮祿の滿洲兵并武衛中軍の規律全く破れ相率りて暴行を逞うするに至れり(未完)

支那人の不忠不義

我第二十一聯隊が東直門を攻撃したるとき同門外の家屋に尙十四五名の支那人在りしが我歩、工兵が門に近かんとする毎に其一人は直に城壁の下に馳付け又壁上より其度毎に銀塊一個を投げ落せり蓋し支那人の壁下に馳付くるは我兵が將に動作せんとすることを壁上の

支那人に對して相圖するものにして其銀塊を投ぐるは之を賞與するものなり我兵初は全く之を知らざりしが漸くにして之を感知し夜に入りて爆裂の装置に着手せり斯る際に斯る危険を冒しても金儲を忘れざるは支那人ならては出来得ざる藝なれども亦上下の別なく金の爲には不忠不義の行爲をなすつゝ怯として耻ぢざるものも支那人にして支那兵の英館攻撃の際其敵に向て其外部の模様を通報し或は鴉卵野菜を賣り殊に甚しきは密に彈丸を賣込むものさへあり數万の大兵を擁しながら僅に四百の外兵が防禦せる公使館其他を陥るゝを得ざるも宜なりと云へし



小説

金鷄勳章 (一)

瑞 濤

「此が清さん考へ處ですよ。」
 きんばり云ひ放つた四十恰好の上品な御新造は、この室の主山形清三郎の叔母、即ち深川屈指の穀間屋山平の細君である。吸ひかけた煙草の煙を一吹き吹して
 『宅に被在れば樂にして居られる清さんが、斯うやつて何時までも、不自由な下宿住居をして居なさるのは、些好奇過ぎるぢやありませんかね。叔父

さんだつて、さう無理な事を被仰るんぢやアなし、宅のよねが氣に適らないのなら、強てと云ふ譯ではない。他から嫁を貰つても遣らうが、唯彼の人だけは不可と被仰るんですよ。清さんも解つた方の様でも無いぢやアありませんか、夫は徳座立派な方だから知らないけれど、自分のためを思へば、思ひ切れさうなものですがねえ。
 清三郎は御約束の色白男、併し世間普通の飽郎ではない。去年の秋まで第〇聯隊に入營して居つた、其の間は、一つは心に歸宅後の樂があつたからでもあらうが、非常に職務に勉勵して、上官から褒め言葉を戴いた事も度々であつた。幼少い時から叔父の他には使る者もない御侍な身の上。叔父の平兵衛も自分に子の無い處から非常に可愛がつて、我が子の様にして育て上げ、妻の親戚からおよねと云ふ

娘を貰つて、やがては是を一對の雛人形と眺めて、自分の後を嗣がせる心算の處が、清三郎は許婚のおよねを嫌つて他に佐野かつと云ふ婦人と戀るにして居る。他から嫁を貰つても宜いと云ふ叔父の粹な言葉に、夫では彼女を云ひ出した處が、何か理由があるのか、彼女だけはいけぬ、と一言の下に跳ねつけられたので、夫れからは叔父甥の仲兎角宜しからず、遂に今は此の下宿に勘當同様の身の上となつて居るのである。

「イヤ種々御心配をかけまして、殊に這般無益い事で、今も叔母さんの被仰る通り、山平の家を嗣がなければならぬ大切な身軀でありながら、家を飛び出して這般安下宿に煙ふつて居ると云ふのは、他から見れば全然狂氣の沙汰でせう。併し妻を娶ると云ふ事は、下女を備ふ様な譯には行かない。一生共に暮

さ。そんなの大きな事を云つて居る時ぢやア無いぢやアありませんか。

「爾です……爾です。僕は笑はれても何でも係はないで話します。僕は假令叔母さんか何と被仰らうとも、叔父さんが何と被仰らうとも、今の様御話ぢやアどうも宅へ歸る事は出来ません。それは斯うやつて居ると随分不自由でもあり、また心細い事もあるですが、併し僕は愛情のためには身を犠牲にする心算なのです。

「まア大變な事ねえ。

「冗談ぢやアないんですよ。是で先方が娼妓とか藝妓とか云ふ商賣の者なら、夫は他人の機嫌氣秘をこる商賣ですから喘ざれると云ふ事もありませうが、もう足掛け五年も交際して居て、互に氣を知り合つた同志、家は確りした商人の娘、夫は男子と交際を

さなければならぬのですから、互ひに意氣の投合したと云ふ、見定めがなくてはならぬのです。一時の情實に逼られて、心に染まぬ人と結婚するのは、後に苦情の起る原因で、夫では實に馬鹿馬鹿しい次第でせう。叔母さんの前では云ひ難いが……併し早く話の解る方が宜いから云つて了ひますが……僕には彼のかつ子さん程、僕と氣の合つて居る人は他にはなからうと思ふんです。イヤ叔母さん笑らちやア不可い……僕はもう中止させよう。

「笑やアしませんよ。ちやんとして聞いて居るのに、自分の氣で笑つて居るだらうと思つて妾を見るから、笑ふ様に見えるんですアね。をかした清さんだよ。ホ、ハ、ハ、ハ。

「それ笑ふぢやアありませんか。

「夫は清さんがいやに差進ひから夫が可笑いから

するのが或はあなた方の御氣に適らんかは知りませんが、夫がまた僕の最も敬愛する處で、そんな事を云つてはすみませんが、到底およねさんの様な方に出来る事ではないです。叔父さんは何を何處から聞いて御いになつたのか知らんが、恐らくは誤聞だらうと思ふんです。否僕は寧ろ噂だらうと思ふんですね。何故と云へば僕には素より叔母さんにも唯、あれは不可い」と被仰る許りで、委しい話をなさらないぢやアありませんか。無い話だから出来る理由が無い。有つた話なら僕の斷念する様に委しく話して下さるが宜いでせう、自分だけ承知して被在つても他の者は些も解らないぢやアないですか。

「夫はね、妾もね。

「まア待つて下さい。宜いですが先づ夫が第一です。夫から第二ですね。僕が首尾よく兵役をすま

せたら、すぐ家督を譲ると被仰つたのに、昨年歸つて來ても一向其の御話はない。僕は何も家督を急いで自分の天下にして、如何し様斯うし様と云ふのではないですが、約束の違つたのが非常に面白くないですね。

『夫は清さん、夫は無理だ。』

『何が無理です。夫はおよねさんを妻にしないからと云ふのでせうが、夫は今になつての口實と云ふものです。僕が入替する時の御話には、よねは未だ子供だから、是から先甚麼なるか解らないから、よねの事は別として家督はついで貰はなければならん、と被仰つたではありませんか。夫ですからおよねさんの事は兎に角、僕は宅に居なくてはならないんでせう。夫を勘當同様に……』

『まア御待ちなさい、夫は清さん一圓に叔父さんが、』

唯意氣の合つた人の爲に、僕は、

と云ふ時に、對方の室で小さな聲で「ヒヤ〜」と云ふのが聞えたので、思はず顔を見合せた。

『聞えたんだらうねえ。』

『なに係はんです。今日は誰も居ない筈だが……』

……松井君だらう。

と獨語の様に私語した。叔母は何となくさまりが悪くなつて煙管を納めて歸り準備を始める。

『まア夫では其の話は、尙妾も叔父さんに能く頼んでみますが、兎に角何時豫備の召集があるかも知れませんから、一時宅へ歸つて居たら宜いでせう。叔父さんと顔を合せるのが嫌なら、離室の四疊半でも御部屋にしてね。』

『然、實際何時召集があるか知れませんが、併し此の頃は高低此宿に居ますから、若し召集が來たら、』

無理だと思ひ込んで居るからなんです。氣を落さつて考へれば解ることとせう。

『解りませんね。僕には是以上は決して解りませんね。』

『だつて清さん、叔父さんは一日も早く清さんを宅へ歸したいのですよ。夫だけれど清さんが例の人の事で強情を張るものだから、夫で叔父さんも、已の云ふ事に逆ふ者は宅へは入れられない、とかう被仰るんでせう。だから清さんが僅一つ思ひ切つて了へば、宅へも歸れるし、また嫁を貰ふにしても、幾干でも立派な處から貰へるではありませんか。妾に云はせると、叔父さんも強情ですけれど、清さんも強情過ぎると思ふんですね。』

『イヤ僕は宅へ歸りたいと云ふのではありません。又立派な處から嫁を貰ひたいのでもありません。』

此宿へ届けて下されば遅れる様な心配はありませぬ。

『だけれども、夫では猶且叔父さんも妾等も心配ですから、一時宅へ歸ることにして下さいな。些も氣まづい事はありませんから。』

『叔母さんがそんなに云つて下さるんなら、歸つても宜いですが……夫では明日の朝まで待つて下さい。明日何とか返事を爲ませう。』

『爾ですか、夫ぢやア明日の朝、返事も何もないでせう。信吉に車をもつて來させますから、準備をして置いて下さいよ。どうも長話をしまして勉強の御邪魔をいたしましたね。』

叔母の歸るを送り出して惘然己が室へ戻つて來る後から鐵拳で一つボンと脊を打つて。

『イヤ當世第一流の辯士!』

と奇聲を發したのは、先刻冷評した松井君其の人である。是は清三郎の斷金の友、と云ふのは表向き、實は取り巻きの一人であつて、彼の佐野令嬢の宅へも屢々同伴するは信せられて居る男である。

「君だらう、ヒヤ〜なんて冷評したのは怪しからんね。」

「だが僕は驚いたね。君の叔母さんの能く饒舌るにも驚いたが、君の雄辯滔々、蘇秦其處退け、張儀葉を喰へと云ふ意氣組で、口角泡を飛ばして叔母さんまで吹き飛ばした手腕には、感々服々したね。あれなら必叔父さんも承知して、君の大願成就近きにありだらうと思ふね。」

「如何して叔父が承知するものか。何だか他で聞いて来た事があるなんて、宜い加減な嘘を云つて僕を騙着し様として居るらしいが、そんな手段で騙され

る様な僕ぢやアないんだからね。

「御仕込みが違ふかね。」

「ひやかすな。さうだ貴女の處へ行かうか。」

「そーら初ツた行かう〜。僕は御馳走になつて有りがたいのを拜聴すべく此の世へ生れて来たのだから。」

「嫌なら止し給へ。僕は一人でも行かれない事は無いから。」

「まア待ち給へ。はらひ勢だね。さうか御前に願ひますよ。」

スタ〜出掛ける清三郎を、帽子も冠りあはず追ひかけて、門口まで来た時、外へ人力車が駐つて、降りて来たのは先刻話のあつた山平の娘、およね嬢である。

「オ、およねさんか。」

「阿母さんは？」

「先刻歸つたよ。」

と、素氣ない挨拶。

「さう、ちやア行き違ひになつたのね。清さん召集ですつて。」

「エッ。」

松井も思はず目を圓くした。忙はしく紙片を押し開けば、豫備兵の召集！二十四時間内に師團司令部へ出頭しなければならぬのである。

詞 華

入清偶感 日東逸士
慷慨素期救蒼生、憤然決志爲此行、

毒蛇蟻蚤北清野、猛虎咆哮北京城、
霜冷腰間三尺劍、腸寒壯士千歲名、
風蕭々兮雲慘慘、想起當年易水情、
使志士血淚滂沱不絕耳

偶成用東洋詞兄清風亭韻

柏木城谷

半日偷閑臥野亭、白雲斷處認天青、
秋風一陣群鴉散、得意先生讀武經、
再三讀城谷兄作、若想高遠已覺不凡、
庚子九月 東洋妄批

偶 成

杉本東洋

不知何處是中華、月落天傾斗柄掛、
請看東方君子國、春風別有一番花、
不似近世偽文字、可容々々

公署背後吊義勇隊新墳

杉本東洋

天步艱難日、丈夫此捐身

新墳空烈士、甲第盡義臣、
雨露思追贈、蘋蘩欠薦陳、

征人自多淚、相吊獨霑巾、
頭聯壯懷、優于千百帛文、
天韻拜批

大砲の煙りに月の曇り	讀	破	琴	山
北京から来る風寒し冬隣	加	賀	風	袋
弓取は日本の軍や勝負力	東	京	梅	鶯
占領の地にいささよし響虫	豊	後	花	山
白河に殊更活し秋の水	若	狹	可	笑
戦かひに勝し處が響虫	備	前	鶴	翠
是ほまに落して嬉し支那の水	近	江	蘭	士
敵兵は秋の蝶よりをさりけり	越	前	芹	水
清國もむさう暮けり秋の雨	美	濃	梅	鳥
行秋や蝶よりもるき支那の兵	越	中	金	袋
露に伏す哀れや支那の男へし	北	海	道	花
戦死した功のほまれや魂まつり				守



菊の本知古

曩に董福祥の兵の爲に殺害されたる前獨逸公使の葬儀は八月十八日午前九時を以て執行されたり我公使館よりは西公使以下一同、師團司令部よりは山口師團長、福島少將以下の各將校會葬し特に陸兵及陸戦隊を儀仗兵に立たしめたり而して各國公使及び武官等も亦悉く會葬したるを以て其式甚だ盛大なりし

新獨逸公使の一行

新任獨逸公使シユワルンエンスティン氏は多數の公使館附武官と共に去月廿八日上海に着せり其中には會て劉坤一の兵に教官たりしフオンライツエンステフ少佐及びフオンデルゴルトン男等あり

戦地に於ける服装の改正

陸軍省にては今度戦地に限り將校及同相當官准士官等の軍衣は夏衣同様の制式(地質は濃紺若くは紺絨袖章は黒線)を略衣として用ふるを得る事に定めたる由

雜 錄

韓帝聯合軍を犒ふ

八月廿三日山口中將より陸軍省に發せる電信に依れば韓國皇帝より聯合軍に勅使を派遣せられ米二千囊麥粉參千囊煙草二千箱を寄贈相成たりと

清帝の贈物

清帝は外國人の青物に窮せるを聞き二度までも水瓜黃瓜の類を贈らる一方には林戰中と雖も尙ほ時々公使館を攻撃し更に兵を出して援軍の到來を妨ぐるかと思へば又た贈物あり殆ど政府の意のある所を知るに苦しむものなるが是れを即ち異日に於ける外交上の困難を減せんとするの謀と知られたり若し外人にして其謀に乗せられなば抑も又高價なる青物と云はざるを得ず

獨逸公使の葬儀

在清軍隊冬籠の準備

北清に在る我陸海軍に對する冬季の準備は全く整頓したる由にて漸次回送の運に至るへしといふ

故安藤大尉の行賞

故陸軍歩兵大尉安藤辰五郎氏が私費にて北京に留學中事變起り戦死せしに付ては戰闘員に非ざるを以て遺族扶助令に適合せざりしも其筋に於ては特に中隊長の資格によりて行賞するとに内定したる由

厦門の臺灣銀行支店引揚

厦門に暴動起りて現に東本願寺の教會を燒拂はれし由あるが同地は簡太獅の勢力頗る盛んなりし處にて其黨類今尙は跋扈し匪徒の内には排日本熱を起して臺灣回復なきの激を飛ばし窃に運動するものある趣きにて兎に角不穩の狀況あるに付き臺灣銀行支店は同地を引揚げたるよし

我水兵の上陸

厦門に不穩の状況あり八月廿五、廿六の兩日に武装せる日本水兵二百五十名を上陸せしめたり

英國兵の上陸

英國軍艦アイシスより八月三十日午後三時水兵約八十人及大砲一門を厦門居留地に上陸せしめたり

佛國兵の上陸

八月三十日朝佛國兵約九百七十人上海に上陸せり

米國派兵を見合す

米國は屢に清國に向け四千の兵を派遣せしが現に清國に在る所の兵力にて充分なりと思惟し該派遣兵をマニラに向けて轉遣せりといふ

四十三哩の軍艦

屢に米國に於ては速力百餘哩を駛走する漁車を發明したるものありしが今又英國に於て速力四十三哩を有する軍艦を造出せるを見る學理應用の進歩も亦驚くべし

英國政府の製造せる新軍艦「バイバー」は去月十二日試運転を執行し一時間實に三十七節強即ち四十三哩に達し優に豫定計畫を超過したり二十世紀の造船航海の進歩を推知すべし

新造軍艦八雲

新造一等巡洋艦八雲は去月三十日無事横須賀軍港に着せり同艦は獨逸にて製造し排水量九千八百噸速力二十節大砲三十五門水雷發射管五門を有する最新式の装甲巡洋艦なり

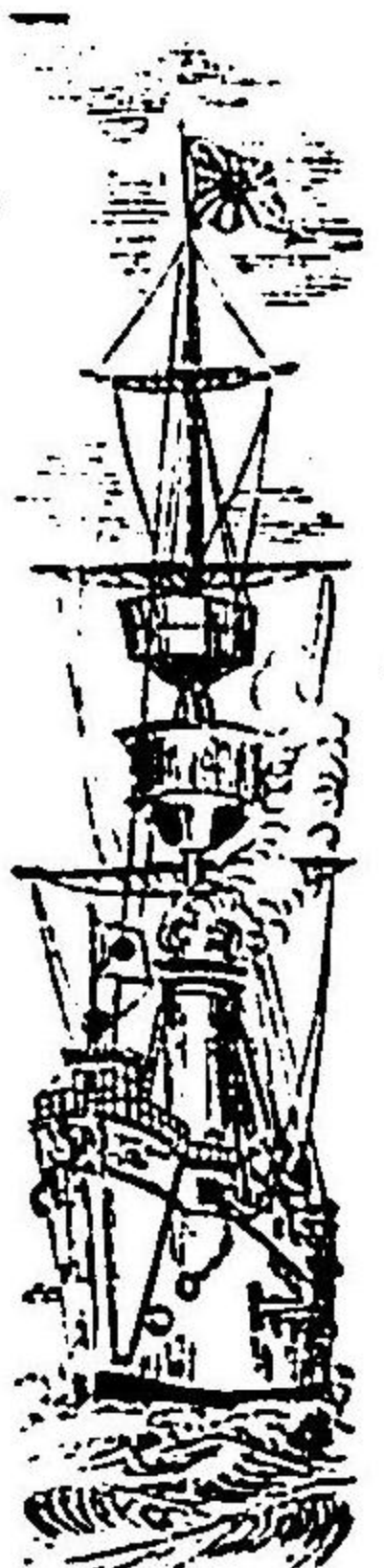
戦後穀類の缺乏

大沽北京間に於ける清國民は擾亂奪奪兵火其他あらゆる艱難に罹り悲慘の狀を極め居れり最も憂慮すべきは穀類の欠乏にして遂に飢饉に迫るべきのみならず来る冬期に於て凍の虞あり且日本商人より米穀粉類棉製品等を輸入すること専用なり尤も日本商人が河船に於る私品の運搬は極めて不充分にして鐵道は露國の管理に属するを以て目下私人の用に供するを得ず
食料其他冬期必需品は軍隊并に居留民より相應の需川あるべし又裁縫調理製靴靴人等も有用なり

(本誌九月六日脱稿)

列國 支那戦争記第八編

(九月二十五日發行)



戦記

我騎兵聯隊の動作

森岡大佐の率ゐる我騎兵第五聯隊は英の印度騎兵露の哥薩克兵と合して此に一の聯合獨立騎兵隊を作り去る九日我歩兵砲兵の南葵村を攻撃するに當り先づ礮廠に集合し大部隊の進める道路の左方警備の任を帯び武清縣に向つて進む、もと聯合騎兵隊と云へば多數の兵力あるが如くあるも其實我騎兵聯隊は種々の任務を帯び各部隊に散在せるを以て在るもの僅に百騎餘に足らず

露英亦各百騎計り總員三百餘騎あるのみ斯くて唐庄の南方四千メートル許を距る堤防の邊に達するや忽ち敵の騎兵一營餘之に加ふるに若干の歩兵に高粱圍に會す乃ち英は右方に露は左方に我騎兵は中堅に約四百メートルの間隔を以て激しく敵を追撃すること三千メートルに及ぶ聞く斯る猛烈なる追撃は最も稀有の事に屬せりと而かも聯合騎兵のこととて各其服裝を異にせるを以て一種異様の壯觀を極めたり敵に近づくと殆ど五十メートルに達するや**我騎兵**は聯隊長が聲鋭く抜きの號令の下に齊しく長劍を抜きて敵に薄り接戦二十分許立どころに敵は二十餘名の死傷者を生じ隊を亂して潰走す我れも亦敵の後方には歩兵の備ふるあるを見て此に其追撃を止め顧みて露英の隊を見れば彼等は我軍の餘りに敵に肉薄せるに恐れやしけん皆高粱圍中に隠れて出で來らず二三時間にして印度騎兵漸く我れ

に追及するを見れば何れも長槍には斑々たる血痕を止め、數流の清國旗をさへ携へ居るを以て其小隊長らしきものに就き其更に何れの處にてか敵兵に會したるを叩きたるに彼は正直にも白状すらく否とよ貴國兵の去りたる後清國騎兵の負傷して地に倒れたるものを刺し且つ清國旗數流の其附近に打棄てありしを拾ひ取りしのみされど司令部へは戰闘したる如く報するなり貴國をふ幸に之を秘せよと狡猾とはいへ其無邪氣なる尊る一隊に倒せずや此日の午後は孝力庄より高村楊房なんど云へる諸村落の間に於て再び敵と銃火を交へ我に一名の負傷者あり夜に至りて河西務の西方村落に露營す翌十日は何事もなく營を列ねて張家灣に達すされど此日途中より英兵は遂に我と共に來らず唯露兵のみは我隊に附けり露隊は云ふ是れ貴國の隊長も大佐にして英の隊長も大佐なり而かも貴國の大佐總指揮官たるが故

に英は之を快しとせざるなりとされど這は一種の離間説に似たり各隊此夜は馬頭に至りて露營す
 十一日早天馬頭を發す露の騎兵を待てども到らず獨り我騎兵のみにて矢張師團本部の左側を警備して進む既にして露騎亦我を追ふて到る馬頭の近傍には稍兵營らしきものあり白柳營と名く敵は少しく之に據りて我を射撃したれど暫時にして遁走す此時本道路に於ても我前衛たる歩兵砲兵は敵と砲火を交へつゝありしを以て騎兵は直ちに之が援護に當れり敵の死傷頗る多し
 十二日は露の騎兵隊と共に通州の西北方黃瓜店を過ぎ直ちに八里橋に達す（八里橋の事は從前余り記事中に記すとなかりしが這は前年英佛聯合軍が將に北京に入らんとして此橋邊に達したる時當時清の驍將格林沁の爲にサンクトに打ちなされたるの所なり）我れば此度も將に此に一快戦を見るならんと豫期し居たるに橋

の附近には多數敵兵の駐屯せし跡あれども我軍の通州を占領する前即ち昨十一日夜を以て早く既に北京に向つて遁逃したりとは如何に清軍氣の奮はざるかを察するに足る此夜は通州城内に返り久し振りにて合營するを得たりと

十三日馬を進めて北京城に近き朝陽門外一里許り八里庄と云へるに達し東門外の敵勢を偵察せしに敵は土民と合して小賢しくも我斥候を襲撃し次いで我歩兵にも銃火を放ちたれども忽ち之を掃蕩し此夜は定福庄樹林の下に露營す雷雨大に到り衆皆爲にぬれ鼠の如く相顧みて苦笑す頃て十二時を過ぐる頃東便門外に方りて砲聲起る乃ち之を検するに露の騎兵隊早くも我れの約に違ひ獨り北京攻撃に先登の功名を博せんとせるにぞあるされど我れば師團命令のあるあり漫りに動くべきにわらず徐に天明を待つのみ

翌十四日は即ち北京城總攻撃の當日なり我騎兵聯隊は馳せて直ちに朝陽門外に潛る敵は固く城の門扉を鎖し壁上に守備せり次いで我前衛の歩兵砲兵は門外に達し此に放列を敷きて攻撃を開かんする際騎兵は更に東直門外に進み門樓に向つて偵察射撃を試みたるも敵は之に應ずる模様なれば我れば彼れ清兵何かあらんと侮り門下に肉薄したるに敵は始めて銃砲を我に向けたり是より先師團より命令あり清國皇帝陛下及び西太后は尙は皇宮に在しますを以て我騎兵隊は急ぎ西門外に出で車駕の皇城を逃れさせ給ふを待ち受け之を奉迎すべしと此に於て我騎兵は東直門より更に安定門外に進み此城の在る所に達するや突然敵の騎兵五百餘と衝突し忽ち戰闘を開き敵五騎を斃したるに敵の歩騎兵は更に之に加はり新に我側

面より後方に廻りて退路を遮断せんとしたるを以て我
れは已むを得ず千メートル計りの處に退却したるに
敵は尙北方の阜脈を進みて頻りに我を砲撃し我も亦阜
に據りて應戦幻三十分及び敵遂に退却したれど尙優
勢の歩兵之に代りて我に當らんとせるを以て遂に此日
に於て皇帝西太后の車駕を奉迎するの目的を達する能
はざりざされども皇常は此日は皇城を出でさせられた
るに非ず後に聞けば確に其翌日なりしが故に縱ひ我れ
は西門外に到るを得るとするも以て其目的を達する能
はざりしなり唯清兵の此に力戦せしは又故あるかな此
夜は再び東直門外に返りて舎營したるに午後九時頃突
然呐喊の聲天地を動かし又爆然たる響を聞き銃砲は雨
霰の如く頭上を飛ぶ即ち我工兵隊が東直朝陽の兩門を
破壊したるの時に在り而かも城壁の敵は防守最も力め
午前二時に至りて砲聲漸く絶ゆ我騎兵隊は斯る際には

別に任務なきを以て面白く此戰團を見物するを得たり
十五日には我軍既に北京城内に入り直ちに皇宮保護の
爲兵を派遣したるに敵は尙皇宮に據りて防戦し十六日
に至りて潰奔す我騎兵隊は此兩日間別に特種の任務を
帯びざりしが十七日に至りて俄に師團よりの命令に接
す曰く西太后は尙頤和園に在り清兵之を守るの説を
聞く宜しく偵察せよ若し能ふべくんば**太后を迎**
へ來れと騎兵隊は此命令に接し
十七日午後四時を以て蹄を發し馳せて頤和園の手前海
淀と云へる處に至り雲時人馬を憩はし頓て萬壽山下に
達したるに頤和園の宮門は堅く鎖されたり乃ち**爆**
裂薬を以て之を破り園内に入りたるに滿園寂とし
て聲なく唯門衛の恐るゝ我方に來り偏に哀乞を乞へる
あるのみ園内の結構は眞に人工の極致を盡し世界の美
觀を集めたるものと謂つべく其昔阿房宮の結構も斯く

やわんと思はれ人をして目眩して亦仰ぎ見るを得べか
らざらしむ而して千百を以て敵へつべき金殿玉樓は皆
固く其扉を銷され寶物は總て此中に藏せらると思しく
毫も他に持ち運ばれたるの跡なし既にして日漸く暮る
此附近は尙數千戸の滿洲八旗兵の家屋を以て取り圍ま
れ居るを以て直ちに師團に此由を報告し第九旅團に向
つて歩兵の援護を請ふ
十八日午前三時第九旅團の歩兵一小隊は頤和園に達せ
り是より先森岡聯隊長は此園の空しく外國兵の占領に
委せられ其珍寶の悉く奪ひ去らるゝに至らんとを慮
り是非我軍に於て之を守備せざるべからずとて川島通
譯官をして努めて旗人接撫の任に當らしむ氏乃ち門街
及び旗人の諸老を誘ひ來り説くに此頃我出師の大旨を
以てし夫の圓明園燒掠の故事を引ききて旗人も亦我れど
共に此園を守り永く世界の美觀を保存すべきを諭した

りしに彼等皆大に喜び明日は自ら進んで全族人に此由
を傳へ以て外國軍の劫掠を拒ぐべきを盟ひ爲に十七日
夜の如きは最も安然に園内に宿するを得たり然るに
何ぞ闖らん十八日未明師團より命令あり西太后にして
園内には在さずば當騎兵聯隊は時機を見て園を引揚ぐ
べしと是れ蓋し外國軍を憚りてのことなり其後二十日
に至り**露兵**は果して此園に入り守備することにな
りぬ彼れ其暴横を極めんこと想像するに餘りあらずや
我軍の外國軍に讓ること總て此に似たるものあり而か
も常に説を外人の感情を傷ふべからずと云ふに藉る眞
に浩嘆に堪へざるなり思ふに我騎兵聯隊も亦余輩と此
感を同うして園を引揚げしならんか

日英交渉の公文書

七月下旬發表の英國外交公文集に據り清國問題に關す

る日英兩國間の交渉頭末を詳載すること左の如し
六月十六日日本代理公使はソールズバリー侯を訪問せし
が侯は此訪問の趣意に就き左の事柄を在東京英國代
理公使に通知せり

日本代理公使は本月十六日外務省に來り清國に於ける
現在の事局に對する英國政府の態度を確め且つ清
國政府にして平和と秩序を恢復し清國に於ける外人
を保護するの能力なきこと明かなるに至らば英國政
府は如何なる處置を採るべきかに關し胸襟を披て問
合はすべき旨を訓令せる青木子爵よりの電報の要旨
を通告せり

余の指令に基きソールズバリー侯が大沽より上陸せしめ
たる軍隊の今正に北京に進行中なるに際し今後事態
の如何に成行くべきかを豫告するは不可能の事なる
こと英國公使並に司令官は最良の方策を遂行すべき
權力を付與せられ居ること、及び秩序恢復に就き日
本其他の關係諸國と與に事に當るは英國政府の希望
する所なることを松井氏に通告せり

二十二日ソールズバリー侯は在東京の英國代理公使に
對し更に左の電報を發せり

何なる處置を採らんことを提議すべきかを問へり

同日同所發

余は右會議を終り前電を發送せる後間もなく接受せ
る本月二十二日附閣下の電報の要旨を自ら日本外務
大臣に通告せし結局如何に決定すべきかは疑問なる
も外務大臣は即時之を閣議に提出せんことを約束せ
り

余は再び外務大臣を訪問したるに同大臣は日本が事
變に應ずるため充分の軍隊を有すといへども之を派
遣せるの結果を豫見する能はざるを明告したり

六月二十五日ソールズバリー侯は日本代理公使と重ね
て會見したることに關しホワイトヘッド氏に左の如く
通知せり

日本代理公使は本日余に會見を求め列國が支那の危
局に關し如何なる處置を爲しつゝあるかを質問せり
余は列國より派遣中なる軍隊のこと及び該地に在る
將校等は危難中の各國人民を救援することに最適當なる
方法を取り相互に協定するの權能あることを同代理
公使に通告し進んで印度若くは歐洲より派遣せる救
援隊が到着するまでに非常なる日子の經過すること
及び日本の地位は急速の運動に比較的都合よきこと
を論告して日本より大兵を派遣するには幾何の日時

貴下は北京に於ける各國公使館及び之を救援するた
めシーモア中將統率の下に派遣せられたる列國軍隊
の危急なる状態を日本外務大臣に通告し併せて英國
政府は印度政府に對し大兵を清國に派遣すべきこと
を命令せる旨をも通告して日本政府は各國公使館及
び列國軍隊を救援するため此上更に軍隊を派遣する
の意思なきや否を確めらるべし敏活なる行動の極め
て必要なるに際し日本の地理的關係は頗る之れに應
ずるに都合よきを以て日本の意思如何は此の難局に
對し重大の事柄なり

翌日に至りホワイトヘッド氏(東京駐在英國代理公使)
は左の二通の電報を外務省に送致せり

千九百年六月二十三日東京發
今朝九時余は日本外務大臣に依り招集せられたる列
國代表者の會議に出席せり
外務大臣は余等に對し形勢の極めて危急なることを
告げ軍隊を急速に派遣せんことを熱望せる在大沽日
本司令官の電報二通を讀聞かせたり
外務大臣は自ら何等の提議をも爲さず且も形勢の
頗る危殆なるに列國軍隊の極めて困難の地位にある
ことに照し日本政府は關係列國の決心を確むることを
希望し列國政府は事局の必要に應ずるため差當り如

を要すべきかを質問したるに代理公使は其の問題は
派遣せらるべき軍隊の場所次第なるが自分は諸般の
準備をして整頓し居れりとするも途中に四日間を要
すべしと思考する旨を答へたり然れども同代理公使
は急速に大兵を派遣すべき諸般の準備が既に完結し
居れりとは明言せず本國政府より何等の訓電をも受
取らずと雖も自分の意見にては日本政府は多分大兵
を派遣することなかるべしと謂へり
代理公使の所見にては極東に利害の關係ある他列國
に於て異議なき旨の保證を得度しとなり
余は露國が日本より二万五千乃至三万の軍隊を派遣
することを承認するや否やを確むるため聖彼得堡に
電報を發し且つ獨逸政府に對しては此要求に對し英
國政府を援助せんことを求めたり

同時にソールズバリー侯は露國駐劄の英國大使に電報
を發して曰く

余は貴下が日本政府にして若し天津及び北京の秩序
を恢復するため二万乃至三万の軍隊を派遣することに於
ては露國政府は之を承認すべき乎を露國外務大臣に
問合さんことを望む貴下は外務大臣と會談の時左の
事柄に就て大臣閣下の注意を促さるべし曰く英國政
府は露國政府が速に救援軍を出さんことを希望す我

政府に於ても印度より約一万の軍隊を派遣中なり然れども此等の救援隊は現在包圍中にある兩國の軍隊及び北京の各國公使館を救援するため急速の間に合はざるや明瞭なり

而してノールスバリー侯より又在伯林の英國代理公使に宛てたる電報に曰く

願くは余が日本より二万乃至三万の軍隊を大沽に派遣することに關し露國政府が之を承認すべきかを問合すため在露京の英國大使に電報を發したることを外務大臣に通告せられよ

余は昨夜晩く日本代理公使と會見して日本政府は他列國と紛議を誘起せざるべしとの保證を受領するにあらざれば有效なる援助を與へざるべきを知れり余は獨逸皇帝が露國より右の保證を得んとする英國政府の希望に同意せられ又之を得るため陛下が英國政府に援助を貸されんことを切望す (未完)

北京籠城日録 (承前)

七月一日

此日米兵の占領せる城壁上の胸櫓を堅くせんとして若

昨夜西南に當りサーナ、ライトを見ること數十回恐く援兵の信號ならん、距離は二十五哩より三十哩の間にありと

親王府北端既に破れ東門又陥り勢ひ甚だ不可なるを以て府内に置きたる糧食を英國公使館に移す

三日

午前二時英米の兵城上の清兵を衝き數十人を殺し銃彈各獲る所少なからず、此日親王府靜穩なり

兒島正一郎氏終に起たす

昨夜北方一烽火を見る曰く李鴻章北京に来る

昨夜敵、佛英及吾方面に向て盛に銃撃す吾軍近來彈丸を信みで多く應せず數日來敵は晝間砲撃すれども銃撃せず専ら夜襲を力むるが如し而も清兵の怯懦なる吾軍に對して又壘を作り其裏に在て徒に射撃するのみ敢て壘を踏む壁を攀ちて肉薄し來るの勇なし

支那戦争記 第八編 戦記

力の打たれたるも五六、蓋し城壁は開戦前義和團來襲の際米兵は前門に近く獨逸兵は海岱門に近く各交民巷を守るに足るべき區域を占領したるなり

敵、砲を用ふるに至てより吾々苦心築造せる胸壁は容易に破壊せられ而も吾は之を何如ともする能はず砲聲を聞く毎に皆齒切せざるなきこと久し、此日吾兵、伊英兩國兵の援を得て突貫を試み砲を奪はんとす、敵火盛にして進むを得ず吾陸戰隊礮員桑藏氏即死し伊兵一名亦負傷し遂に志を遂げずして歸る衆寡敵せずとは云へ又心細からずや

二日

節既に梅雨に入り細雨霏々として止す、此日親王府の東門遂に陥落す義勇兵外交官補兒島正一郎氏胸壁を築かんとして敵に狙撃せられ頭部に重傷を得英國公使館内に設けられたる病院に送らる

四日

佛國某大尉の報に曰く昨夜東南に當て復た電燈の光を見たりと

五日

午前英國公使館砲撃さる敵の砲丸吾陣地に落つるもの多し

開戦以來茲に二週日其間天津との交通は全く絶に我防禦線は漸く盛まり各國人死傷者を出すこと日に五六人を下らず彈丸又漸く減じ殊に吾陸戰隊の如きは此時利す所僅に四五十顆に過ぎず而して恃みに恃める援軍はいつ來るとも知れず悲憤の氣眉宇の間に動かざるもの莫し

六日

親王府の敵砲の爲に吾兵の苦しむ事久し是れ奪はざるべからざる所以、此日又突貫は策せられたり陸戰隊

義勇隊の大部は一齊に突貫せり不幸にして突貫隊を掩護すべき伊國兵時機に遅れて進まず突貫隊に従へる支那の牧民亦遂に巡して進まず陸戦隊の一人は既に敵砲に手を觸れたるにも開せず敵火烈しくて吾兵繼ぎ至る能はず遂に恨を呑んで退却せり、此突貫に義勇隊長安東歩兵大尉戦死す氏は義和團の大に京南を騒がせし時北京に來り數日ならずして推されて義勇隊長となり衆を督して防戦尤も方々闘りざりき今日此事あらんとは此夜時々砲撃の聲を聞く

七日

午前十一時頃より佛兵守備隊に於て盛に銃戦あり今日は敵、近頃止め居たる怪しき喇叭を吹き立て、頻りに佛國公使館を砲撃したり
親王府内尙馬四十餘頭を餘す、是より先開戦の初に於て守備隊内の馬は乗馬となく駄馬となく將た驟となく

一救民吾陣地外に出て物情を偵察し歸り報じて曰く盡福祥の兵は主として海岱門大街にあり榮祿の兵は齊化門内に集まれり曰く四牌樓附近買賣舊の如し曰く西太后、皇帝尙宮中にあり曰く外國兵來るの模様なし此最後の一言は當時如何に衆を失望せしめたるよ

十日

晝夜共に稀に銃聲を聞くのみ
援軍至らず形勢益々危急なり此情況を天津に通せんと欲して各國より出したる密使少からず而も或は中途にして歸り或は一たび去て杳然として消息を知らず

十一日

公使館二等書記官檜原陳政氏此日親王府内にありて支那人を督して防禦工事を施す、偶砲彈其傍に破裂し彈片飛んで大に其脚を傷つく
親王府内の敵漸く進み來り近く吾と對峙す敵兵を破ら

盡く之を親王府に收めて糧食の用となしたり此等數十頭の馬肉を食するも腹に滿たず悉く憔悴骨立の状眞に憐むに堪へたり

佛塊の兵を管せる士官は云ふ、昨夜半より今朝に至る迄西南に當て砲聲を聞けりと蓋し待ちに待てる援兵の砲聲にあらざるかを疑へるなり
親王府内の觀音堂燒かる、伊兵警戒を怠りたるに由ると云ふ

八日

肅親王府大に燒かる頃來敵は砲と火とを以て専ら吾を苦しむ吾如何にもする能はず形勢日に益々非なり、午後十時又夜襲に遇ふ戦稍激し

九日

糧食漸く減じ別は専ら粥を用ふるに至る、砂糖醬油亦盡くるに垂んたり

んとすれば吾其破れ了るを窺て急に先づ之を撃てば敵狼狽して自ら之を塞ぎ既にして敵更に大に壁を破り來れば吾乃ち板厚敷なるものを執て急に其穴を塞ぐ彼れ乃ち壁を隔て、外より石油を注ぎかけ火を放ちて之を燒かんとす戦も此に至れば殆んど見戲に類せるの感あり

先月九日天津を發したりと云へるアドミラルシーモア氏の率うる援軍は朗坊附近迄來り居たる事は知るを得たれども其後何等の消息をも傳へざる也或人曰くシーモア提督遂にシーン、ノー、モア提督(seen no more)即ちモ一見ぬぬとの意)となれりと苦し紛れの名洒落といふべし

十二日

午前五時敵潛行して親王府内の吾戦線に迫り來る義勇兵川上李三氏善く戦ひ其三人を斃す氏は尙未成年の一

少年也今日の糧は粟、米、煖米の三種を混せる者中に
縁豆の黠々たるを見る

煙草漸く盡き今日給せらるゝ所ビーコック五本、正午
暑氣鏗金の勢なり九十六度に上る暮夜驟雨來り涼氣爽
然頗る人に可也

夜半英公使館の方に銃聲を聞く

十三日

是より先親王府漸く危からんとするや英伊換若干名援
兵として來る伊兵丘山の一壘に據る敵は午前の間専ら
之を砲撃し伊兵一人即死し二人負傷す

常時戦闘力を有せる陸戦隊僅に十四人一人は看護當
初北京に來れる二十四人の内十人は既に死傷せるなり
此日佛兵の捕へたる一捕虜曰く清政府は端王、董福祥
榮祿の三頭政治也と

午後六時十五分暮色蒼然として至る頃佛館の方面に於

十五日

公使會議は開かれたり、昨日の答書は送致されたり
此日、日獨塊の方向晝に夜に敵兵の來攻に會ふ

十六日

戰稍閑なり總理衙門復た書を送り來る

十七日

此日極めて平穩、四邊の敵兵は戰既に止みたりと信せ
る如く身に寸鐵を帯びずして三々五々吾胸壁の外に顯
るゝもの多し、吾義勇兵語を盡して之を胸壁内に招き
入れ其五人を捕へて司令部に送る其言ふ所要領を得ざ
る者多けれど皆既に戦ひ終りたる者と信せるが如し、
一兵曰く聞く外國兵は天津にありと
總理衙門の要求に従ひ敵は吾守備隊に近づかざる事、
我之を撃たざる事となる

此日佛の義勇兵一人敵の爲に捕へられたるが既にして

て俄然激しき銃聲起り久しからずして煙燭天を焦すを
見る是れ敵は晝間装置せる地雷を以て佛公使館の壁を
破り數十人館内に突入して火を放てるなり獨公使館亦
敵の襲ふ所となる獨兵善く戦ひ二十餘人を殺し敵彈八
百發を獲たり此間激戦殆んど二時間に亘る

十四日

一日一夜殆んど銃聲を聞かず

是より先十日密書を藉して將に北京に向つて進軍中な
るべしと想像せられたる外兵に投せんとして出でたる
一支那人あり、此日彼歸り來て曰ふ交兵巷を出で未だ
幾くならずして清兵の爲に捕へられ次て榮祿の本營に
送られ今日此書面を託せられて歸れり、所謂書面は
總理衙門大臣慶親王以下の連名にて各國公使に宛たり
(該書は前編外交文書中に在り)
此日晝夜共に戰稍閑也

十八日

佛の方面に來りたる一兵の言ふ所に據れば番士成天津
附近に大敗し遁は途に自殺せりと

十八日

午後天津より福島少將等の密信を齎せる使者來る信書
に曰く

シーモア提督は中途に支へられ又退路を絶たれ大に
困難を極めて先月二十六日天津に引き上げたり、目
下天津にある外國兵は日本三千、英二千、米千五百
露四千あり、第五師團は本月二十日迄に天津に着す
る筈、本月末日迄には北京に入るに至らん

嗚呼殆んど一箇月間重圍の中にありて寝ても覺めても
待ちに待ちたる援軍の消息は茲に漸く判明し十數日を
徑ば聯合軍は憑軍長驅して北京に來るかと思へば歎天
喜地の情抑へんと欲して抑る能はず憔悴したる顔色此

日のみは我も人も何となく照り輝くが如く見受けられ
たるもはかなしや

親王府東の胸壁外に於て官兵人夫など卵、野菜、西瓜
などを賣り來るものあり衆争うて之を購はんと欲し胸
壁外殆んど市をばす既にして總指揮官たる英國公使マ
クドナルド氏の命あり糧食委員の外妄に物を購ふべか
らずと

午後總理衙門の使者來る曰く獨公使の屍は禮を厚うし
て棺に收めあり、杉山氏の屍は百方搜索すれども未だ
之を得ずと

此夜西南に當て電光閃々として高く天に沖するを見る
從來援軍のサーチ、ライトなど云ひて騒ぎたるは思ふ
に亦是れ歟

十九日

回顧すれば清兵開砲以來茲に正に一箇月幸に休戦の

受けたる損害は賠償すべきも其以前は興らずと云へる
汝理の言われば教長は國家の赤子若し翻然悔悟して官
に對し邪教を奉せざることを誓はば其罪を許すべしと
宣言せり、李鴻章直隸總督となり義和團は公けに國家
の義勇兵となれる事亦此時を以て知り得たり

二十一日

檜原書記官破傷風となり危篤也

二十二日

晝間無事、夜に入てより猛雨盆を覆して來る四邊海冥
咫尺を辨せず行き慣れし歩哨線に迷ひ聲を揚げて其方
向を問ふ者あり

二十三日

東華門内北堂と稱する天主教堂あり、有名なるフアザ
ー、ラアヴィーエ氏の居る所、五月の末外兵入京する
や佛伊の兵若干を以て之を護衛せり既にして戦起り

約成りて一時小康を得たる如きも清國の不信不義固よ
り待むに足らざれば吾の警戒は毫も弛まず此機に乗じ
て専ら壘を高うし壕を深うして晝夜共に息はず、親王
府防禦工事亦漸く堅し

總理衙門此日公文を送り城上の米獨二國兵を撤去せん
ことを求め來る、交民巷南の城壁を敵に委せんか彼等
は高きに據て思ふが儘に吾を砲撃すべし争でか其求に
應ずるを得んや、吾より直に之を拒み去りぬ

二十日

休戦の約成りてより敵が著しく警戒を怠り一箇月以來
の上諭など亦吾手に入りぬ、大沽砲臺陥落後清國政府
は上諭を以て開戦の布告をなし苟且存を圖り差を萬古
に貽すは大に捷伐を張り一たび雌雄を決するに就れど
やと致圍ける事をも知りぬ、勇士成眞に陣亡し留任革
職の名を除かれたる事をも知りぬ、開仗以來外國人の

清兵の圍む所となり交民巷との聯絡全く絶た爾來朕々
たる砲聲の其方向に避けるを聞くこと多し、此夜亦是
あり、北堂には宣教師の外に教民六百餘ありと(未完)

北京籠城中の外交

文書 (二)

六月二十日に官兵の公使館を攻撃して以來絶へて交通
なかりし清國政府と公使館との間に不意の出來事より
交通の道開けて七月十四日に慶親王の公使館に寄せた
る書面は前記の如く各國公使一と先づ總署に移轉して
將來の取極めを待たれたしと云ふにあり翌十五日公使
館より總署行を斷り遣りしに十六日には政府より總署
に移轉の事は目下の如く各國公使館各所に散在しては
保護に困難故一箇所に移られんことを望みしに過ぎず
左れを已に各國公使之に賛成なくば政府は今日のみ、
に於て出來得る限り盡力して保護すべし又政府は更に
多數の兵を送りて義和團を征すべければ各國公使も亦
其兵に砲發せしめざる機にせられたしと通牒し來れり

因て英國公使は七月十七日之に對し返書して外國兵發砲は全く自家の防禦に止まり又今後も此の如くなるへしと云ひ又若し支那兵にして或は増壁を築き又は公使館附近に来るが如きことあれば我外國の護衛兵は止むなく發砲すべしと云へり然るに翌七月十八日朝政府の返書又來る其大意は今や双方に於て發砲せざるを喜び且つ前門東方の城壁より外國兵の常に發砲しあるを述べ之をして城壁を降らしめられしと依頼するに在りたり左れば同日午後英國公使は外國公使等の意見より目下の状態を論じて總署に返答し六月十九日總署は我々に北京立退の通知を與へたれば我々は運送の不便に付き進ぶる所ありしに衙門は遂に立退期限を延ぶるに就き同意の返答を與へられたり然るに翌二十日に至りて官兵は發砲を始め爾來今日迄絶へず官兵の發砲を破れり斯の如きは各國の歴史ありて以來會て前例なき所なりと喝破し六月二十五日御河橋上に掲げし揭示に付きて斯かる間に官兵の自由運動をなし以て新らしき攻撃を爲すに便利なる用意をなせしは清兵なりと云ひ又漸次相互の厚誼回復するを喜び猶外國兵をして發砲せしめざらんには先づ支那兵より發砲せしめざる様せら

れたしと云ひ城壁上の外國兵の事に就きては從來交民巷の攻撃は多く城壁上の支那兵よりせられたれば我兵之を下る能はずと答へ遂に氷及び菓物の輸入を求めたり斯くて七月二十五日に至り慶親王等より左記三通の通牒を寄せ來る

其一

七月二十四日上海なる英國總領事ワレン氏より支那政府は公使館を保護しあるに一の電報をも英國公使より受取らずして總署に對ひ閣下の電報を取次ぎ呉れと頼み來れり因て右の事を通知す若し回電を送られれば衙門は之を取次ぎを爲さん

其二

我等は閣下の書を領せり而して我が從前の信書中充分に意を悉さざりしものありしが如し因て今茲に充分に其意を説明せん

最初より今に至る迄政府は公使館保護を些も忽かせにせざりしことなるが匪徒の數漸く多く或は何如なる出來事の生せんも計られずして我兵も保護に窮することあるやも期し難し若し斯く大なる不幸を生じなば夫れこそ大事なれば暫時の立退を要求せし所以なり

目下各國の軍艦は我が所要なる地位(大沽を云ふ)を占領し而して猶天津をも圍みたり是によりて見るも戰陣の準備は尙は彼の處に進歩しつゝあるものにて閣下は如何にして之を制せんとするか已に閣下及び各國の公使にして平和回復を望まれんか之を處する天津の遙かに便利なるを信ず故に我等は更に我請求を再言して閣下が其行李を纏め其出發の日取を通知せられんとを蓋し我等に於ても運送船及び其他の準備あるとなれば豫め之を知らんと欲するなり

其三

過る一ヶ月餘間軍事の急あり閣下及び各國公使等本國なる家族の憂慮を慰めんが爲め必ず電報發送を望まるゝならんされ目今平和回復せしと云ふにあらざれば各國公使館の電報にして暗號にあらざり又軍事に關せず單に健康を報ずる種類のもの衙門之が取次ぎをなさん願くは此旨を各國公使に通知せられんとを

七月廿七日又慶親王より英國公使宛に耶蘇教徒に關して申來れる文に

聞く公使館内に住める教徒甚だ少からずと思ふに土地狭く天氣酷熱必ず非常の不便を公使館に掛け居るなら

北京に於て保護し難きは何故に途中を保護し得るか始めに保護し得ざりしもの何が故に末に保護し與ふやとの貴間に對しては蓋し大なる分別あるを覺ゆ蓋し市にあるは永久的のものにして道路にあるは一時に過ぎず昔し各國公使にして暫時の立退を肯んじ呉れなば我等は先づ之を通州に護送し夫れより小舟にて天津に直接に送り下るべく上下兩日にて足れり如何なる困難のあらんにもせよ多數の兵を以て一は水上を警衛して下り一は陸上を警衛せんには其時日も僅かなれば中途の恐れなき我等の保證する所なり之に反して永久に北京に滞留せば何如なる珍事の生せんも計り期すべからず何となれば其晝夜を論せず暫時の不注意も遂に取り返し

の付かざる大禍を生ずる恐れあればなり是れ明白なることなりと

貴書に曰く各國公使の北京滞在は却て一般の希望たる平和回復を便になすも之に反して我等此地を見棄てなば友誼の關係を再興せしむるに困難にして且つ多くの日子を要するならん是によりて之を見れば閣下が平和の恢復に意あることを知るに足る弊國に於ても又戰爭の禍を永く繼續するを欲するの意毫も之あるなし左れ

叢談

大隈伯の撤兵論評

ん今や人民も漸く静穩に歸したれば此等の教民は悉く之を出して其郷土に歸らしむるを得ん彼等も又疑と恐を去りて可なり願くは其數を計り且つ其外此の日を定め通知あらんことを斯くせば從て一般も和平靜肅に歸するなるべし

七月三十日各國公使の總署に答へし大要は右の二件即ち一は安全に我等を天津に送致すること一は耶蘇教民を充分なる保證を以て公使館より出すことの二事を議するに先ち我等の間はんと欲するは猶今日迄北堂の攻撃支那兵によりてせらるゝこと及び昨日より夜に掛けて北御河橋上に塙壁を築き其後より常に英國に向ひ發砲せしこと及び露佛の二方面も遂に今日迄發砲に遣ふことなり



僅かに一點の光明を認め得るものは我公使及び軍隊よりの情報にあらざして遠き英米二國よりの報道であるのは奇でないか

○露國は何を思ふてか今より十日程以前に列國に對し北京撤兵の事を提議したさうだが其真意はさうであらうか之を確かむべき必要がある、又之と同時に英米其他列國が之に對して如何なる意見を有して居るかも確かめねばならぬが我國の意思も列國に通告すべき必要がある

○我政府はイヤ露國の真意はさうだとか英米の意向はさうだとか只外國の意向を知事許りに重きを置いて居るやうだが我國の出兵した理由は云ふまでもなく我國の名譽と利益を保護する爲めであつて決して列國の雇兵でないから撤兵に就ても我國の自由意思なるものがないはならん

○去五日の閣議に於て愈々北京撤兵の事を可決したとの説もあるが實際はさうだか少々受取れない話である吾輩の考を云へば北京の撤兵敢て不可なりとは思はないが今日に在て其利害を論斷する事は決して出来ぬはざる事であらうと思ふ

○何となれば清國の事情は今日に在ても總て暗黒界である成程軍隊の働作に就ては時々情報も来るやうだが肝心かなめの我代表者たる西公使よりは今に何等の情報も来ないでないか

○清皇帝及び西太后の禁座と云ふ事実は確らしいが今は保定に在るとかイヤ大原府に留まつたとか之すら風説許りで確かむべき公報には接しない此暗黒界に在て

○北京に在留する公使及居留民を救援するが唯一の目的であつて、其目的は既に達した今日であるから最早撤兵するもよいとか云つて居る一種の樂天家もあるが是は頗る理由の分らない話である

○成程公使及居留民を救援する事は達し得たが清國政府の秩序は既に回復せられたであらうか通商貿易は安全に行はれるであらうか今日に在ては其主權者の所在すら分らない場合であるから僅に公使及居留民を救援したと云つても軍隊の目的は達し得たものとは云はれない

○少なくとも主權のある所を詳にし政府は秩序を回復し通商貿易を安全に復する迄は軍隊の責務を盡したるものとは云はれない又假りに主權者が大原府に在りとするも之を圍繞するものは當の敵たる端郡王の一派である之を擁護するものは蓋福祥部下の兵勇である、然

らば其主権のある所果して何人であらうか夫れすら分らないではないか

○清皇は今回の事變を以て自己の不徳に歸し罪を一身に負ひ國民に謝すると同時に哀を列國に請ふが如き詔勅を發せられたが其形勢にして一變せざる限りは秩序も回復し主権も回復したものと見られない見られない以上は兵を撤する理由がない

○一説には清皇帝及國民に安堵せしむる爲兵を天津に引返し而して後徐ろに秩序の回復を企圖し主権の回復を謀るのであると云ふ事であるが果してさうであるならば天津も撤兵し太沽砲臺も還附し隻兵を清國に留めないので一番よいだらう

○前にも云ふ如く清國の事情は今尙暗黒界で何にが何やら更に分らない今日であるから撤兵の利害を論断する事は出来ないが兎に角秩序を回復し主権のある處を

と同じで相手の出様一つで隨機之處置を取らなければならぬから我輩は外務に籍を置きながら青木外相にはトント面會した事はないから能不能は知らないが世間では却々手腕家だと云ふから今回の事に就てもうまくやられるだらう

▲西公使よりは何等の報告もないと云ふが事を處理する上に非常の不便であらう併し今回渡清した内田君は通信の不備を補ふが主要の用務だと云ふ事だから遠からず事情が能く知れるだらう

▲北京撤兵の事は中々喧ましいが我政府は幾部隊を残して其他は引揚げる事に決したと云ふ事だ、是は時宜に適したる處置だらう

▲清國の秩序を回復する迄は駐兵の必要ありと云ふものもある様だが之は餘程考へものだ只秩序回復と云つても清國全體の秩序回復でなく只皇帝をして北京に歸

確かめ其主権者と我代表者を舊の如くに結びつくるまでは決して撤兵すべき理由がないものと吾輩は思ふのである

○殊に列國の意向を窺ひて夫に倣はんとする我政府の態度に至りては更に服する事が出来ない、我大帝國は我國家の名譽、我國家の利益の上より出兵した以上は我國家の自由意思に従つて斷定すべきものであると云ふ事を疑はない

加藤高明氏の對清談

支那の事情は今に暗黒である、我輩は籍が外務に置てあるから聞き質すの便宜はあるがまだ聞いた事はない又聞て何如すると云ふ考へもなから聞きもしないが聞た所で能く分つて居るまいと思ふ

▲我當局者は如何云ふ考へであるか之も聞た事はない別段之と云つて定まつた事はない様だ、外交の事は甚

らしめ端郡王、剛毅等頑迷の二類を退けて舊の如く皇帝をして主権を握らしめ様と云ふには大兵を駐めて置く必要もない

▲清國全體の秩序回復と云へば夫れは容易な事でない少くも清國を背負つて立ち斃れても決して止まない決心でなければいかぬ

▲今後如何に處分するかと云へば今は實に答へ様がない只困つたものだと云ふより外はない之に就ては遠からず列國會議を開くだらうが本國の意嚮を確かめ必要も起り又利益の獲得上にも種々の議論も起り其落着を見るは容易の事ではないだらう

▲まさか分割などの説を擔ぎ出す邦もあるまいが償金の事は必ず其問題に上るだらう併し清國の現状は一時に償金を出す實力もなく何れ年賦にて辨償する事となるだらうが其財源と及び之を如何なる監督の下に置く

かど云ふ事は中々考へるものなれば既に外債の擔保となつて居るから致方がない外には支那政府の專賣なる地位のものであらう併し是丈では逆も足りませぬ夫れ等の財源調査も頗る必要だ

▲夫れから我輩のをかしく感じて居るのは北京駐紮の公使の資格である今現に北京に居る各國の代表者は完全公使と云ふ事が出来様が主權者の公使を親任した對手國の主權者は蒙塵して主權を失ひ自由意志と云ふものを有して居ない今日であるから資格の上から云へばチトをかしの様だ

▲殊に殺害に遭ひし獨逸公使の後を受けて來りし人の資格に就ては尙更變なものだらうと思ふ併し之を理窟の上から云のみで公使と云ても別に差支はない

前露國公使カシニ伯談

前駐清露國公使カシニ伯は先頃ロシヤの巴里通信員

せる山東より起りたるものにして余は獨逸人が能く極東の事情を了解せざるを惜しむ者なり元來支那人に對する取扱ひは専ら誠實丁寧を旨とし飽迄も言行一致ならざるべからず而して英國も獨逸も暴行脅迫を以て清國に於ける政策の基礎とせり支那人が一般に何事に就ても歐洲人を嫌忌するは自然の理數のみ且支那人が歐洲人を嫌忌する他の原因は宣教師にあり就中八百名の羅馬加特力教派宣教師と二百萬以上の改宗者は支那人の蛇蝎視せる所にして英米兩國の宣教師は總數千七百餘名此派の改宗者亦約二萬七千人に達す而して支那人の改宗者なるものは加特力派も新教派も憐れむべきものにして金錢のために往々所屬の宗派を變換するあり人民の此等改宗者を侮する豈怪むに足らんや加之清國官吏と爭議の絶間なきは全く基督教信者あるが故にして其辦此等の信徒は決して歐洲人を庇護せざるなり

に對し支那問題に就きて左の如く物語れり

余は清國の變化に與驚せり余は清國を去る當時に在て清兵の武器と謂へば弓と矢のみ稀に銃器を有するものあれば全く舊式にして役に立たず雷管も彈丸も銃砲に合はぬが一般なりき又余は幾度となく清國軍隊の觀兵式及び訓練を見物したるが其の動作は實に抱腹絶倒に堪へざるものありし會て日清戰役の後清國の將官に對し清兵の武器は總て新式のものならざりしを惜みたるに右の將官は結局舊式の兵器こそ上等なりと答へぬ過日埃國に在るクルツン會社の代理人は余に對し昨年中會社より七十一年式の改良モーゼル銃十二萬五千挺と之に對する彈藥銃一挺に付き各一千及び舊式銃三千挺並に之に附隨する雷管、大砲百五門と猶此外に大沽砲臺に据付くべき大口徑の改良砲若干を支那政府に賣込たる旨を明言せり却説今回の暴動は最初獨逸人の占據

之れ余が宣教師を以て支那國民の憤恨を激發せしめたる主因の一に數ふる所以にして彼の二百五十年間繼續したる現朝に對する不満も蓋し其一なりと謂はざるべからず

北京に於ける各國公使館の地位は從來常に危殆なりき余の北京に滯留せる當時に在て露國の權勢非常なるものにして何時も總理衙門に赴くの必要なく事あれば各大臣より余を訪問したる位なりしに拘はらず其滯京を以て余の生涯中最も危険なる時期の一として記憶するなり余は危険の模様ある時は市街に出で、支那人と語を交へざる様常に館員及び召使に注意せり夜に入て支那人が諸門を閉鎖する毎に滿洲市街の牢獄に在るの感ありき今も忘れず或時支那の大祭日に數千の勞働者北京に亂入して兇暴の所爲を逞うせしに依り露國の海兵を入京せしめんと欲し承諾を求めたるに總理衙門は

之を聞入れずして公使館は何處までも守護すべき旨を
明言せり然れども清兵の亂暴如何にも甚しきを以て余
は強硬に清兵の立退を請求し且つ先例を示して危険の
場合に兵員を入京せしむるの権利あるを主張し漸くに
總理衙門の反對を打破りたることありき

(中略)慶親王は氣力に富める有望の人なり余が親王と
相見たる時は總理衙門の議長たりしが其頃親王は西太
后との世柄面白からぬ有様なりさ而して余の知れる限
りに於て支那人中望を囑すべきは李鴻章にして彼は充
分に歐洲の勢力と目的を解得し居るのみならず一たび
計畫したる所は必ず遂行するの氣力あり最後に動亂鎮
定の事業を日本に委囑することに關し余の意見を述べ
んに若し清國に於ける列國の利害を數字にて表示すれ
ば露國の利害は九割にして他の列國は相合して一割に
過ぎず斯る状態の下にありながら露國にして其位地を

日本に譲らんか極東に於ける露國の權勢は忽に失墜
すべきのみ云々

英國貴女の北京籠城談

過日入京せし北京籠城者の一人駐清英國公使サーク
ウドマクドナルド令妹マクドナルド嬢か其旅館帝國ホ
テルに於ての籠城談は左の如し

○籠城の決定 形勢頗る不穩にして何時義和團匪の
侵害を蒙るべきや計る可らざるに際し各國居留民は
極めて不安の念を抱きし折柄清國政府より公使館引揚
の事を公照し來りたれば各國公使館居留民は引上準備
に汲々たりしに六月廿日時ならぬ銃聲居留地の一隅に
轟き獨逸公使殺害の悲報も來り事態頗る重大なり官兵
までも團匪に化したる以上は清國政府の保護頼むに足
らざるを明瞭なれば引揚の途上に殺さるゝよりも寧ろ
籠城して防禦に従事することに決定したり此時に於ける

我々婦女子の感想は果して如何なりしか、一旦清國政
府の保護に依り安全の地に避難せんとの一縷の希望忽
ち絶てて虎狼の窟に居殘る事となりては心細き言はん
方なく今其の時の感情を口にする能はずされど此の上
は死しても決して恥辱を受く可からずと英國公使館に
避難せる各國公使館の婦女子と共に堅く申合せたり
○砲撃頻々 既に籠城に決せり日夜斷續敵の襲撃を
受け銃砲の聲轟々として彈丸は公使館の壁を貫き我々
の身邊に飛び來る時毎度寒心したりしが親王府に火の
付きたる時最早絶望と思ひたり我公使館が虐殺せらる
ゝは一時間餘の後ならんされば我々婦女子は互に心を
固めて最後まで悪徒に對抗を試みたる上立派に死なん
と誓ひ居りしに防禦線善く保たれて敵は遂に退却し一
同蘇生の思ひを爲したる時の事を頼みれば今更夢の如
き心地なり

○義勇隊の奮戦 僅々なる義勇隊は陸戰隊と協同一
致の態度を以て能く防戦せり日本陸戰隊の奮戦は勿論
の事なるが平素の訓練なき日本義勇隊の勇闘は頗る目
覺ましかり數千の敵兵が區々たる公使館を砲撃する
事なるに遂に防禦を全くし得たるは支那兵の弱さが故
かも知らねども我々は確かに我防禦隊の強さが故と思
へり殊に又義勇隊の強さが故と思ひし事もありたり殊
に新聞社の村井氏が獨り戦線に出で勇敢に奮戦し若く
は防禦工事に熱心従事し館内に籠居しては快談を以て
我々を慰諭し一舉一動熱誠を以て行動せられしは嚴然
たる一箇のゼンツルマンにして稀に見る所の好丈夫と
思へり

○戦死の慘、看護の苦 各國義勇隊にも戦死せる者
多く日本の檜原、兒島の二氏及安藤大尉等は専ら防禦
工事に従事中に傷きて終に戦死せられたり檜原氏の戦

彙報

守田義勇隊長

三十一名の義勇隊を指揮し陸軍隊と共に防禦を全うし
たる隊長は歩兵大尉安藤辰五郎氏にして氏は柴中佐の
命を奉じ原海軍大尉と共に隊員を指揮して防戦に力め
七月六日官兵大襲撃の當日敵弾の爲め胸部を貫通せら
れ即死の不幸を見るに至りし事は一般世人の知悉せる
所なるが同氏に代りて義勇隊長となり非常の勇氣と膽
力とを以て終に能く防禦の任務を完うせし勇將は北京
日本公使館附武官補員として三年前より渡清し過般來
滿洲旅行をなして地理人情風俗を熟察し已に歸朝せん
とせし折柄今回の事變の爲め籠城中の一員となりし歩
兵大尉守田利造氏(福岡縣人)是なり氏性質剛毅にして
沈勇兵士と稱食を共にし難に赴くや衆に先んじ身に就



死に對する同夫人の態度に至ては頗る敬服感嘆の外な
さなり同氏の重傷を負て病床に横はるや同夫人は終始
一睡をも成さず誠實と貞節を以て看護に従事せられし
も終に遠逝せられたる時同夫人は涙を呑みて愁苦を忍
び居られなり而して我々婦女子をして一層其哀情を察
せしめたり
○西瓜の宴會 籠城中に於ける宴會とは頗る香氣の
如くなれど北京居留地外頗る靜穩となり敵兵銃火を止
めたる時、各國居留民は慰勞の宴を開きたり固より糧
食缺乏し居れば佳肴美酒のあるべき筈なし、西太后よ
り贈られし西瓜を割りて即席の食物とし互ひに相談笑
し殆ん籠城の苦辛を忘れたる事あり是れも苦中の一
樂なり云々

くや人に復る寡黙にして嘗て籠城中の武功を語りし事
なし故に世人未だ氏の勳功を知るものなし氏は數年前
第六師團に勤務中選抜せられて參謀本部員となり更に
駐清を命ぜられしが義勇兵は勿論陸軍隊の兵士に至る
迄皆心服して手足の如く働らき一行の一人は曰く若し
守田大尉にして在らざりしならんには我日本軍の守備
せし肅親王府は敵の爲めに占領せられ英國公使館の如
きも同府内小丘より狙撃せられて死地に在りしが其の
今日あるに至りしは全く氏の功に歸せざる可からずと
氏は今尙北京に駐まり柴中佐を扶けて民政廳の一部員
として勤務し居れり

北京の近況

▲慶親王 是皇帝の全權委任状を受け李鴻章の來る
を待ちて談判を開始せんと云へり

▲慶親王不日各公使を訪ふ筈

▲露兵の派遣 本月五日露國鐵道隊南苑の南方に於
て敵より襲はれ五名の負傷あり直ちに歩兵一大隊騎兵
百、砲四門を送れり

▲清國顯官の末路 直隸總督裕祿は北倉敗北後家族
殘らず自殺し李秉衡は通州にて戦死す頑固黨徐桐も自
殺せり剛毅端郡王の所在は不明なり北京に在る大臣等
個人として各國公使を訪問する筈

▲清國の顯官 北京陥落前より今日迄殘留せし清國
顯官の數少なからず兵部衙門大臣敬信、總理衙門滿州
派大臣混崗、理班員尙居裕經、總理衙門書記官朴喬、
同通譯官唐家棧の如きは大に聯合軍の爲め便利を謀り
つゝあり

▲皇城内の清兵 八月廿八日各國兵の分列式を舉げ
し前日より敗殘の清兵皇城内に隠匿せりとの情報あり
事實に相違なかりしかば日本軍は再三書翰を以て城外

に立退を命ぜしも、踏退逐して應せず因て福島少將は同日午前七時自ら皇城内に入りて厚く説諭を加へ其より分列式を擧げたるが其の時は既に何處へか立退き居りしとぞ

▲各國公使會議 北京陥落後は各國公使等も自國の公使館に還へり日々公使會議を開き支那人の鎮撫其他の件を議し居れり

▲羅漢公館と引移 北京陥落前防禦線外に在りし白耳義、阿蘭陀、埃太利、伊太利の四公使館は兵匪の爲め燒拂はれしかば陥落後引移るべき場處なきにつき埃國公使館は日本占領區域内元警視總監の住居に引移り伊國公使館は西班牙公使館の隣りに引移りたり

▲死傷多き國 事變發生以來七月廿六日の記録によれば日英獨佛の四國は最も防戦に努めしと同時に死傷者の數も亦た多く出だせり即ち日本の死者は百分の廿

にして傷者は百分の五十なるが英國の死者は百分の廿四に相當せりと云ふ

▲露獨兵の入京 一方に撤兵の提議を爲せりと雖も露國の兵若干は北京陥落後入京し獨逸亦た若干の兵を入京せしめつゝあり北京昨今の狀況は到庭撤兵を許るさざるべしと聞く

分捕の馬蹄銀 (開かずの金庫)

八月十五日聯合軍の北京に入りたる時我軍は戸部の馬蹄銀を分捕りたる由なるが其後達したる詳報に依れば當日山口中將の師團司令部が城内に進出し公使館内に移ると同時に我が占領區域内なる皇宮附近の戸部に向つて一箇中隊の守備兵を派遣して調査せしめしに同部には五間張に十間の大寶庫ありて其の内部には馬蹄銀を以て充たされたることを判然し師團諸隊の駄馬を使用し該寶庫内なる銀貨は悉く本邦公使館内に運ぶことゝ

なり一晝夜間を費して漸く其の目的を達したるが其後占領區域協定の結果、同部は露軍の占領地となりたるを以つて我守備隊を引揚げたりと又た皇城内には建都以降數百年間の不用金銀塊を貯藏せる「開かずの金庫」あり其内部に充備せる金銀の額面は果して幾億萬兩に達すべきかを知れるものなきはとなりと、こは世人の知る如く清國政府は如何なる極刑に處すべき大罪人にて金銀を以て其罪を宥すの方法なる故斯る罪人より徵集せる不淨金銀は之を金庫に貯へたるものにして此「開かずの金庫」は即ち不淨金銀の貯藏所なりと而して此の驚くべき大寶藏は今尙ほ他處の軍隊にても自由に開くを得ずして其儘となしあるが遂からず開放せらるゝ時には其の内部より現はるゝ金銀は實に莫大のものならんと云ふ

獨逸政府の折衷提議

獨逸皇帝の立場よりは露國の撤兵に全然反對するを得ず去りて之に従ふ可からざる事情あるにより斯の如き折衷論を以て一方には露國との關係を繋ぎ又他の一方には列國の協同を保ちて其中に自國の要求を貫かざるを得ざる可きなり既に我政府に於ても去る金曜日(七日)に於て獨逸の提議を受けたる模様あり獨逸は列國に對して齊しく同様の提議を爲したるものならん而して此提議に對しては豫め露國の同意を取りたるならんと噂せらるる想ふに露國の其撤兵通牒の不入望なりし事に就きて十分自覺し居る可きにより此れに譲り合ひて協同に復歸するの端緒を得ん歟、此れならば列國政

露國の進退

府にても餘り不同意はなからんとの事なり
皇帝西太后は今何れの地に在るや審をらされども慶親王は媾和委員の任を帯びて北京に歸り李鴻章も亦同様の勅命を拜したりと云ふ排外黨の爲めに擁せられて地方に蒙塵し進退も自由ならざる主權者の勅命、果して正當と認む可きや否や外交界には自から議論もあるとなれども帝室を北京に迎ふるは容易に非ざるのみか前記の人々は支那に於ては相當の人物にして他に適任者を見出すは頗る困難なる可し且つ何時までも茫然として空屋同様の北京に滞留するは列國の迷惑とする所なれば其資格に於て多少備はらざる所あるも結局之を全權大臣と認めて媾和の談判に取掛ることならん果して斯る成行を見るに至らば露國は如何に進退す可きか北京に兵を留むるは媾和の道を開く所以に非ずとして

撤兵并に公使引揚げの事を列國に通牒したることなれば遠からず之を實行することならん北京より達したる電報に據れば北京の公使會議に於て露國公使は自分は本國政府より北京引揚げの命を受け居るが故に其議に參與するを得ずと明言したりと云ひ又一説に露兵が北京城外の馬家舖停車場を占領したりとあるは即ち兼ての提議に従ひ同地まで其兵を引揚げたるなりと云ふ否な露國公使は既に北京を去り軍隊も亦早晩此地を退去す可きは疑ふ可らず各國公使并に其軍隊は尙ほ北京に留まりて追々談判を開かんとするの色あるに際し露國が獨り其列を脱して北京を去るは世人の聊か奇異に感ずる所にして若しも列國が北京に於て媾和會議を開くに至るも露國が之を傍觀するともあらばいよく奇觀なる可し或は露兵并に公使が北京を去るも遠く本國に歸るに非ず何れ通州か天津の邊に留まることなら

廈門暴擧の詳報

んなればいよく北京に會議を開く場合には又々入京するに差支なかる可しとの説もあらんなれども一旦媾和に害ありとして退去しながら跡に残りし列國が談判の道を開きたるを見て再び北京に引返へすも妙なりと云ふ可らず其際に處する露國の進退は如何、或は結局歐洲に會議を開くに至る可きか此處一寸見物なる可しと云ふ

伯林新聞紙と撤兵問題九月五日伯林發

北京撤兵に關する露國の提議は一般批評の大問題となり當國諸新聞紙は一輻歩調を以て右の舉動を時機尙早くして危険なる結果を生ずべしとの意見を唱へ先に報告したるキヨルニシユ、ワアインングの論説を賛成せり而して多數の新聞紙は露國の該舉動は清國に於ける自己の政略を補助するものたるを疑はず且つ獨國政府が露國に與へたる回答の意を賛助せり

暴徒本願寺を燒く

北清に於ける排外熱熾んなるに隨ひ同地にては排外熱殊に排日熱は冥々の中に其氣焰を高め來り遂には左の如き激文を各所に貼付する者あるに至り
義和團は天地の正義なり、術を神に受て之を人に傳ふ、刀戟も入らず槍も中らず、雲を掣し風を禦し進退自在なり、北より南に及向ふ所敵なし此大團友數千百人、神を俸じて此に來り、大に同志を徵す、臺灣割據は神人の恐る所、回復把握此剎那に在り、爾等信を授じ速かに來りて兵を棄れ、尙し且らくも遲疑せば天刑立ころに至らん(光緒廿六年七月二十日)
其原因は未だ明瞭ならされども日本の態度が清國と共に列國に當るならんと信せしもの其一たび兵火相見ゆるや日軍は先づ大沽に先登して勇名を轟かし其天津を

攻陥するや、日軍又首力となりて清兵を追攘ひ列國軍をして爲めに顔色なからしめしもの端なく上海附近の清人をして先づ日軍の態度を疑はしめ漸く進んで南清一帯の排日熱となり更に激して今回の暴動を見るに至しもの如し

茲に東本願寺布教場留守僧宮尾某は二十四日の夜漳州布教師高松誓と共に鼓浪嶼なる某氏が營める佛事に會して深更に至るまで法談に餘念なく其留守邸に過般漳州より引揚げ來りたる片貝某と云ふ者土人ボーイ一名と共に留守し居り何も其夜は二階下の寢床に入て就眠せり斯て深更に及び四邊ヒツと靜まる頃怪しくも布教場の外面に當りて數發の爆聲あり兩人其音に驚きて夢を醒ませば又更に爆發一聲之を聞くに正しく銃聲なり依て直に床を蹴て起き上れば此時早く彼時晚し階上階下一面の猛火に包まれて灰燼既に室に滿てり片貝某

の事の急なるを察して取るものも取り敢へず裏門より私かに遁れて一目散に逃げ出し土人ボーイも片貝と相前後して周章狼狽門外に逃げ出でんとせるに此時一群の匪徒門外に徘徊して窺ふ所あるが如くなりしが右の土人が門を出るを見るや匪徒の一人は鈍刀を擧げて土人の足を拂へり、されど幸ひにして刀背を浴びせたるまでなりしかば傷淺く辛ふじて身を以て脱走し片貝とは別れくとなりて波止場に出で其より鼓浪嶼なる高松の寓所小島屋に駆け込みて事變の顛末を報せる折しも片貝も息返き切つて逃げ來れり

高千穂利泉の水兵揚陸

此夜宮尾は高松の寓居に一泊し居りしに偶々匪徒暴行の報に接せしかば宮尾は取敢へず領事館に馳付て事變の顛末を上野領事に急報したり領事も豫て厦門居留地には近來不穩の形跡ある際のこと云ひ且つ事態の容易

ならざるを測りて直ちに港外に碇泊せる警備艦和泉、高千穂の兩艦に陸戦隊の上陸を要求し同時に在厦門の日本居留民に急速引揚の通牒を發せり

拂曉に及び軍艦和泉は領事館護衛のため一小隊の陸戦隊をボートに搭載して鼓浪嶼に來らしめ同時に高千穂よりも對岸厦門の物情を偵察せん爲め一隊の水兵を上陸せしめたるが此時匪徒は既に四方に遁走し去りて街頭又た隻影を認めず各店舗も堅く戸を鎖して滿城寂寥たる有様なりしかば偵察隊は一時艦内に引揚げたり、されど領事は万一の事あらんを慮り同日厦門に在る臺灣銀行、東亞書院、三井物産を始めとし其他各街に散在せる日本諸商人に注意する所ありしかば何れも鼓浪嶼に引揚げ來り領事館附近は頗る雜踏を極めたり同日午後に至り盡語百出して人心何となく騒ぎ立てる際偶々日本郵便局の門外に「助清滅洋」と題せる一片の

貼紙あるを發見せる者あり是は前夜匪徒の暗きに乘じて惡戯をなせるものなるが是より土人の舉動穩かならず中には日軍大舉し來つて厦門を全滅せんと云ふ者あり東洋鬼、倭奴、蕃仔などの嘲聲罵聲は街頭到る所喧々として之を聞かざるなく形勢は時々刻々切迫して何時不測の變を見るやも計られざるに至り現に本願寺燒跡檢分のために派遣せられたる我領事館付巡查は暴徒のため毆打されたりと云ふ

是に於て高千穂よりは更に二小队の陸戦隊を上陸せしめ和泉艦は内港に碇泊して警戒し尙ほ領事館の直轄に屬する東亞書院は清國官衙より兵勇を派して警衛するの議ありしも都合に依りて之を謝絶し陸戦隊を以て警備し居れり然るに茲に怪しむべきは各國居留民の舉動なり彼等は北清事件後些細の事にまで心を惱まし南清地方に少しく不穩の警報傳はるや忽ち各地の宣教師を

廈門に引揚げしめ加之射的會などを起して盛んに自衛の道を奨励せしめたるにも拘はらず今回眼前に起りたる不穩に對しては意外にも冷眼もて之を看過し何れも無事平穩を裝ひ居れるが某領事の如きは今回の事變を以て一人の火災なりとし決して匪徒等の所爲に非ざれば安心せよとの意味を居留民に通牒したりとぞ

廈門出兵の顛末

廈門地方の狀態は前項の如く陸戰隊の上陸警備せるにも拘はらず同地暴民の舉動は日々益す不穩の有様なるより我居留民は領事の注意に依りて鼓浪嶼に引揚げしも尙は同地には七百有餘の帝國新領土の臣民あり之を引揚げしむる事申々容易の業にあらざれば彼等は今尙は紛々擾々たる廈門に留まり居りしに去月廿七日に至り高千穂艦長より廈門の形勢危険なる實狀を述べて臺灣總督府に陸兵派遣の請求ありしかば總督は同夜十一

時に至りて臺北守備歩共第二大隊、砲兵第一大隊及び工兵第一中隊に出發の命令を下し歩兵第二大隊と砲兵大隊の内山砲中隊は即夜出發準備をなし翌曉基隆に輪送し又工兵第一中隊は廿九日を以て同じく基隆に出で土屋少將は混成枝隊司令官として其屬僚を從へ廿八日午後三時發の汽車にて出發せり
右等の諸隊は二十九日を以て悉く御用船臺南丸明石丸の二隻に搭乘し今や將に廈門に向けて出帆せんとする際突如として臺北陸軍幕僚參謀より諸隊輸送中止の命あり間もなく總督の名によりて混成技隊は全部臺北に歸還すべきの命令は傳へられ今まで意氣軒昂虹の如くなりし全隊も蕭索として臺北に引還せしは三十日の事なりし

露軍の戦況報告

八月二十日附にてアレキシーフ中將より其筋に報告し

清廷大會議の顛末 (承前)

六月十七日義和團匪は引續きて財を掠め人を殺し家を焼き中央電信局をも焼拂へり而して北京の政治は全く義和團匪に歸せしもの、如く人々恐れて已を得ざる事あるに非ざれば屋外に出る能はざるに至れり六月十八日徐用儀、袁利其他漢人派の二大臣都合四名は事態愈々切迫して滿洲派大臣等が義和團及び甘肅人の建議を賛成し益々各外國人に對して開戦せんとする意思あるを察し最早事救ふべからざるに至れるも少なくも休戦を得ん爲め最後の盡力を爲さんとして其生命を賭して義和團及び甘肅兵數千人の集合せる各國公使館附近の街路を通行せしに義和團匪は此時既に新式の兵器を以て武装し翌日を以て外國公使館を再攻撃する準備中なり
然れ共右四大臣は幸ひにして悉く公使館街に來り米國公使館に入れり然れども其途上にては恐嚇の聲喧

たるもの左の如し

リチーウ中將の報告に依るに八月十五日夜露軍は北京の東門を襲ひ眞先に城に入り眞先に壁上に旗を立てたり、銃砲の交戦十四時間絶えず燃焼し清兵は烈しく絶えず我兵を射撃し遂に其位置を棄て去れり、東部西伯利亞第十狙撃聯隊長アンチューコフ大佐戰死し西伯利亞第一軍團參謀長ワシレンスキー少將第二狙撃聯隊長モードル大佐外士官四名重傷を負ひ兵士二十名戰死し負傷百二名あり、聯合軍は他の門を攻撃し同日北京に入れり云々

又關東報の特派員八月十五日北京發報に曰く北京の歐洲公使館頗る危殆に瀕するの報ありたるに依りリチーウ中將はワシレンスキー少將をして第二聯隊第二中隊第十聯隊第一中隊を率ゐ前哨として聯合軍の至るを待たず成るべく速に北京に入らしめんとして北京に向け出發せしめたり、ワシレンスキー少將の前哨隊は強雨を冒して北京の東門に突貫進行し三十分を経て爆裂彈を以て門を破壊しワシレンスキー將軍眞先に北京に入れり、清兵は終日終夜我が前哨を射撃し翌朝露日兩軍の首力近づき米國兵運着し英兵は歐洲人救助に干與せざり云々

足れり矣と二人計議已に定まり毫も懼色無し惟密に家人等を遣はし零細軟を帯び潜に京を出で南歸せしむ蓋し逆め生理無きを料り以て家人と永訣せるなり李秉衡京に到るに及び太后、端王の前に於て備に東南の強臣旨に違ひ約を立つるを陳べ并に五月二十五、六日内力を盡して洋教を保護せよとの上諭あり南北分治自ら相矛盾せり等の語ありしにぞ太后と端王は立に許、袁二人を召して改旨の有無を詰問せしに二人地に伏し泣いて奏すらく臣等國家土地人民社稷を保たんと欲して見を起し斗膽更易せり罪萬死に當る乞ふ家屬の株連を恕せよ使ち是れ恩天地に同じと太后は更に怒色無かりしも端王李秉衡と大聲指斥跪いて太后に請ひ立に典刑を正せるなりと云ふ

モスコ—新聞所論

日本の出兵に關して論ずる所左の如し

ならざる關與を有するならんを信せんといふ露軍の日本軍に對峙せざるべからざるの必要は政治其の他の重要な根據に基くのみならず戰畧上の推定にも基くなり
日清戦争は明かに日本兵士の異常なる忍耐力を具ふると善く秩序を守りて進軍し兵站輜重の諸部間然するなきを表證せり併し日本兵の行軍は餘り敏活ならず平均日に九露里半を歩めりと稱て吾軍隊を看るに長距離を歩むに極めて短少の時間を費し決して日本兵の比に及らずされば北京攻撃の進行を早むるに非常の便宜を興ふるや疑を容れざるなり云々



川説

金鵝勳章 (二)

聽 濤

清三郎は、少時何とも云はずに立ちすくんで了つた。松井はまた非常な憐れ方だ、

日本が三四萬の兵を出して北京を救拯すとの一事は随分時節柄趣味に富む問題たるを失はず軍事上よりこの問題を論せば余輩は日本に委託するの利を看出すべし日本は動亂の湧起する方面に近くして迅速に動員を行ふべしこれ一千八百九十四五年の戦役に徴して明瞭なりとす次に運輸方法の完全せる事も日清戦争に獲たる經驗なり是等の事情を綜合せば日本に依頼して北京を救拯せば好機會の逸するなく優にその目的を達し得べきなり然りと雖も政治上より之を観察するに支那變亂の漸く局を結ぶ緊要なる時機に際して日本にして或報酬を獲得せしむるは一千八百九十五年下關條約に依り獲たる地位に復歸せしむるに非るか即ち下關條約に依り日本は亞細亞大陸に根立し漸次蒙古人種の運命を掌握するの勢力を獲たりしなり
斯る恐るしき遠景は獨逸皇帝に看破せられ「諸民族よ神聖なる福樂を防衛せよ」との言葉と共に露佛獨の三國は干渉を試み龍江の沿岸に十萬の兵士駐屯し日本沿岸に五十三隻の軍艦船艦相望みて集中せしが爲め日本は遼東を還付せり
是に據りて之を觀るに日本兵の北京を指して進入するは前記三國の見地が一變するを表示するか
余輩は爾か憶想するの確實ならざるを信ず故に日本軍と略同一の地位にある露軍も北京攻撃に當り僅少

「君どうする？ すぐ行くかい、ね、君。」
「然すと歸つて下さいって、下宿の方は後から片づけさせるからって、父様が被仰いましたから、すぐ御歸んなさいな。」
「お、ねは事情を知らないの、頻にせきたてるが、清三郎は一言も返事もせず、たゞ腕を拱いて居るのである。」
「ね、清さん、阿父さんも今日は大變機嫌が宜いんですから、何にも云やアしませんよ、夫に清さん連れ歸らないと、私が叱られますから、ね、ね。」
「ム歸らう。車を呼んでおくれ。」
「さも決心したらしくさっぱり命じたので、驚いたのは松井君である。」
「お、君、君歸るのかい、せめて君、ちよいと……その、君、あんまり無情ぢやアないか、まだ君時間はお

るのだせ。

「松井君、折角約束したんだが、他の事とは違ふからね、悪しからず思つて呉れ給へ。また例の方へは甚だ失敬だが貴君がこれから行つて、この事を話して、他日歸宅した時に、萬事御話するからと云つて置いて呉れ給へ。」

「だけれども君、まだ時間があるんだから、ちよいと逢つて話を……」

「いや今の僕は、先刻の僕は身躰は同一だが責任が違ふ。もはや召集を受けたからは、無益ぬ一婦人の事でもずくして居る處ではない。貴君が逢つて話をして呉れ、ば夫で充分だ。是から叔父の處で準備をしてすぐ入營する。」

「だけれども……」

「いやもう夫は……。だが此家の荷物をかたづけな

が来てしますから、清さんはもう何も係はずに歸つて下さい。」

松井を見返つて

「あなた御挨拶も致しませんで、御朋友の方で被在いますか、毎度清さんが御厄介になりました、御手傳ひまでさうも憚りさまで。おかみさんさうも種々御世話になりました。何だか始めて戦争へ出るんですから、嬉しげな悲しい様な、私はもう何ともかとも、腹の中はひんくり返る様でございますよ。」

さすがは商賣屋の御新造様で、御愛想のよい事である。其の間に番頭の助七も馳けつけて、

「君旦那御めであうございます。さア旦那か御待ちかねでございますから、すぐおいでなさいまし。後は私が引き受けました。」

とせき立てる。生れかはその様になつた清三郎は、活氣

ければならない。貴君失敬だが少し手傳つて呉れ給へ。およねさんも手傳ふんだよ。

およねは頑固な事を云つて、容易に歸らうとは云ふまいと思つた清三郎が、意外にも忽ち歸宅を承知したので、其の案外に驚きながらも、自分の使命を首尾よく果すを得たのを喜んで、いそぐ其の室に通る松井はさう失望したらしくすく後に従つて行く。これは單に御馳走になり損つた失望のみではない様である。下宿の女將も出て来て喜びを述べながら彼此手傳ひをして居る。何も無いと思つても大きな包みが三つ出来た。處へ下女が

「先刻の御新造様がおいでになりました。」

と案内する程もなく、つか／＼入つて来たのは叔母。

「清さん召集ですつてね。途中で助七に逢つて聞きましたからすぐ引返して来たんですよ。此家の事は助七

のみち／＼した顔つきで、今の先叔母に理屈を並べて歸らぬと力むだ宅へ、意氣揚々と歸つたのである。

さ、さうぞ此へ、イエ其處では御挨拶も出来ませんから。

山平の奥の廣間には、近處の甲乙、親戚の人々が清三郎の召集せられたを聞き傳へて、祝詞を述べに来たのを引張りあげての大酒宴清三郎の身仕度中、平兵衛と細君とで前坐を勤めて居る。今入つて来たのは例の松井君、先刻の安養生の姿はなく、黒縞三ツ紋つきの御羽織に、久留米緋献上博多、はて彼品が甚麼して質屋を出たであらうとは、先客の朋友どもの疑問であつたが、二三段上つた男振を猶もよく見せ様と云ふのか、すまし返つて入つて来たのである。主人の平兵衛は腰の低い商人氣質、清三郎の親友と云ふので猶更愛想よ

く、御辞儀ばかりして居る。

「さうぞ此へ始めまして御目通り仕ります。私は叔父の平兵衛でござります。以後は御見知り置かれまして、御別懇に願ひます。此度はまた清三郎が種々御厄介になりました想で誠にはや何とも御禮の申し上げ様もございませぬ。以後ともさうぞ御懇意に願ひまするで。

「私は松井源と申す者で、山形君には毎々失禮ばかり致して居ります。此度は愈々御出征になるのだらうで、御目出たうござります。何だか平生兄弟同様に御交際して居りましたので、御別れ申すのがつらい様な氣もしますが、併し國のため君のために日本臣民の分を御盡しになるのですから、こんな結構な事はございませぬ。私などは体格が悪いので、徴兵にも落第した仕儀で、實に山形君が御美しいです。

ますはさで、頑固でござりますから、そんな曲つた事は大嫌ひでな、第一今日様に對してすみませぬ。アハハハ。

頂門の一針といふのは是であらう。老人は昔氣質に子供自慢加ふるに少しく御祝ひ酒が回つて居るので、前後見ずに思つた儘を話したのだが、松井君に於ては甚だ耳の痛い御説教である。何故と云へば、此の男は故意と近眼鏡をかけて近眼になつて、徴兵を逃れた御人であるから。

「左様ですな。アハハハハ。」

とは云つたが、大きにテ、てしまつた。
「これ清三郎は如何した。なに湯に入つて居る。さうか御朋友がおいでになつたと云へ。夫から御膳を早くな。

と云ふ間に膳部も進ばれ、およねも細君も出て来て、先

「ハイ、さう致しまして、彼もな、両親が夙く致りまして、不幸なものでござりますから、幸ひ私に子でございませぬので、ゆくは後を相続させませうと存じましてな、學問の方もいくらかは爲せましたが、學問は長干出来ても、身軀が弱くは何にもなりませんからな、運動を充分にさせましてな、擊劔、柔術なども少しづつは心得て居りますが、御蔭さまで徴兵も首尾よくすませまして……是もな、世間様では随分嫌がッておいでの方も有様でござりますが、徴兵に參るのも一つの修業で、身軀の弱い方は致し方もございませぬが、普通の者なら是非一度は勤めて参りませんと、どうも人間がいちけて可けませんな。何しろ男になる關所でござりますからな。夫に好んで身軀を悪くして徴兵を逃れる方なぞかござりますが、随分馬鹿々々しい事ではございませぬか。私は天保爺と人様に云はれ

刻の挨拶などをして居る處へ、

「只今此の御方がおいでになりました、若旦那様の御朋友でござりますが、一寸御祝ひに伺ひました、と被仰ひまして。若旦那様に申し上げましたら、旦那様に伺つて、宜い和被仰つたら御通し申せ和被仰ひますが、如何致しませう。婦人の方でござります。

と、下女の持つて来た金縁の華奢な名刺には、隸書で佐野かつ子と書いてある。

「佐野かつ子

と讀むと平兵衛はひどく慌てた調子で、

「さけない、今急がしいからと云つてな、躰よく断つて歸してしまひな。さうも誠に取り込んで居ると云つてな。(小さな聲で)いやとんでもない奴が來をツたわ。

「左様でござりますか、何だか大層優しさうな御美し

「方でござりますよ。」

「何でもござりますよ。早くさう云って歸しなさい。小聲でござりますよ。」

「夫ではあの、若旦那様に一寸申し上げましてから……」

『清三郎に云はなくても可い。己が歸せよ云つたら歸せば可い。愚圖々々云ふには及ばないのだ。(小聲で)いざいざ奴があるものだから。』

「左様でございますか、夫では左様申しませう。平兵衛の過度の慌て方に、下女は怪しみながら出て行つた。間もなく歸つて来て……」

「あの爾申し上げて居りました處へ、恰若旦那が浴室から出ておいでになりましたもんですから、御逢ひになつて、今此室へ御通りになります。」

「は、清三郎が彼の女を上げた？此室へ来る？夫は大……」

「變。」

愈々慌て、次の間へ逃げる様に入つて了つた。松井は先刻から空うそぶいて煙草を喫ひながら、そり／＼平兵衛の騒ぐのを横目で見て居たが、今逃げ込んだのを見てニヤリと笑つたのである。

詞華



懸賞俳句

課題 秋季戰爭讀込み

菊之本知古宗匠撰

天 (金鶏賞) 置時計

勝菊に樂隊遠く響きけり 東京龍山

地 (旭日賞) 日清韓地圖 奈良松月

戰死した御魂祭りの花火かな 京都六ヶ峰

人 (瑞寶賞) 日章の國旗

占領の地に座取りして月見哉

雜錄

御慰問の勅語

御慰問使岡澤侍從武官長より左の勅語を傳へらる

勅語

今回清國事變に際し朕が陸海軍人は列國兵と共に炎瘴を冒し殊域に戦ひ堅を陥れ鏡を挫き克其の任務を盡し竟に北京に入りて公使救援の目的を達したり朕深く其の勳勞を嘉す將來益々勅諭の旨を體し軍紀を重し風紀を肅にし奮勵以て帝國軍隊の名譽を全くせむことを望む

右に對して電奏したる奉答文左の如し

奉答

出羽常備艦隊司令官

今回侍從武官長を遣はされ特に優遇なる勅語を賜はり且つ恩賜を辱ふす臣等感激の至りに堪へず益奮勵御勅諭の旨を體し以て聖恩に報ひ奉らんことを期す謹んで奉答す

奉答

東郷常備艦隊司令官

今般北清地方に於ける我が軍隊へ御慰問使を差遣はされ常備艦隊へ優遇なる勅語を賜はり出羽司令官之を拜受したる由只今報告に接し感激の至りに堪へず謹んで奉答す

奉答

第五師團長山口中將

優遇なる御慰問の勅語並に貴重の御下賜品を蒙りし一同感激の至りに堪へず謹んで軍隊を代表し無涯の天恩を拜謝す

番外五客、實、支那戰爭記三冊

日の御旗朝陽門に秋の風 飛騨十千
日本の鷹支那の鴉を取にけり 東京杉南
戦に勝したよりや鷹の聲 尾張桂州
めい月や思へはひかる我國旗 長門無學生
柳ちりて楊村寒くなりけり 京都鴨涯

十一客

乗取た樓門たかし月今宵 尾張鹿野
戦場のおき照らしけり秋の月 東京鹿野
行秋や分捕米て氣の丈夫 同無音江
占領の城を照らすや秋の月 東京柳音
月落ちて尾花の戦く支那の原 甲斐狂水
勝いくさ背懸枕にあきの月 東京柳水
白河の流れに添うて散る紅葉 甲斐鶴齊
海軍のちかこは高し月のうみ 尾張雨澤
北京まで蕭り残すや菊の花 東京龜之島
分捕の品を枕や兼待つき 同蓬之島
祭らばや忠義に死せし魂祭り 東京霞山

奉答

今回特使選遣はされ御慰問の趣旨を傳へしめらるる臣等感激の至に堪へず此に公使館員一同を代表し恭しく天恩を謝し奉る

媾和委員の任命

李鴻章既に媾和全權大臣に任ぜられたるの通牒あり慶親王も亦同様の任命ありたる由にて慶親王は既に北京に入り李鴻章亦遠からず同地に赴く筈なれば是迄紊亂の極に達したる清國と列國との關係も稍緒に就くべき見込立ちたりと云ふべし故に此際一二の邦國にして故ら此争亂を長引かして自國の利益を計らんとする所謂單獨運動に出づるものあるやも計られざれども此等媾和全權委員に對し各種の商議を遂げ清國と列國との間に今少しく秩序ある交渉を爲し得るの途を啓かんとするは列國一般の意向なりと聞けば遠からず北京天津間に於て列國公使と全權委員との間に會議を開くに至るべしと云ふ

列國使臣と清官の商議

慶親王、崑崗、崇禮、有德、那桐は去る四日北京光祿

附屬せしむる旨參謀總長より御裁可を経て同少將に訓令し同時に陸軍省軍務局軍事課員歩兵少佐立花小一郎氏を少將の補佐として元帥幕僚の一員に加ふる旨是亦命令ありたれば少佐は不日北京行の途に就く由

我撤退命令

在清日本軍隊の若干部隊撤退の命令は去る十日師團司令部に到達したり山口師團長は最初派遣の特設部隊及び某旅團に撤退準備の命令を傳へ目下其準備中なり來る二十日より遂還に着手する筈

日本兵引揚の地點

北京方面駐屯の兵數減少は過日來列國間に於て交渉中なりしに日英米佛の四ヶ國は約一個旅團宛を駐屯せしめ他は撤回の事に交渉略ぼ纏りしとの事は頃日上海電報に見ゆしが愈々撤退實行に至らば英米佛は何づれの地點に引揚んとするか未だ知るを得ざるも我日本は歩兵旅團を混成に編成して駐屯せしめ他は漸次本國に引揚ぐる事となる可し但し今後何時再び派兵の必要生ずるも知る可らざるに付出陣準備は依然繼續して解除せざる事に内定したりと云ふ

休戰條約

寺、翌五日は太常寺に於て列國公使と商議を開始せり聯合軍の司令官等と慶親王との間に休戰條約を結ばんとす其主意は

- 第一 天津を局外地とする事
- 第二 滿洲及び遼東半島をパンフアーステートの一種とし除く事
- 第三 列強は各條約港に於て外人の生命財産を保護するに必要と自ら認めし時は守備兵を駐在せしめ得べき事
- 第四 團匪運動の首領株を處刑する事

獨逸元帥の本營地

ゾワルデルン元帥は視察の爲め暫く上陸する而已にて直ちに北清に向ひ大沽に上陸し北京若くは天津に於て現任獨逸軍司令官并に聯合軍各司令官に會見したる後ら一定の本營地を定むべき旨北京駐屯の獨逸軍司令官に通牒ありしと云ふ

獨逸元帥の幕僚

我日本よりは福島少將をゾワルデルン元帥の幕僚に

戰死者追賞

清國事變の戦功に依り受賞すべき將校下士卒にして戦死せし爲め遺族に對し特旨を以て去る七日下賜金の御沙汰ありしが將校の分は左の如し
一金八百圓 陸軍歩兵大尉安藤辰五郎遺族安藤サト
此の他陸軍下士卒に對しては歩兵一二等卒砲兵一二等卒戰死者遺族百名に對し各金二百圓宛下賜せられたり其官職姓名は次第に網羅す

北京外交官遺族へ下賜金

外務書記生杉山彬氏は在官中死亡せしに付判任官俸給令第五條に月俸三ヶ月分金百三十五圓及公使館領事館費用條第六條に依り在勤年額十分の三二百四十圓計三百七十五圓を其遺族に給與せられたり又外交官補見島正一郎氏は在官中死亡に付高等官俸給令第十三條に依り年俸三分の一金二百圓及公使館領事館費用條第十六條に依り在勤年額十分の三金三百六十圓計五百六十圓を其遺族に下賜せられたり又公使館一等書記官中川恒次郎氏は在官中死亡せしに付高等官俸給令第十三條に依り年俸三分の一金八百三十三圓三十三錢三厘及公使館領事館費用條第十六條に依り在勤年額十分の三金千九百五十五圓計金二千七百八十三圓三十三錢三厘を其遺族へ下賜せられたり

佛國士官の暴行

天津の秩序は日を追うて回復しつゝあるの時に當り城

内の我守備區に於て聞くも忌はしき事を耳にしたる佛國の少壯士官二名良民の家に入り一名は主人を縛して其妻を強姦し他の一名は逃迷ふ娘を捉へて是亦獸慾を恣にせんとするの刹那主人は僅に縛を解き豫て用意の拳銃を放ちれば之に驚きて躊躇ふ處へ守備の我兵若干は時ならぬ銃聲を異し急ぎ其家に駆入りしに這は开も如何に落花狼籍の体たらく素より容赦すべき場合ならねば二名の士官を取押へて之を同國の守備隊長に引渡したりと云ふ露兵印度兵の横行は屢ば之を耳にせり而して文明國を以て自任する將校の此舉あるに至つては苦々しきも何とも言はん方なし

東洋獨逸陸軍の編成

東亞ロイドの所報に據れば今回新に東洋に派遣せし獨逸陸軍の編成は左の如し
 一旅團約六千五百人歩兵四個聯隊(聯隊は二個大隊より成り大隊は四個中隊より成り一個中隊は二百三人より成る)
 一騎兵聯隊(三個大隊より成る)
 一東亞野砲聯隊(四個砲隊より成る)
 一カイツェル砲兵一隊
 一東亞工兵隊(二個中隊より成る)
 其他電信鐵道隊、彈藥隊、糧食縱列(二隊に別る)炊事隊、野戰病院四なり

東洋増派の佛軍艦

佛國政府が今回東洋に増派せし巡洋艦はニッソー號は七月二十一日同國ツロン軍港を發し八月二十八日柴棍を抜錨直航して去る四日長崎へ入港し石炭食糧品を搭載して翌日大沽に向け出帆せるが同艦は噸數三千六百六十噸速力十九海里、大砲十五門と水雷發射管二個を備へ艦長はルフネヅル大佐なりと
 佛國軍艦は尙ほ續々派遣の途中に在りて曩に本國を出發したる佛軍司令官ボナーチエー中將は參謀長グロージ大佐と共にシャッスルト、ランバ號に搭し既に新嘉坡を經過せしなるべく又柴棍には目下戰艦トリヨンフアットを始めとして七艘の軍艦遊弋し何時にても急に應じ得べく準備し居れり

在外帝國軍艦

昨日現在の調査左の如し
 ▲大沽 淺間、秋津洲、高砂、吉野、千代田、臨▲白河
 ▲愛宕、島海▲上海 嚴島、八重山、高雄、筑紫▲廈門
 ▲高千穂、和泉▲芝罘 秋津洲、明石▲仁川 磐城▲馬公 葛城▲元山 須磨▲朝鮮南部 大和
 右の外航海中なるは豊橋、鎮遠、鎮中の三艦にして回航中なるは朝日、吾妻の二艦なり
 (本誌九月十八日脱稿)

列國 支那戦争記第九編

(十月二十五日發行)



戰記

黃村停車場の占領

黃村より楊村までは我鐵道隊が豫てより鐵道敷設任に當る筈にて同先發隊は既に土地の實測をさへ始めたるに何故にや其後敷設の命に接せず然るに露國は列國將官會議の議決ありしに係はらず肆に馬家舖附近の鐵道修理に従ひ我より之を制止すれば本國よりの訓令を受くるまでは工事を中止する能はず暫く其令の來るを俟てと稱して一向に議決を肯するの意なしされど實際に於ては南苑より楊村までの鐵道材料は目下の處

到底之を得る能はず殆んど敷設の見込なしと見て可なりといふ唯此際同方面に於ける或一停車場を占領し是より楊村に通ずるの鐵道を有するは頗る緊要事たるのみならず又一ツは南苑の殘敵を掃蕩する所以なれば我より一箇大隊の兵を向はしむるに決し歩兵第四十二聯隊の第一大隊及び若干の騎兵は去る十四日午前五時德勝門外なる西馬店の舎營地を發し七里半餘を行軍して同日午後二時頃黃村に着せり英の騎兵若干亦隨ふ黃村には果して清の官兵及び拳匪の殘徒二百餘名あり素より取置の餘兵なれば銃器を所持するもの總員の二分の一にも達せず他は鈍刀長鎗の類にて多少の抵抗をなせしも我れは直ちに之を掃蕩し其の五十餘人を斃せり依て大隊は暫く此地を守備するに決し尙此南方約千メートルを隔つる黃村停車場も一箇中隊をして事なく之を占領せしめたりき、今や城外數里の地は全く敵らし

きものを見れば時に残兵が窮困の餘村家を劫掠するあり又一二人にて出懸れば往々高粱圃中に匿れて發銃するもの尙止まず南苑方面にては拳匪西瓜賣りとなりて我騎兵を西紅門に引き寄せしなとナカノ味を遺ることありといふ

鐵道隊の作業

久しく通州に駐りて師團司令部よりの命令あるを竣ち其後北京に入りても南苑の殘敵尙掃蕩せられざりしが爲其作業に従事する能はずとて醃肉の嘆に堪へざりし鐵道大隊も去月十五日我歩兵第四十二聯隊第一大隊の黃村停車場占領後直に工事に着手することとなり、此地は嘗て露國の中隊が匪徒の爲に包圍されし所なれども彼は直に一箇大隊をして之を擊退せしめつ、爾來列國會議の決議如何に關せず日に馬家堡附近の鐵道敷

設工事を止めず、是を以て我國は前日英國と協議の結果彼は豐臺停車場を起點とし一方馬家堡に向ひ一方黃村に向ひ工事に着手することとし其人數は一箇中隊餘之に清國人夫を加へ豐臺停車場の守備隊長之が指揮の任に當り此他に技師長、技師及び技手若干あり目下約二哩餘の敷設工事を終れりといふ、

我鐵道隊は是亦一箇中隊にて日々清國人夫二百餘名を督し黃村停車場を起點として先づ豐臺方面に向け工事を始め英の工事と相合するに至て止むの設計にして其今日までに敷設されしは約二哩餘なり尙黃村以南にも半哩餘を敷設したりといふ、敷設材料に就ては當初其蒐集に頗る困難すべきを豫想したりしに係はらず附近の清民に錢さへ取らずれば所々に藏匿せし材料を運び來るもの意外に多く目下は餘り此點には懸念なきものに似たり、而かも彼等が利に集るの敏き附近の村民は

魯を我隊長に呈して頻りに日本軍隊の德政を頌し今後も永く貴軍に頼りて其工事の繼續されんことを望めるなど甚だ狡猾なる歸順策を取れり、されど其の眞意を窺へば甚安んずべからざるものあり尙城内なる本隊に於ても鐵工場を開き目下盛に作業に従ひ且所々の木廠に兵を派して材木の買入に盡力せしむるなど大に歩を運び日々馬車二十餘輛にて之を黃村に運べり、兩三日中には野戰電信隊の手にて黃村停車場より師團司令部及本隊への電話線を架設せん都合なれば其上は一段の便宜を増すべし

然るに何ぞ圖らんや(黃村停車場の西方約三四里の間は全く敵兵を見ずとは將校斥候の屢次確報したる所なるに係はらず)此の歸順せりと見せかけたる村落間に於て意外にも夫の武田工兵中尉の慘殺に逢はんとは

支那は如何して賠償金を支辨すべき乎 (上)

清國事變の結局に關して、土地占領の問題は、不可能の事とするも、賠償の要求は必然免かるべからざる數に在らんか、而して賠償の最大項目は金銀たるべきこと無論ありとす。然るに清國が果して能く列國の要求すべき巨額の賠款を支辨するの能力ありや否やは實に一大疑問に屬す。現在清國の外國債は、毎年償還すべき元利合計、千四百五十萬兩餘にして、歲入の五六分の一を侵蝕し居れば、此上に更に重大なる負擔に堪へんことは至難と謂はざるべからず。此に就ては先づ清國現存財政の梗概を知るの要あり、今支那人の調査せる者に據りて、少しく之を左に説明せんか。蓋し清國財政に關する專書は、向來之を以て、其の概見して據るべき者に就て彙計せざるべからず今逐次之

を擧示せんに、

一 關稅は 昨光緒二十五年を最多額とす、輸入稅船噸稅、阿片釐金を合計して、二千六百六十六萬兩餘従前未嘗有の額に達したるが將來果して能く此の額を維持すべきやは、豫定すべからず、今明二年の若きは、已に此額に上らんことを望み難きは明白あり。

二 地稅 大清會典に載せられたる徵收すべき定額は、三千二百八十四萬兩餘あるが、爾後政府が別に頒布せる官官指南といふ書に載する所に據れば、減して二千九百二十八萬餘と爲り、加ふるに水旱の災等によりて免除せられし額及び官吏人民の未進額等を差引き、近年各省の實際送附する額は、二千五百萬兩餘に過ぎず。

三 鹽務 従前鹽課、鹽釐、合計千三百萬兩に過ぎ

ず、光緒二十年以後、鹽斤に加稅して、毎年約四百萬兩餘を増し、共計千七百萬兩餘とされり

四 釐金 此項は清國の是大弊政たり、商民が上納する總額は三千萬兩に下らず、然るに多くは吏胥の中飽に歸し、其の各省より送納する額千二百萬乃至千四百萬兩のみ、平均千三百萬兩に足らず、現に剛毅が調査後徵納額を増さしめたるも、尙は實際幾何の増加もなし。

五 折漕 是は従來江南地方より北京へ運漕せし米を銀に換納せるより、江蘇、浙江、江西、安徽、湖北、湖南、河南、山東八省の漕米を銀に換へて、六百萬兩に足らず。

六 常關 是は内地關稅にして、海關の設けなかりし往時、貨物は皆此の常關にて徵稅せしが外國通商以後、貨物は太抵洋船に搭載するより、海關にて

收稅することとなり、常關の收入は年々に減少し、加ふるに例の吏胥の中飽も亦少からず、現在各關の送納額は、毎年二百萬兩に足らず。

七 土藥稅 是は内地產阿片の稅なり、内地產阿片に課稅することとなりてより、民間にて遂に公然と罌粟を裁種するに至りたれば、實は此項の徵稅の結果は、甚しく人民に有害なる者と爲れり。近來種ゆる者益々多けども收稅額は二百萬餘兩に過ぎず。

八 雜項 海防損納、即ち賣官金の若きは、合計約亦七百萬兩に過ぎず。

以上八款を統計して、清國毎年の歲入は約九千八百萬兩なるに、其の支出の額は、實に此に止まらず

次に其の歲出を列擧せんに、

- 一、旗兵及内務府費 二千萬兩
- 二、滿洲防護經費 百八十四萬兩餘

三、新疆、雲南、貴州、廣西四省へ各省より補助すべき經費 六百四十五萬兩餘

四、黄河歲修及各工務費 五百萬兩餘

五、各省にて支出する官俸、公費、驛遞等の費 三千二百二十二萬兩餘

六、南北洋水師及閩粵船政學堂等の經費 千五百萬兩

七、砲臺陸兵、武備軍費 千萬兩餘

八、外債元利償還金 千四百五十萬兩餘

九、關稅中より支辨すべき各項即ち、稅務司、海關暨督等の經費に、正稅の百分の十を支出すべく、駐外公使等の經費に、百分の九を支出すべく、船噸稅の收入の若きは、燈臺、同文館等の經費に充用することあり、子口稅の若きは各省の公用に配分するが故に、光緒二十五年關稅の收入より支辨すべき額

は、五百萬兩餘に達せり。

以上九款支出の統計、一億一千萬兩餘に上り、歳入の不足、已に千二百萬兩以上あるに、鐵道の計畫、學校の増設、臨時の増兵、船舶器械の購買等、一切の經費は、尙ほ此の内在らず、清國財政の現狀は、實に此の如きの窮境に在り。加ふるに其の貿易の狀態を言へば、光緒二十五年海關報告に據るに、輸入總額の輸出總額に超過すること二百餘萬兩なり。故に漢字新聞に云ふあり、此次の禍變、幸にして和議に終らば、已に萬幸なるに、猶ほ賠償金をさへ惜まんと欲するは、諺に所謂、水に落つれば命がはしく、岸に上れば錢がほしき者なれども、財政貿易の窮狀現在の如くにては、列國若し但だ賠款を索むることのみを知りて清國の利源を閉鎖することを知らずば、終に太平ならざるに終らんと誠に一理なしとせざるなり。又一漢字新聞

は之に就て論じて曰く、

願ふに或は洋債を以て説を爲す者あり、知らず英法徳の四款、本を還し利を還す、已に三十年の償清を須つ、今若し本上本を加へ、利上利を加へば、則ち關稅復た抵すべきなし、未だ必ずしも信を人に取らしむるも、亦必ず須らく償ふに償金を以てし、抵するに商埠を以てすべし、其の流弊言ふに勝へざる者あり、是は即ち人に求むるは己に求むるに如かず借款は籌款の如かざるや明けし、然り而して籌款の道、節流は尤も開源よりも重し、蓋し工商を振作し種植を講求すると、一切開源の法とは、皆旦夕の奏功すべきにあらず、今急を一時に救はんと欲せば則ち籌餉の要四有り、曰く鹽下を設く、曰く南酒を折す、曰く官烟を售る、曰く印稅を行ふ。かくて其の方法として論述せる所は次の如し

日英交渉の公文書

(承前)

サー、シー、スコット(露京駐在英國大使)は六月廿九日露國政府の回答ありて左の如く電報せり
北京及天津の秩序を恢復するため日本政府にして二萬以上三萬以下の軍隊を派遣するに於て露國政府が之を承認すべきかを確めんことを希望せられたる本月二十六日附閣下の訓電に接するや余は直に外務省を訪問したるにラムスドルフ伯は皇帝の召に依りテルホッフに赴き不在中ありしを以て亞細亞局長ハルトウヰツグに面接せり
余はハルトウヰツグに對しラムスドルフ伯歸來せられ亦ば直に閣下の訓電を傳告し併せて可成急速に回答を致されんことを請求せり猶余は事態の重大あることを語り英國政府は目下印度より一萬の軍隊を派遣中にして露國政府に在ても能ふだけ速に動亂地方に援兵を派遣せらるべき準備中ありと思へども此等の救援隊は現在包圍中にあるらしき北京の列國公使館及英露兩國の軍隊を救援するの間に合はざるや明白なりと謂へり余は猶曰く公使館及軍隊の救援は

第一の目的をあらざるべからず而して若し日本政府にして此目的を遂行するため即時充分なる軍隊を供給せんことを希望し且つ之を實行するの能力ありとせば日本の協同提議に對し懸篤なる考慮を與へざるべからずと
ハルトウヰツグは答へてラムスドルフ伯はテルホッフに於て皇帝の議長たる西比利亞鐵道委員會に出席中なるも一時閑後には歸來すべきを以て其節直に貴下の意見を通知すべし伯は再び明朝ベテルホッフに赴かれ其上にて皇帝陛下の聖慮を伺はるべしと謂へり
余は強てラムスドルフ伯に會見せんため伯を煩げすの意なきを告げ閣下の訓電を佛文に數行したるものを封入せる私信を同大臣に送りたるに之に對してラムスドルフ伯は直に返書を以て追て閣下の質問に回答すべき期日を通知すべき旨を申越せり
昨夜余は一箇の回答を受領せり其寫しは別紙封入の通りなるが即ち露國外務大臣が在東京の露國公使に發送せる訓電の寫あり同大臣は之を以て余が閣下の訓令に基づき提出せし所の質問に答へたるものと認め居るあり
余は昨夜ラムスドルフ伯の通牒を閣下に報告したるが同大臣にして余に會見することを得るに至らば余

は此外に猶ほ東京より何等かの通牒に後れざるや否やを確むべし
此書信中に封入せられたる露國政府の回答と見る可きは左の如きものなり

在東京の露國公使は日本が清國の秩序恢復に援助を與ふるの準備を爲せることを露國政府に通知せるに依り大臣は差急ぎ本月二十六日の貴書に對しイヌウオリスキー(東京駐劄露公使)をして日本政府に左の通牒を爲さしめたる旨をスコット閣下に通告す露國政府は現今の狀態に照し日本政府の表示したる感情に深く感激す故に露國政府は日本に對し行爲の自由を阻害するを望ざるや況んや日本が他列國と協同して事に當らんことを確保するに於てをや露國政府の方針は自國の關係する限り六月二十四日に發布したる公告に準據すべし

七月四日サー、シー、スコットは同問題に就てラムスドルフ伯に會見したることに關し左の如く報道せり
余は只今ラムスドルフ伯に會見したるに伯は余が獨逸代理公使より聞得たる所に據り昨日電報を以て閣下に報道したるものと殆んど同一のことを語り居れり露國司令官は全權を委任せられ居るを以て現在何

事をあし又多分如何あることがあざるべきやに關し同司令官より今少し明確なる報道の到達せんことを頻に羨居るなり而して當地(聖彼得堡)より方針を指定するは爲し能はざる所とす

英國司令官との協議成立せり(不明)との漠然たる風説に關し露國司令官よりは未だ何等の通知あし若し此事をして確實ならしめば北京に於ける列國公使館の運命は頗る危急に瀕せるものと想像せらるるなり而して露國外務大臣の意見にては露國其他の列國公使が本國政府をして形勢の容易ならぬことに就て觀測を誤らしめたりとは思ひ得られず猶又列國公使が適當の時機に海岸(太沽)へ引揚げざる等もあし現に先月十二日即ちドギールス(北京駐劄露國公使)が外交の途既に盡きぬ今より各國司令官事に當らざるべからずとの電報を發したる時はまさしく列國公使が北京を引揚ぐべき時期たりしあり

露國外務大臣の計算に據れば現在上陸せる露國の軍隊は一萬にして同大臣は列國共通の目的に協同するため日本若くは他の孰れの國よりありしも二萬或は三萬の軍隊を歓迎すべき旨を明言せり
日本より充分なる援兵の到着するまでに猶一週間を経過すべし
ラムスドルフ伯は曰く列國は今日全く無政府の狀態

にある一國を相手に爲し居るものにして其國は自づから其事を處理するの機關を有せず又他よりの處理に就きて通告を受くべき機關即ち正當の官吏さへあきかり故に列國は無政府黨員と交戦の狀態にあるものにして支那と戰爭中にはあらざるあり
同大臣閣下は露國外務省に到着したる最近の電報は孰も之と即時余に通報すべきを約束せられ猶閣下英國外務大臣よりも新らしき電報を通報せられんことを希望し居れり

次に英國政府の照會に對する獨逸政府の回答は左の如し
女皇陛下の代理公使は日本政府が露國政府の贊同を得らるゝに於ては二萬以上三萬以下の救援軍隊を太浩に派遣するの意あることを通知せられたり右に關し代理公使は訓令に據り此事に就て獨逸政府が露國政府と交渉の勞を採るの意あきやを獨逸政府に質問せり
獨逸政府は主義に於ては清國の秩序恢復に有利なる處置なれば如何なることにても同情を以て歓迎すべしと雖も今日は日本の計畫に關し猶未だ詳報に接せず此點の判明するを俟て獨逸政府は日本の行爲が第三國の利害に觸れざるや否や又現在の狀態に於て獨逸が日本の計畫を援助するに避くべからざる責任

を負ふや否やに關する意見をも決定し得べきなり
獨逸政府は支那帝國の秩序を恢復し其存在を安全にし且世界の平和を安固ならしむるの途は只從來列國の間に保維せられたる一致を維持するにありと信するを以て重要な列國の一致に危害を及ぼさざることを確かなる處置に限り加増すべし (未完)

北京籠城日録 (承前)

七月二十四日

拂曉より四圍其だ喧嘩を極む、説をさす者曰く援兵近づき敵兵逃れ去らんとするありと、我軍の密偵たる董福祥部下の一兵の報する所に據れば交民巷附近の敵大に増加せりと是を以て此日特に警戒を嚴にして備ふる所あり
檣原書記官今朝英國公使館内の病院に於て逝く哀哉
昨日暮夜北堂の方面に聞えたる盛なる銃聲は二千五百の義和團が之を攻めたるなりと傳ふ

密使又來り報じて曰く外兵は十七日楊村を占領し十九日其附近にて大に董福祥の軍を破りたりと
頃來敵我と壁を隔て、相對峙す其間の距離近きは二十米突に過ぎず時々瓦石を雨らして相争ふ

二十五日

此日驕陽赫々微風動かず、晝夜無事、府東廟前前に於て購ひ來れる卵、野菜などを口にするに甘味言ふべからず

今日清國政府は再び公使館引上を要求し來れりと噂す但し眞偽を知らず

二十六日

例の密偵報じて曰く三萬の聯合兵二十四日午前十時大安平の南三里の地に於て清兵と衝突して之を取り清兵は馬頭に退けりと、龍城者の身になりて考ふれば援軍は遅くも本月中には達すべき筈なれば此報は確かなる

龍跳り忽ちにして明月懸る、是れ親王府内にありたる日本製煙火を吾義勇兵の打揚げたる也

總理衙門は嘗て暗號電報の取次を拒みたるに近頃普通文にても差支さしと認むる者は取次べき旨申出たりと

二十八日

援兵來の信通達す英國天津領事の其公使に宛てたる者にて二十二日附也、曰く天津には二萬三千の外兵ありガセレー將軍は明日大沽に着する筈、天津城は外兵軍政の下にあり大兵は將に北京に向はんとす婦人は大方天津を退去せり云々流石の英國人も其空漠粗漫なるを笑はざる者なし但だ是に由て之を觀れば援軍は少くも二十二日迄は未だ天津を發し居らざる也(記者曰く是れ實は空漠粗漫に非ざりき而も龍城中の人々之を信せず當時通信杜絶の狀察すべし)

丁林の宣教師にテヌテカードといふ人あり常に人の擠

べしと信せられたり

何事の祝なるにかけふは敵營にて爆竹の音頻りに聞えたり、府東に於ける敵兵の來往漸く稀になり糧を敵に與へたりとて梟首せられたる者ありし爲と云ふ夜半鐘太鼓 銅鑼、喇叭などの音盛に聞ゆ

二十七日

密偵の報に云ふ清國は張家灣に武衛軍、通州に練軍を置き此處にて外兵を喰止めん戰略なり、此戰若し不利ならば西太后、皇帝は董の軍を隨へて長安に逃るゝ手筈にて車馬の用意已に成れり、前門外に於ては頻に苦力を強募し南苑に送りて銃の操法など教へ通州附近に練出居れり云々
總理衙門より西太后の名を以て茄子、冬瓜、餛飩粉を重數輛に満載して英公使館に贈り來る
薄暮親王府内燦然として中天に輝あり忽ちにして金

斥する所となる發狂して英國公使館を出で敵兵に捕はれたる由
此夜八時頃より翌曉に至る迄の間北堂に激しき砲聲を聞く

二十九日

密偵報じて曰く歩兵馬頭に至り之を陥れたり董軍五營は北京に歸れりと
テヌテカード總理衙門より送還せしめらる

三十日

密偵又報じて曰く外國兵は昨日張家灣を占領せり武衛中軍は義和團と合し二萬五千の兵將に交民巷を攻めんとす
日本人の糧食 此時僅に二三日を支ふるのみ飯は老米七分に初三分、菜は馬肉と豆のみ此の如き者茲に既に二週間も是さへも二三日を過ぐれば全く盡きんとす

乃ら止むを得ず英國糧食委員よりの補給を仰がんとす
(記者曰く三十一日記事を缺く)

八月一日

午前三時香哨兵東南に烈しき銃聲を聞けりと報ずる者あり密偵の報ずるが如く廿九日張家灣陥れりとすれば此銃聲或は援兵にあるなきを保せずと衆稍喜色あり既にして例の密偵來り報じて云ふ外兵は大安平まで擊退されたりと喜色一變して皆悲色あり蓋し密偵の言を盡く信するに非ざればアドミラルシーモア氏の中途より引還したる事なきと思ひ出して心大に安からざりし也府東に於ける敵人の來往全く絶ゆ、佛兵側面より之を銃射したるに恐れたる也、胸壁前敵屍あり犬鵲の類集りて其肉を喰ふ

午後一時三十分一肥大漢の手中を振て府東の吾歩哨線に近き來るあり是れ先月十八日我指揮官柴中佐の書信

を齎して天津に赴き福島少將の返信を得て復び歸り來れる者也、少將の書信に曰く

第五師團の上陸意外に困難を極めために豫定の期日に後れ師團の大部は已に當地に着したれども尙續々來着中のものあり此回の通信にて北京危急の事情明かとなり列國人皆大に激動し目下北京救援の議に就き協議中準備就き次第三日中には出發の運びに至るべし、楊子江一帶の地形勢穩ならず、滿洲に暴徒起り東清鐵道二百餘里を破壊したり云々

是に於てか先の所謂密偵が常に虚報を傳へて利を貪りたるを惡み且稍其言ふ所を信じて朝夕喜憂したるの愚を悔ゆると同時に遅くも本月の末日に於て吾人は必死の地より救ひ出さるべきことを信じたり

不思議なるは此使者なり其姓は張、山東濟南の産其善く使命を全うしたるを以て金を與へんとすれば固辭し

て受けず暫時も止まることを肯せずして更に返信を十五分間内に得んことを求む沿道の状況は問へども答へず曰く國家の爲に此使命に當れるなりと云ふ奇又怪

此日總理衙門又公使館撤退を要求し來る、然れども先に之を拒みたる理由の消滅せざる限りは幾たび彼の請求あるも之に應ずる能はざるは明白の理なり唯再三の求めすげなく之を拒絶して彼の感情を害するは此際策の得たる者にあらざるを以て各國公使は此際確答を與ふることを避けんとするの色あり

二日

聞く英國公使の總理衙門に送りたる答書は尙回條と協議の上回答に及ぶべしと云ふにありし也

虚報を傳へて久しく利を貪りたる所謂密偵來る吾彼れの虚言を責む、彼大に驚き顔色土の如し、然れども特に吾寛大の襟度を示さんため後來を誠めて之を用

ふることも前日の如し

米國公使館は二十八日附天津發米國某將軍の密信に接せり其中に曰く我は再び君と相見の望を失へりしが今や一道の光明あり軍隊は多分明日を以て進軍せん云々次で同公使が接手したる三十日附某大佐の通信に曰く一萬の援兵は將に北京に向ひ進發せんとす大軍は踵ぎ至るべし天佑あり必ず其機に遅れざるべし云々

七月の末日には北京に入るべしと信せられたる援軍は實に今日迄未だ天津を出で居らざる也嗚呼吾人は少くも今後尙十日を待たざるべからざるか

七月二十一日より二十四日の間に發したりと見ゆ六倫敦電報轉送さる

之に由て見れば六月二十九日附日本公使の本國政府に宛てたる通信は北京の状況を先づ廣く世界に紹介し得たるが如し而も其電報が支那政府が果して北京の外國

人を保護し且糧食を供給しつゝあるや否を知らんと欲せるの様子あるは怪むべし
此日前日に比し銃聲稍多し

三 日

陸軍隊草薙善治氏傷癒にて再び戦線に就く、半面の傷痕甚だ多くして敷ふるに堪へず見るも却々に凄し
客月廿八日の上諭にて許景澄、袁昶の二人は安に外國の事を談じて跡離間に亘る者ありとて之を殺すべき事を命じたりと

魯事府の教民漸く饑多木葉草根を嚼む者あり其形容枯槁せる狀眞に慘鼻に堪へず府東の胸壁外に苦力銃と彈とを賣りに來るものあり

四 日

晝間静かなり、夜八時大雨來る暗を縫うて打ち出す敵の九例よりも多し

宗者各所に出没して食糧を掠奪したるに依る尙ほ改宗者の中には小銃にて武装せるものあり人の之を誰何するに會ひて直に發砲せり之が爲め會々市民の憤怒を招き彼等團徒に投じて相共に之を攻撃するに至る依て將に上諭を乞ひ此等の改宗者にして横行掠奪を擅にせざるに於ては此徒も亦等しく王の赤子たるを以て勉めて保護を加へ攻撃の苦に遭はしむるとかかるべきを宣せんとす庶幾くは漸次斯の如き衝突を除くを得ん北御河橋上の件に關しては實は清兵道路の修築を行ひたるに外ならず然るに公使館は誤つて之を以て牆壁を築造するものと爲し忽ち之に發砲したれば清兵も亦止むを得ずして之に應せり互に事を誤解したるに出づ又重ねて斯の如き攻撃を見ることなかるべし一時諸公使の退京あるに當り之に保護を加へんことは固より易事にあらず左れを審議を盡したる後其必ず災害なかるべきを保證するに足るを信じ遂に之が提言を行ひたるものなり書面に於て忠告に及びたる所秋毫の他意なし我等は謀つて諸氏を欺ぐが如き事を爲す能はず是を以て我等は閣下等が徒に疑惑することなく一時退京の儀につき決心する所あり回答あらんことを望む謹言

きのんけん再び府東の吾哨兵線に集ひ來り始めたる敵兵等は親しく吾兵に向て曰く君等は何時此處を立か、吾等は君等を送て天津に行く筈なりなど語れる由
李秉衡武衛五軍の副將となる
總理衙門へ轉送せし報告によれば伊國王ウンベルト陛下は崩去せられたる由
又聞く吾小田切總領事の慰問的電報袁世凱を経て西公使に轉達せられたりと

北京籠城中の外交

文書 (三)

七月三十日各國公使より總署の通牒に答ふると共に北堂攻撃及び北御河橋上牆壁築造の事につき總署へ詰問に及びたるに翌卅一日之に覆牒し來りたる所左の如し
昨日到來の貴書に依り了承したる北堂の件は堂内の改

尙ほ退京の事及び清兵の攻撃につき詰問に及びたるに八月三日之に答へたる所は左の如し
總理衙門謹んで通告す榮祿選ばれて諸公使を城外に送るの任に當れり宜しく心を決し徒に躊躇することなく又疑惑することなけれ閣下等が速に期を定め北京を去るの日を報じ來らんことを望む夜間發砲の事に關しては是亦双方の誤解に出づ幸にして未だ互に其域を超えず畢竟寺僧等が日に佛に侍して鼓を撃ち鐘を鳴らすと一般笑つて棄つべきなり (完)



彙報

武田工兵中尉の慘死

武田中尉は鐵道材料蒐集と線路の實測をせしつゝ去月二十一日郎坊停車場を距る約一里半の所まで赴きたるに多數の清國民集合して何事か協議しつゝあり稍不穩

の模様見えければ隨兵を促し立て急ぎ大營村に歸りしは恰も暗時を過ぎたり、頓て寺院の扉に沿ひ黄村への歸途に就かんとしたるに忽ち路傍の叢林より二十餘名の匪徒現は、中尉の一行を取り圍み刀槍銃の類にて暴行に及びしかり。

黄村守備隊にては此報を聞くと同時に直に兵を派して救援せしめしも及ばず其日は遂に中尉及隨兵一名の屍體を發見する能はずして還り翌二十二日更に守備隊將校一名、兵二十名、鐵道隊よりも上等兵七名を派して搜索に赴し中途中清國民八名に行逢ひたるに其舉動何とさく怪しかりければ直に之を射殺し一名の清國民を捕へて嚮導とし遂に中尉の屍を發見するを得たり之を檢するに胸部に五箇所、肺部に七箇所、臂部に四箇所の刀傷を受け右股には彈丸の痕さへあり、されど首級は見當るを得ず、見るもの惨愴の感に堪へばかりあり

中尉の屍は即日黄村に持ち歸りて火葬に附し其着服の片袖のみ長く無限の涙痕を留めぬ

鐵道大隊にては二十五日午後三時より同本部ある廣延にて中尉の爲に追甲會を營めり從軍僧の讀經に次ぎ參拜者の燒香さといと鄭重の儀式ありき

尙同日聯合軍に於ては黄村南方ある殘敵を掃蕩せん目的を以て我歩兵第四十二聯隊第一大隊及山砲二門に加へ獨逸歩兵二大隊、砲兵一中隊、英騎四百人は今朝(廿五日)七時を以て右安門を出發するに決たりと聞けり

● 武田工兵中尉

中尉名は禮作、長野縣小縣郡西鹽田村の人、少うして縣の中學校に學び卒業後士官學校に入り明治二十九年業を卒へ優等の位置を占三十一年一月工兵少尉に任じ翌年一月砲工學校に入り十二月卒業す成績同じく優等なり更に高等學生として一年間在學を命せられ其十二

學を命せられ其十二月中尉に進み隊務の傍ら日に業を砲工學校に執る今年九月帝國大學に委託學生として工學科を研究する筈なりしも清國事變の爲七月召集の命に接し渡清せしなり、人ど爲り寡黙最も果斷の勇に富む而も其爲す所周到確實を以て稱せらるる今や頑匪の間に惨殺に遭ひ將來有爲の材を失ふ惜みても尙餘あり没する年僅に二十八

清帝の不豫

過般西太后より皇帝病あり至急侍醫を差遣はせとの命令在北京の大臣等に下りしを以て慶親王以下は侍醫を搜索せしも行衛不明なりしかば折返し其次第を申送り且つ一日も早く駕を還され北京に在りて御療養せられんことを奏請したりと世人も知るが如く西太后以下の北京を逃れたるは外國軍の北京に入らんとせる當時にして上下非常に混雜を極めたる際なれば供奉の人員中

に侍醫を加へざりしものゝ如し如何に取敗れて狼狽したる際とは云へ一大帝國の皇上が侍醫すら供奉せしむるを得ざりし境遇を察すれば轉た悲嘆に堪へざるなり

清帝長安に幸するの上諭

清帝が太原より西幸發表の上諭は左の如くなりと云朕恭しく慈輿を奉じ蹕を太原に駐むること將ざに兩旬に近からんとす該省適々荒歉に値ひ千乘萬騎の供億難れ艱に食用皆昂り民生累を滋す一念及ぶ毎に怒焉として安んじ難し且つ省城は電報京外に通せず往來の要件轉轉毎に延誤多し己むを得ず謹んで閏八月初八日西曆十月一日を擇び鑾を啓いて西のかた長安に幸せんとす沿途の供應及び到後の起居服用祇を須く簡便なるべし承辦の各員事を備張に過ぎ糜費を致すことを得ず籌糧籌餉に至りては責難臣にあり該督撫實力籌畫し源々多く送れ東南の各省は轉運較や易からん並び

に籌定の糧餉を迅かに行在に送り以て接濟に資せよ此れを將て通諭これを知らしめよ

杉山書記生軫惜の上諭

清帝が杉山書記生を悼惜し祭葬銀五千兩を賜ひしが其上諭の全文を左に譯出す

閏八月初三日(清曆)上諭大日本駐京使館書記生杉山彬被害の一事は前に降旨を経て緝匪懲辦す因て念ふ該書記生使館に在り差理するに當り應に一律に保護すべきに乃ち事倉猝に出でしに因り遽爾戕せらる實に深く軫惜す著して禮部右侍郎那桐を派して前往祭を致し並に祭葬銀五千兩を賞給す靈柩本國に回抵する時内閣侍讀學士李盛鐸に著し參贊官一員を派し再び奠醴を行ひ用て篤く邦交を念ひ惋惜忘れざるの至意を示せ

日本の出兵に關する英露獨の交渉

事、少しく舊聞に屬すれども過般日本の出兵問題に對して英國政府が露獨兩國の間に立ち大に周旋する所ありたる事情を聞き得たるを以て其要點を記さんに抑も

今回義和團事件の當初露西亞の政治家は最も之を冷視し本國のムラザフエフ伯より駐清のドヤエールス氏に至るまで支那の軍隊を以て充分匪徒を鎮定するの見込あれば外國軍隊を派遣するは全く無用あるのみならず其到着前に暴動の鎮定を見る可しと亦し現に六月上旬には今後二週間の内に其鎮定す可き事を明言したり露の政事家が眞實斯る希望懐けるものあるや或は日本の出兵を妨ぐる口實として之を唱へたるやは分明ならずれども兎に角之が爲に日本が出兵を躊躇したるの形跡あるは甚だ明瞭にして六月十三日暴動の勢愈々甚だしき際に日本の外務大臣は英國政府へ向け日本は英國の承諾を得る以上は非常の際に大兵を派遣してシーモール將軍の一隊を救援するの希望ある旨を通知し來れり而して英國政府は之に對して何等の返答をも送らず

唯、三日の後に至りて英國は秩序の恢復に就て利害の關係ある列國と共同の運動に出でんことを望むの意思を明かにしたるのみありしが其後暴動事件はますます火の手高くし少數の兵力を以て鎮定の見込なきより結局ソールスベリー卿は六月二十二日に至りて日本に對して大兵を派遣す可き事を要求し且此際日本が事局に當るは地勢上より見て最も便利ある次第を述べたり思に日本は此通知を得て直に事を決するの希望ありたるに相違なければ然かも尙ほ外交上に於て憚る所なきを得ず日本をして斯る掛念からしむる爲めソールスベリー卿は第一に露西亞政府に對して日本が二萬五千乃至三萬の兵員を太沽へ上陸するに就て同意を表明せんとを請求すると同時に獨逸政府に對して同様の請求を爲したり當時獨逸の皇帝は公使館の救援を熱望したるにも拘はらず今回の事件を利用して英露の衝突を

惹起さしめ露に好意を示さんとの意思あるが爲め斯る危急の場合に臨みながら英國の請求に接してより六日目に至りて漸く之に回答し支那の秩序は列國共同の力に依て恢復す可き事并に獨逸人は果して日本に助力するの責任を盡す可きや否や皇帝自から判斷し難き旨を申込みたり當時英國が此返答を得て日本に對する出兵の請求を中止したらんには北京は如何なる慘狀に陥りたる可きや外交上に偏僻の動作多しと雖も獨逸政府の回答の如き者は甚だ稀ある可し而して露西亞政府の如何と云ふにラムズドルフ伯はセントヒーターズブルグ駐在の獨逸大使に向ひ獨逸政府と同様の意見を有する旨を述べたりとの説ありたれども公然英國政府へ回答し來れる所は獨逸の如く冷淡のものに非ず唯、日本が列國と共同の運動を破らざらんことを望めり固より漠然たる文字されども必ずしも日本の出兵を排斥す

るに非ず露西亞が斯る回答を送りたるは滿洲地方より
恐る可き報道頻々として來れるより大に意を動かした
る爲めあらんと云ふ兎に角不滿足ながら斯る回答を得
たるを以てノールスベリ卿は兩國に對する交渉を終
りたるものと見做し更に日本に對して出兵を熱望する
の意を通ずると同時に財政上の助力を保證するに至り
たる次第ありと云

長江水師の交送及防備

近着の同文滬報に據れば長江水師提督黃少春は屢に調
して行在に赴きしが近電には護衛軍副都統に簡派せら
れたりとあり劉坤一は深く少春を信任せし故を以て大
に此命令を喜び居れりと而して其後任には現任江南提
督李占椿を補し江南提督の任は楊金龍に署理せしむる
こととなれり且つ劉坤一は江陰を長江第一の重門戸と
なし老成穩練の人を須て其間を鎮すべしとし特に新任

長江水師李占椿に照著し節を江陰に駐め各營並に南北
岸各砲臺を總統し以て該處の南北兩洋水師兵艦を制節
し江防を固めしむることとなせりと

北清事件の成行

北清事變に關しては獨逸より第二の媾和豫備條件を提
出し佛國よりも二三の媾和條件を提出したれど之に對
する各國の意向未だ定まらず唯獨逸は飽くまで媾和談
判の開始を遷延せしむるの意志ならんと一般に信せら
るゝに至れり獨逸は何時まで事局を永引せんとするの
目的なるべき乎之を知るに由なきも現にヴァルデルセ
元帥は天津に留りて未だ北京に向はんとするの模様
なく其如何なる方針を以て聯合軍總指揮權を行はんと
するやは世間の最も注目する所なるべし或人の説に獨
逸にして若しも山東を經略するの目的ならば聯合軍を
指揮して列國共同の名の下に前要害を占領せんよりも

率る滿洲に於ける露國の所爲に倣ひ單獨の力にて立働
くの便なるに若かざるべしと評したるがヴァルデルセ
伯蓋し其情を知らざるにあらざるべきも憚り輕率し
て上海に於ける英國の轍を履まざらんと用心し徐ろに
時機を窺ひつゝあるものならんとの説もあり何れにせ
よ元帥、天津に留まれる間は親しく各國公使と熟議す
るの機會もなく從て媾和談判を何れの地に開くべきか
の一問題すら容易に決定するの望なかるべし列國の軍
隊は現に北清に駐するものゝ外、更に増加を計畫する
ものあるを聞かず本年の冬節は現狀のままに過ぎ行か
んも來春解氷の期を待ちて多少の増遣を企つるものあ
るやも測るべからずかたし媾和談判は本年内に其端
緒だけを開くことすら或は其望なからんといふ者あり

清國大官の自殺

徐桐が自ら縊れて死し其屍を檢めたるの棺は今も尙ほ

城中大佛寺内の禪室に在りとは餘程以前に聞く所なり
さ此他に國史館祭酒希元(希祿の男)同上王懿榮は
藥を仰いで各其の邸中に自殺し太子太傅崇綺は之より
先き保定に在りしが北京城の陥没せしを聞き其の妻子
家族を擧げて生きながら之を土中に埋め既に命を絶て
るを計り後家僕をして土質を掘らしめ寢蓐を寶中に設
け自ら其の上に仰臥し亦土を覆はしめて死す君辱め
られて臣死するは固り其所ならんも亦稍人をして悲惨
の情を起さしむ

北京山海關間列國軍の

部署

山海關占領のことに關し聞く所に據れば列國は山海關
及び秦皇嶋を以て將來の兵站主地と定め列國協同して
之を守備し各國軍は北京山海關の鐵道線上に各自兵站
部隊を駐在せしむることとなせり

又鐵道の修理及る運行に關しては楊村北京間は軍司令部にて之を監督し日英獨之を負擔し山海關楊村間は露國之に任す

山海關及び秦皇嶺港灣の設備及び鐵道迄の貨物運搬の區署は英國司令部に於て之を負擔す又山海關各砲臺の配備は左の如く定めたりと云ふ

第一砲臺は列國軍にて守備し英將官を以て司令官となす

第二砲臺は獨逸

第三砲臺は佛國

第四砲臺は日英

第五砲臺は露

獨逸元帥と諸隊の指揮官

ウワルデルゼー元帥は在露諸軍の高等指揮官を掌ることとなりたるに付此等の諸隊の指揮官は左の諸件に關する通知を同元帥に呈出することとなり居れりと云ふ

十月一日現在の諸隊の戰鬥序列及び配備一覽表、諸隊の兵力

諸隊中本國政府の命令により以前の配備及び兵力を變更することあり居れば其詳細ある報告

諸隊中現に作戰に着手し居るものは其詳細ある通報偵察の範圍外に宜り軍隊を現在の所在地より十吉米以上の地に出さんとするときは豫報をなすこと

清兵又は匪徒等に關する報告

(以上二件某所に達したる電報)

獨逸元帥の指揮權

北京楊村間の鐵道は日英獨三國楊村山海關間は露國にて各其守備に任することとなりたる由は別項某所着の電報に見えたるが右はヴァルデルゼー元帥の意向に出でたるものにして列國より出せる參謀官の合議を經たる者とは云へ列國の均衡し上當を得ざるの嫌あれば英

國に於て果して之を承諾すべきや否やは疑ひなき能はずと云ふ元來ヴァルデルゼー元帥は既に總指揮官の任に當りたりと雖も列國共に絶對の命令權を元帥に許したるにあらざるが爲に列國より參謀官を出したる次第なるも今日未だ參謀官の員數も撤はず元帥及び幕僚の權限猶ほ曖昧なれば元帥の命令として公けにされたるものも實際に於いて悉く施行さるべきものなるや否やは猶ほ疑問に屬せりと云ふ

露國の撤兵公文

九月一日の露國官報に八月二十五日附を以て外國駐紮の大使公使に送りたる全文を公けにせり、即ち劈頭に聯合軍の「比較的重要なならざる部隊」が其目的とせる北京の公使館及び外國人を救援する事と北京に集れる叛匪を潰散する事とを奏効して意外に速に直隸省の戰局を一變したる旨を叙したる後左の如く記せり

- 第一 列國間の和衷協同を維持する事
- 第二 支那に於る従前の組織を維持する事
- 第三 支那帝國の分裂に至らん虞ある事物を除去する事
- 第四 聯合列國の助に依り北京に於て正常なる中央政府を立て之をして自から國內の秩序安寧を保障せしむる事

以上の諸點は列國殆んど皆同意せり帝國政府は毫も

此以外の目的を有せずして只管従前より取來れる政策を固守すべし若し夫れ叛匪が牛莊に於る我兵を襲ひし事及び我國疆に於て屢ば支那人が敵對の行爲を爲し、事例せばフアゴエヌチエンスクの砲撃の如き又露西亞をして牛莊を占領し且つ兵を滿洲の疆に進むるの己を得ざるに至らしめたる事の如き畢竟支那叛匪の來寇を防禦するの必要より臨機の處置に出でたるものにして決して聯合を離れて單獨の行動を爲せるものと謂ふべからず蓋し單獨の行動は帝國政府の政策に全く反するものなり、滿洲永遠の秩序確立し鐵道工事（此は正式の契約に依りて支那の保證せる所なり）の保護に缺くべからざる手當施さるゝに至らば露西亞は他の列國より障礙を被らざる限り直ちに隣國の領地より兵を召還するに相違なかるべし露西亞が占領して萬國の貿易に開放したる牛莊港に於て諸外國及び各國會社の利益並びに我軍隊に依て回復せられたる鐵道上の利益毫も破損を受けずして十分保證せらるゝこと明かなり、形勢一變せし爲案外迅速に奏功せし北京陥落の一事は帝國政府が主一の目的とせし各國公使以下閣中の外國人を救出す事業を成就せり

目下皇帝、攝政太后及び總理衙門の首府を退去せる爲難事なるが如し斯る事情の下に帝國政府は支那政府に派遣せる公使をして依然政府のあらざる北京に駐まらしむべき十分の理由なしと思惟す故に露西亞公使及び公使館員總てを天津に引揚しめんと欲す而して政府が其屢ば宣言せし當初の目的以外に出でざるべき決心半平たるを以て徒らに無爲に暮せる北京の露西亞軍隊は公使の一行に隨ひて天津に下るべし正當の支那政府が再び政權を回復し列國と和議を訂すべき十分の權利を付與せる代表者を任命するに至らば露西亞は總ての外國政府と合議の上此方に於ても談判の開始さるべき地に全權委員を派遣するを遠へざるべし

貴下は此旨各駐紮國政府に通告して同意を求められんことを望む

露西亞官報は右の如く記載したる後北京駐紮公使ドーギルス氏及び露軍司令官リチウイチ氏に其地の事情を考察して皇帝の思召たる天津へ引揚の舉を速に實行すべしと訓令したる旨報せり

日本軍隊の好評

大沽の砲撃以來北京の陥落に至るまで日本の軍隊が抜群の働きを爲したるの一事は昨今英國人の盛に稱揚する所にして二三の所説を掲げんに倫敦スタタストは日本軍の協力なきときは斯く速に北京へ進軍して列國使臣を救済する能はざりしは疑を容れざる所なり而して

隊よりも整備せるの事實ありと云へる一節を捉へて全體に於て果して然るや否や疑はしけれども今回の事件に就て日本兵の盡力を缺かんか到底今日の如き満足の効果を得む能はざりしは疑なき所なりと云へり

第五師團の北清冬營

當初日本を以て最も支那に接近し且充分の陸軍を有して出兵便利なる位置に在るものとして其出兵を促したるは我ソールスベリー卿にして日本は此勸告に應じて出兵の事を斷じたるものなれば英國は情誼上飽くまで日本と事を共にして日本の利益を謀るの義務ありと云ひスペクテーターは北京攻撃の運動、歩を進むる毎に日本軍隊の組織整備し將帥に適當の人を得て然かも兵卒の精銳なる事實は着々實際に現はれ世界に於ける日本の位置を高めたりと云ひタイムスは其特派員が天津の戦況を報じたる内にて日本の軍隊が遂に英國の軍

北清派遣の日本軍は公使居留民救済の目的を達したれば守備として混成一箇旅團を殘し他の部隊は漸次送還せん方針なりしに福島少將よりは北清北京間の連絡を確固ならしめん爲更に一箇旅團の増兵を請求し來りたれば政府の當局者と意見を異にし且其後北清の形勢を視て露國は更に撤兵せざるのみならず益増兵せん傾を示し英獨佛の各國亦陸兵を増遣し來り形勢漸く一變せん模様あれば當局者は再議の末先に送りし特設部隊のみを送還し第五師團全部をして冬營せしむるに決定し既に山口師團長に訓令を發し又其冬營軍費も支出する

北京の近情

北京の命を受け客月十三日神戸を経て大沽に航し爾來天津、北京間に在りて或目的の視察を爲し居りし某海軍佐官の談を聞くに、李鴻章は余が天津出發數日前愈々北京に入り、北京城には慶親王の入内せしのみ我兵之を守り我師團司令部は榮祿の邸に置かれたり、ワルデルセー元帥は客月二十三日天津に入り其率ゆる所の兵三千は此日より一箇中隊許り宛上陸して天津に駐まり郊外に露營せり、七日余が天津出發迄は尙運送船より上陸し居たり元帥は天津にて冬陣すと、大沽沖に碇泊せる我艦は明石、高砂、千代田、秋津洲、愛宕の五隻にて内外艦船の數は八十五隻に及べり、來月一日より各艦船何れも山海關に轉碇し明年三月中は同地を碇泊地とすべし云々

天津商業の近況

正金銀行及び中國通商銀行は未だ開店せざれども正金銀行は店員は己に來着したれば準備並ひ次第開業すべし
 (雜貨商) 福利公司、飛龍洋行、恒豐泰西貨館ハンター大雜洋行、増茂等にして戦後引續き開店し居るも皆事變前の殘品にして目下仕人の準備中なり
 (藥種商) グレナード商會の外二店ありしも目下開店せるは同商會のみあり
 (新開業) ベキン、エンド、テンチン、タイムスは戦亂後一時廢刊せしも八月下旬より再刊し國聞報及び直報は目下廢刊の姿あり
 (旅館) 外國旅館の重なるはアストルハウス、テンチンホテル、クリヤランスハウスホテルの三軒なれどもアストルハウスのみ昨今漸く營業を開始せり
 此外水道會社及び瓦斯會社は戦亂中幸に機關に損害を蒙らざりしため引續き營業し居れり

支那街の現況

市民の多くは一時四方に散逸したるも客月中旬民政廳より告示したる結果追々歸還し來り昨今に至りては殆んど空屋を存せず總々營業の許可を出願するものあり但し未だ營業の課税法等規定するに至らざるに付公然營業の許可を與へずと雖も不日規定を作り許可をなすに至るべし其内外國人に縁故ある商人は其名義を藉り

天津在勤領事より天津の近狀に付其筋に報告したる大要左の如し

今回の事變は北清貿易の進捗上大頓挫を來せるものなりと雖も亦翻て願れば從來常に外國營業者の末尾に附して容易に伸張の餘地を得ざる本邦營業者にとりては今回の事變こそ實に逸すべからざる好時機にして我當業者は此時機を逸せず外商に先んじて永遠の勝利を期せざるべからず今や戦亂の餘響は内地の需要供給に欠乏を來し他日交通の開くるに際しては諸般の需要陸續として起り販路擴張上一生面を開くは争ふべからず我當業者の奮發を要するは此際でありと雖も現今焦眉の急として先づ本年冬季に於ける當地方の情況に應ずるの方法を研究せざるべからず因て左に現時に於ける外國居留地及び支那街の情況并に内外人の動靜及び冬季間の需要品等を類別して參考の資に供す

外國居留地の現況

外國居留地は孰れも清兵の爲めに損害を蒙り殊に佛國居留地の一部は損害最も甚しく本邦商業者中にも家屋を燒失したる者ありと雖も幸に中央の部分は比較的損害甚からず昨今に至りては各多少の修繕を加て稍秩序を回復せり今在來の居留商にして己に開始せる營業の種類を擧ぐれば左の如し銀行業目下開業せるは滙豐銀行、德華銀行、チャーターバンク、露清銀行にして

穀物雜貨、古着、兩替、料理店等を營むものあり其地魚菜等の露店を開くもの多きも重なる商人は悉く開店し居れり現在居留民生活の模様は實に憫むべきものにして食物の欠乏を告ぐること甚しく到底二三の米穀店のみにては需要に應ずる能はざるに付民政廳にては白米五萬石を清商二名に賣下げ城内及び城外各一箇所米店を開かしめたるに購買者非常に多く今日に至りては右の米穀も僅に一箇月を支ふるに過ぎざるに付民政廳にては外人に受負はしめ上海より米穀を取寄ることとせり副食物も亦同様にして近在の田畝荒蕪に歸したる爲め頗る欠乏を告げ本年冬季間の需要に應ずる能はず

大沽天津北京間の運輸交通

從來大沽天津間の運輸交通は汽車及び水路によりしが目下汽車汽船共に列國軍隊の用に供せらるため戦後本邦より輸送する商品は天津より支那船を雇入れんとするも是又軍隊の糧食輸送に供せられ居り一小舟をも得べからざるに付軍隊に請願して幸ふして汽車引船の便を借る等非常の困難を感せる模様なれば本邦の航業者は速に適當の小蒸汽船並に引船を以て天津大沽間の回漕業を開始せんことは目下の急務なるべし又天津北京間は目下の處水路と馬車單輪車等に依るの外なきも是亦

軍隊に於て徴發せるため其便を借ること困難なるに付
或外人は水運會社を起さんことを計畫中あり
電信局は局員等逃走して全く事務を廢せしが八月末頃
より丁林人ポールセンなるもの天津大沽間に私線を布
設したるに付便益尠からず郵便局は事變後引續き事務
を取扱へり本邦郵便局は從來天津の一箇所ありしが事
變後大沽北京通州の三地に支局を設けたり猶ほ不日楊
村河西務にも開局すべし

本邦商人の現況

從來香港にありたる本邦商民は銀行業貿易業雜貨業を
合せて戸數六軒、人口は七十餘名(本邦人全體)に過ぎ
ず其住所は多く佛國居留地にありしを以て事變の際甚
しく損害を蒙りたるが目下三井物産正金銀行の店員損
害の調査に従事し居り未だ營業を始むるものなし只二
三在來の本邦居留民等共同して支那街に勸業場に類似
せる公市場を設立せんとするものあるに過ぎず而して
本邦及び朝鮮より新に渡來せしもの本日迄に二百餘名
に達せるが此等の人々雜貨、酒、洗濯、理髮等軍隊を
目的とせる營業をせし居るも初めて海外に渡航せるも
の多きため服裝等に注意せず浴衣一枚に兩脚を露せる
もの裸體に洋服を着け帽を戴かざるもの等醜態言ふべ
からず

本邦勞動者

從來香港には本邦勞動者なるものなかりしも英佛獨の
軍隊にて人夫を本邦より雇入れたるに付現在左の如き
人數となれり

英國軍隊附	日・英・組	五百人
獨逸軍隊附	帝國移民會社	百三十一人
佛國軍隊附	東洋移民會社	七十三人
	日本移民會社	二十三人

然るに近來支那人の歸來するもの多く人夫としての賃
錢も日本人夫一日一圓五十錢内外に對し五十仙位にし
て日本人夫の如く契約によらずして雇入るゝに付使用
上容易なる上言語の點に於ても支那人を使用する力便
利にして加ふるに勤惰の點に於ても非常の相違あるに付
孰れも期限の至るを待ちて日本人夫を解僱し支那人を
以て之に代へんとするも、如し故に此際當地へ日本勞
働者を渡航せしむるは望ましからざる事にして本那人
の面目に關し總ての點に至大の影響を及ぼすの恐あり

目下需要品欠乏之際とて物價は總て平常の二三倍に騰
貴し殊に内國品最も甚し現在各市場の相場を平均すれ
ば左の如し

穀類	白米(百六十斤)七兩餘、麥(百四十斤)三兩五
錢	錢、綠豆(百六十斤)四兩餘、玉蜀黍(百四十斤)三兩五

野菜類 葱(一斤)二十文、白菜(同)二十文、茄子(大)
三十文(小)二十文、西瓜(一個)八十文乃至百二十文
肉類 牛肉(一斤)二百五十文、豕肉(同)二百八十文、
鶏(一羽)五百文、鴨子(同)五百文、羊肉(一斤)三百二
十文、鰻卵(一個)五十文
魚類 鯉(一斤)三百文、鮭(同)八百文、蟹(同)三百文、
鱸(同)四百文
雜貨 石油(一箱二罐入)七弗、石炭(一噸)上十八弗、
下十二弗

經濟事情

通貨は銀塊(馬蹄銀)圓銀(墨銀及び支那銀貨)並に銅貨
にして商業上の取引には兩銀、普通の流通には圓銀を
使用し銅貨は補助貨として一般に用ひらる然るに外國
軍の入込に及び兩銀は使用法煩はしく携帯に不便な
る爲め一般に圓銀を使用したるより圓銀相場は騰貴し
其相場左の如くなれり

買相場 百弗に付 七十六兩
賣相場 同 七十兩
平時に比し平均一割餘の騰貴なり
又日本及英米金貨に對する兩換相場は左の如し

日本金貨	百圓に付	九十三弗
米國同	五十弗に付	九十四弗
英國同	一磅に付	九弗

日本の圓銀は從來流通せしも本邦に於て廢止となりた
ること知れ渡りたるため臺灣流通の刻印を附せるもの
も亦價值を保たず墨銀に對する本邦圓銀兩換相場は我
百圓に對し八十九弗乃至九十弗なり
圓銀の需要多き爲め北洋機器局の圓銀鑄造機械を借入
れ圓銀を鑄造せんことを企てる者あるも未だ民政廳に
て許可するに至らず

銅鐵は居留民の散逸と共に内地に流出したるため目下
大に缺乏せるが北洋機器局に鑄造の儘現存せる銅鐵七
萬兩あるに付近日市中に流通せしむるに至るべしと云
ふ銅鐵の兩換相場左の如し

洋銀	一弗に對し	一吊九百文
銀塊	一兩に對し	二吊四百文

平時に比し洋銀に對しては約二百文の下落なり

冬季の需要品

冬季需要品の重なる物は第一米穀にして燃料之に次ぐ
米穀に於ては前に記せしも右は單に當地の需要に應ず
るに止まり北京其他附近の住民に及ぼす能はず燃料は
黍穀及び粉石炭にて作れる炭團の如き物を用ふるも本
年は其材料を得ること困難せるため是亦缺乏を感ずる
ことならん燃料に就ては清人のみならず一般外國人も
亦同様にして開平の炭礦は目下尙ほ事業を中止せるた
め到底本邦より其供給を仰がざるべからず

此外日用品孰れも欠乏せるが其細目を擧ぐなば左の如し
 副食物 罐詰類等輸入すること可なるべしと雖も清人
 間の嗜好如何は未だ知る能はず但し將來本邦品輸入の
 一段として之を試むるの好時機ならんか種類は昆
 布、海參、貝類の如き需用多かるべし
 衣服材料 は黒灰色、水色の大巾木綿類并に木綿等に
 して肌着地としては大巾フランク等夜具地としては
 花模様あるもの等を可とす
 建築材料 此冬季中には居民の家屋を新築するの運ひ
 に至らざるべきも歸來の人民が雨露を凌ぐため住居を
 造るものあるべし左れを諸材木類は軍隊に徴發され
 るに付杉板杉丸太等の需要多かるべし
 雜貨類 紙は障子窓戸用に供する薄手大幅器械紙及び
 朝鮮紙の如き厚質のもの可なりマツチは赤燐製を可と
 し現今已に欠乏せり食器は大形茶椀大形土瓶及び罐類
 需要多く此外洋燈玻璃器等も同様なり

民政廳の組織
 民政廳は都統衙門と稱し天津城陷落後直隸總督衙門跡
 に設け其管轄區域は天津、外廓土壁内の全體にして日
 米英佛獨露の諸國各巡捕隊なるものを設け分轄管理せ
 り之を組織せる職員左の如し
 都統衙門長 英國中佐 ボア

同 露國少將 ウォーガック
 同 日本中佐 青木宣純
 書記官長 米國人 デンビー
 土人直接事務取扱書記官 米國人 テンニ
 警察部長 英國大尉 モクラ
 同部長 英國中尉 パ
 同部員 米國人 スチエワード
 支那巡捕長 英國人 イーメンズ
 司法部判事 米國人 サンマ
 出納 米國人
 ボア、中佐秘書官 小村俊三郎
 警務部事務官 伊藤次郎
 衙門の重なる事務は警察衛生營業監視の如きものにし
 て警察衛生司法共に整頓し營業部は目下課稅法等に關
 し取調中なり巡捕隊は各國より歩兵二百五十名を出し
 外に二十名宛衙門に守備兵を出すの規定なり此外昨今
 支那巡捕なるものを募り城の内外各二箇所に巡捕分局
 を置き市内を巡邏せしめ居れり



川 説



金鶏動章 (三)

あはて、自分の居間へ逃げ込んだ平兵衛は暗雲に手を
 叩いて入を呼んだ其家へ返事もせずに出て来たのは、
 つい先日田舎から頼まれて雇ひ入れた、山出し下女の
 おゆきと云ふ女である。後の襦をスーツと開けて無作
 法に突立立つた儘用を命せられるのを待つて居るが平
 兵衛は一向氣が注かないのである。
 「ソヤ甚だもつら〜しい奴もあればあるものだが何
 何でも此の家までツカ〜上ッて來様とは思はなかつ
 たよ。然し彼いふ奴だから己が居ないと何を云ひ出す

かも知れない……これは己が出て居る方が宜いかな
 ……だが彼女に逢つて、五年も前の、しかも大阪で
 の古疵を今更さらけ出すのもあんまり有り難くはない
 ……ヤッぱり己は知らんふりを居た方が宜いらし
 いな……どうも酷い奴だわ。

下女は驚いた顔をしてキョロ〜眺めて居る
 「佐野の爺もよくマア黙つて彼女を置いて置くなア。
 己は大阪で逢つてから後は、音信不通だが、人の噂に
 は、いまだに惚ばつて居るさうだが、彼の女には随分
 酷い目に逢はされて居るのだらうに、變らないのは惚
 ばかりで、もう前の元氣はなくなつて了つたんだらう。
 變ると云へば變らないのは彼の女だよ。大阪で逢つた
 時が二十歳だと云つたが、今でも其の位どしと思はれ
 ないよ。彼の腕でうまく清三郎を誑し込んだのだから
 清三郎が熱心なつて居るのも無理はなしか。始は己の

甥とは知らなかつたらしいが、此頃は夫も知つたと思へて、気が強くなつて、キケキと此家で押しかけやがる。あゝあゝ彼女は己の家の厄病神だわい。

「旦那様ア、何ぞ御用でござりやすか。」

平兵衛は一切夢中だから一向聞えない。

「清三郎も清三郎だ己が上げるなど云ふものを断りもなく通すとは、過度己を踏みつけた為方だ。下女までが己を踏みつけやがつて、幾千呼んでも来ねえたア癪にさばる。」

手の痛くなる程ビシヤビシヤと呻くと、傍に居たおゆきは叱驚仰天、大きな聲で、

「旦那様ア先刻にから己ア此處に居るでがすよ。」

「ヒエツ、ゆきか、何だぞ先刻から居た？」

「ハイ。己ア旦那様ア踏みつけも何にもしねえで此處に立ッて居たでがす。」

「居たア？何か聞いたか。」

「聞いた事は聞たが、何が何だか判然は解まじねえ。」

「解らない？夫はよかつた。解られてたまるものか……」

「己れはの酷く頭痛がするから床を出して呉んな。」

而してな、御座敷へ行ツて、清三郎に内密で頭痛がするから寝たと云ツて呉んな。夫からな、内儀さんの處へ行ツてなれよ、ねを連れて此處へ来いと云ひな……

あゝ汝ぢやア解るまい。かよに一寸と来いと云ひな……

あゝあゝ、斯と知ツたら清三郎の云ふ通り、今日の中に入營させるのだつたものを、怒ひ止めたばかりに這度厄介が持ち上つたのだ。

「どんな厄介でがすかぬ。」

「オヤまだ居るのか。汝の知つた事ぢやない。早く行つてかよを呼びな。」

「オ、口惜しいだらう。私も傍に居て胸が張り裂ける様だつたよ。専彼の女の顔でも掻きむしつて遣らうと思つたけれど、清さんの出先を騒がすでもないと思つて、黙つて居たが、阿父様も怒つたと思つて、毫も出て来いでもさらないんだよ。」

と云ふ時、障子の外で「アーツ」と云ふ歎息の聲が聞えた。

「阿母さん私は這度口惜しい事ありませんよ。」

「夫は解つて居るよ。ほんどに、さんも性悪になつたものだねえ。召集だと云ふ時には、大府えら想な事を云つて、至難しい漢語なんか云つて、固くなつて居ながら、何も今夜彼の人を呼ぶには當らないぢやアないかねえ。」

「阿母さん、私はもう死んで了ひますよ。清さんが私を嫌ふのも無理はないんだけれど、夫を無理に私の方から夫婦になつて呉れど云ふ譯ぢやアないのに、私にさも、面當がましく、あんな人を呼ばなくても宜いぢやアありませんか。私は清さんが彼方を御嫁さんになすつたからつて、何でも云ふんぢやないんだけれど、面當がましく宅へ連れて来るなんて、過度酷いぢやありませんか。私だつて口惜しうございます。もう、私は死んでしまふ。」

「誰だえ其處に居るのは？」

障子を開けて見れば、例の清三郎の親友といふ松井君である。

いや甚度も失禮しました、便所へ行かうと思つて、宜く教へて戴いたんですけれども、つひ甚度も酔つて居るものですから、つひ間違へて這度方へ參つて、何方へ往つたら可いか解らなくなりました。アハ、

「左様でございますか。たしか松井さんと被仰い
ましたね。不圖失禮を致しました。マア御進入なすつ
て、御茶でも入れませう。」

「いえもう何卒御係以下でございます……今一寸立ち
聞きをした譯ぢやありませんが、思はず伺ひました
處が、實に御氣の毒で、夫で溜息を吐いたのでござい
ます。」

「マア御聞きになりました。」

「いや決して御心配には及びません。僕……私も
其の事については非常に心配して居るです。」

「マア左様でございますか、どうも有り難うございま
す。ま、御入んなすつて、種々伺ひたい事もございま
すから、さ、御迷惑でもどうぞ御入んなすつて、
」では失禮します。」

ツイと入った御容態は、どんな踏み倒しの屑やに値を

させても、月俸二十圓以上の代物と云ふに相違なし。
およねにも一寸目禮じて、さて仔細らしく語るのでは
ある。

「實は私は山形君とは同じ下宿にも居ますし、また真
の兄弟の様に居るのですから、互に腹藏なく話し
合ふものですから、彼の佐野の事についても全然存じ
て居るのです。」

「マア左様でございますか。どうも御迷惑でござ
いませう。よねや、汝お茶を入れておいで。違ひ棚に
くれ……彼がおりますから。彼を出してね。」

「いや御構ひ以下でございますな。今日は大層御馳走になり
ました。始めて出まて大變失禮しました。」

およねの出で行くのを見すまして、

「あなたが清さんとは兄弟同様になすつて下さいます
事は、兼て清さんから聞いて居りましたが、御目にか

つたのは今日始つて、またはんの御近づきだけで
這麼立ち入った御話を致すも如何でございませうが、他
に御相談をします方もございませうし、種々御心配下
さすに甘へてと申す譯ではございませうが、一通
り御迷惑でも、御聞きなすつて下さいますし。
座敷の方で酔が回つてか大聲に「ツチチリツシヤン」
と誰やらの口三味線で聞える。」

「實は今此處に居りました彼女は、私の娘でゆく〜
は清さんと夫婦に致す心算で居りましたが、不肖な娘
でございませうから、清さん口酷く彼女を嫌ひまして、
夫にまた彼の佐野とか申すのが有るからでもござい
ませうが、何でも佐野さんでなければならぬと申しま
して、現に今日も下宿へ参りまして、「先宅へ歸れと
申しまして、彼の人を極めない間は歸らないと申し
たので、容易には歸らなかつたのでございませうが、召集

のために飛んで歸りましたので、夫はもう随分我儘に
育てたのでございませうが、不思議……と申すも可笑
うでございますが、マア不思議な様に、政府の事を申し
ますと、一生懸命に勤めますので、今晚なにも、即刻
入營すると申すのを、無理に引き止て皆様に御訣別
の御盃をさし上げたのを存じまして、漸明朝参る事に
致したんでございませう。萬事斯う解つて呉れますと宜
しのでございませうが、甚だふものか彼の御嬢さん
の事だけは、一向解らすやを申すので困つて居るので
ございませう。夫がまた我夫とは敵同士でも申すので
ございませうか、彼の御嬢さんだけは不可と申しまして
なか〜承知致しませんので、夫がために餘計に心配
して居るのでございませう。」

「山形君からも折々聞いて居りますから大躰存じては
居りますが、どうも今の處山形君は、假令如何な美婦

人でも賢婦人でも、彼の任野より他では御承知あるまいと思ひます。夫には種々込み入った事情もあり、夫は他日ゆつくり申し上げませう。唯一寸伺つて置きますのは、もし叔父さんへ御承知なれば、嫁に御貰ひになるんでせうか。

「然々、夫はね、どうせ他から嫁を貰ふ筈にして居るのでございませうから、叔父さんへ承知しますれば、私共はもう何も申すのぢやございませぬのですから……併しなりますす堪ならぬをねえ。」

およねが茶を持って来たので、一時話の中絶したが、「夫では猶委しい事は近日参つて申し上げませう。今日は御芽出たい御出陣の前ですから、込み入った事はまたの事として、あなた方も彼方へ出て御祝ひなさるが宜しうございませう。」立ち上る處に山出しのおゆきが入つて来た。

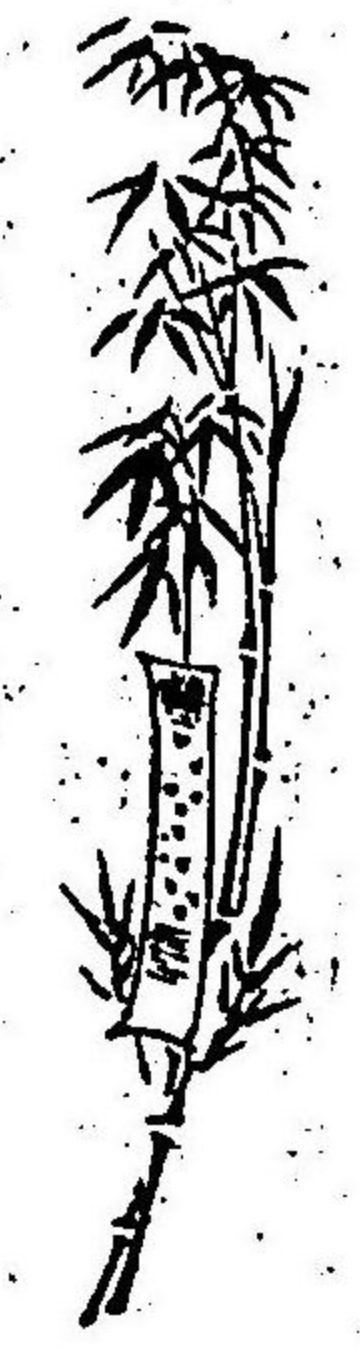
常在禪雲覆雨間。

紀 事 八月 念月 柏木 城谷
萬里懸軍入滿清。如今應逼北京城。山村一日大風起。似聽天兵呐喊聲。
連戰奏功揚譽聲。我軍早已入燕京。今朝雨莫洗兵雨。一掃乾坤殺氣清。

寺倉少尉追悼歌

飛脚 拍酒舍主人作
明後日の朝は出陣と。東の空を伏し拜み。
海より深き大君の。恵に報ひ奉らんと。
堅く心に誓ひつゝ。遠く隔てし故郷に。
残せるおのが垂乳根に。予を此世になさるもの。
思召せよと音信し。心の中こそ悲しけれ。
かくて水無月十九日。宇品港を船出して。
八重の汐路を押渡り。支那の大沽に着にける。

「た内儀さん、旦那さんが病気でぶつ倒れるだアから汝さまとお嬢様に来てくたせえと。」
「え、ぶつ倒れた？あなた御免なさいませよ。」
松井はまアブンたりと二人の姿を見送つた。此の處大出来……と云ふ處である。



詞 華

病中抄讀慈母信書、不勝悲歎、直載覆書、托之郵筒後得一律、在野戰病院 六峯 外史
孤雁遙傳書。挑燈枕上看。思波隘紙上。慈雨滴蓬端。
欲說小兒病。難酬老母嘆。臨書思無極。拭淚報平安。
一葉驚風發渤海。忽逢鯨浪跨波颯。人生到處渾如此。

船遇颶風

在大沽 錦城 居士

しばし軍糧の守備となり。いかに藝術なきまに。
和歌を詠じて武夫の。矢竹心や静りけん。
世にも名高き天津の。停車場附近の戦に。
あはれ忠死を遂げたり。君が譽は養老の。
峰より落る瀟津瀬の。響と共に轟かん。
予や少尉と縣を同ふ。少尉の志操に感する所あり右の追悼軍歌一篇を詠じぬ乞ふ支那戦争記の餘白に登載せられんと

主人識

天津の空に鶴舞ふ小春かな 杉 南
清國の楠も落葉となりけり 龍 山
柳枯れ水かれ淋し楊村かな 白 菊
白河や氷の上の流れ水 春 水
戦死した功の譽や神樂唄 松 石
捨異にかゝる支那狸や冬の月 田 舎 生

ざりしとの説あり其一方には李は豫て上海に在りし時皇帝に上奏する所あり萬一自己の意見にして允許せらるゝなくんば全權委員を辭するの心算にて兎に角天津に赴き皇帝よりの返電を待ち而して上京する豫定なりしされば李の天津滞留久しきに涉りたるは皇帝よりの返電に接せざりしが爲めあらんとの説あり然れども以上の諸説は皆信するに足らず過日上海よりの電報に依れば露國は李と鐵道鑛山に關する密約を結びたりと是亦確信すべき根據なしと雖も思ふに露國公使は豫に北京を引揚げて天津に赴きたれば李は同地に於て同公使に面會したるは實なる可し

在北京の各國兵數

冬期北京に滞留すべき各國兵數は左表の如し此他佛兵一千人と砲六門を芦溝橋に、一千人を通州に駐在せしめ日本は黃村及び通州に各約四百人宛を留めて守備せ

じめ居れり露國は表中の一千人を悉皆引揚ぐる事に決し僅に幾人かを公使館に留め置く筈なりと

歩兵	騎兵	野砲	山砲	工兵	海軍	軍合計
日	二五	人	三	一	一	二三五
露	一〇〇	一	一	一	一	一〇〇
英	二五〇	一	一	一	一	二五〇
佛	三〇〇	一	一	一	一	三〇〇
米	二五〇	一	一	一	一	二五〇
獨	三〇〇	一	一	一	一	三〇〇
伊	九〇	一	一	一	一	九〇
計	一四三〇	九	六	三	五	一四三〇

太后皇帝太原を去る

西太后皇帝の一行は獨兵が進んで太原に到る可しとの報に接し其追及を恐れて去る一日太原を出立し西安に向ひたりと云ふ是迄各國公使は慶親王の手を経て皇帝の還幸を希望する旨を通じたるも容るゝ所とならず今

や益す其行を續くるに至りたるは恐くは皇帝の意にあらざるべし太原に府ありし時は西太后皇帝の權力は北京にかりし當時と異なる所なかりしや否やは人々の疑ふ所にして彼の端郡王以下に對する處分の上諭ありし時も實際如何あるべきかを危みしに今に至り此上諭も一片の反舌に歸し清廷の實權は端郡王以下に移り居る事を推知するを得たり上諭に所謂吏部とか都察院とか稱する衙門は名のみは止まり今は一人の留守番さへなれば如何ともする能はず現に端郡王の兄にして過日官位を剝れたる溥儀の如きも未だ何等の處分を受けずして此程も馬に騎して外出するを見受けたり

英獨の對清策

英國總理大臣兼外務大臣ソールズベリー侯は駐英獨逸公使ハツ、フェルト氏との間に一の條約を協定調印せり要項は左の如し

- 一、清國の諸港を各國は自由通商の爲め開放せしむるの主義を支持すること
- 一、兩國政府は今回の紛擾を領土上の利益獲得に利用せずして清國の領土保全を維持する方針に向ひて其政策を定むること
- 一、若し他國にして其形式の如何を問はず清國に於て斯る領土上の利益を獲得せんが爲めに現今の紛擾を利用せんと欲する場合には兩國政府は其各自の利益を保護せんが爲めに取る可き時機の方策に付き豫め相互の妥協を経べきこと
- 一、兩國政府は此協約の主旨に賛同せんとを列強に勧誘すべきこと

朝日艦の到着

世界最良最新の式に據りて製造されたる帝國一等戰艦朝日艦は自出度歐洲より回航し來れり

野戦砲兵の凱旋

去る八月降りしき大雨を衝て新橋を出發したる野戦砲兵第十三第十四第十五第十六聯隊の混成隊は北溝に渡り北倉の取に大隊長山川少佐傷けられ又た北京の攻撃に加はりて遂に之れを陥落せしめしが今や在清各部隊の撤退するに際し凱旋歸朝することとなり去る十七日太活より字品に陸し昨日午後一時三十分を以て新橋に凱旋せり當日歸着したるは將校廿名下士卒四百八十一名にて馬匹廿三頭あり將校以下冬服を給與せられ實戦の惨状を留めざれども其の面靨せて色の焦げたるを見れば誰れか其の辛苦を諒せざるものあらむ停車場附近には京橋徴兵義會赤十字社東京支那橋區委員會芝區有志者第一旅團御用人等各々旗を打立て兵士等の停車場を出づる毎に萬歳を唱へ又市中音楽隊は奏樂をなして之を觀迎せり兵士等は停車場前に整列し

て暫時休憩し三十三四十五聯隊は解散して現隊に復し第十六聯隊は午後四時本所發の汽車にて國府臺に凱旋せり新橋界隈には家々に國旗を掲げ觀迎者は停車場構内に充満したり

戦死者追賞

本誌前編に豫約したる清國事變に關し國家の爲名譽の戦死を遂げたる將校下士卒諸士の論功追賞は左の如し但し同文あるを以て一二を明記し他は之を省略す
陸軍歩兵大尉正七位勳六等安藤辰五郎明治三十三年清國事變ノ戦功ニ依リ授賞スヘキ處戦死セシニ付特旨ヲ以テ金八百圓ヲ賜フ 安藤 ナト
陸軍歩兵一等卒島本勝藏明治三十三年清國事變ノ戦功ニ依リ授賞スヘキ處戦死セシニ付特旨ヲ以テ金二百圓ヲ賜フ
陸軍歩兵一等卒堀井久夫金二百圓ヲ賜フ 堀井 圓六
陸軍歩兵一等卒廣知芳吉金二百圓ヲ賜フ 廣知元次郎
陸軍歩兵一等卒稻水金藏金二百圓ヲ賜フ 稻水 徳助
陸軍歩兵二等卒金村徳松金二百圓ヲ賜フ 金村 ハル
陸軍砲兵二等卒下松谷吉五郎金二百圓ヲ賜フ下松谷カキ

- 陸軍歩兵一等卒土井覺太郎金二百圓ヲ賜フ 土井徳三郎
- 陸軍歩兵一等卒古田作一金二百圓ヲ賜フ 古田兼五郎
- 陸軍歩兵一等卒竹本權八金二百圓ヲ賜フ 竹本タミヨ
- 陸軍歩兵一等卒田中寅松金二百圓ヲ賜フ 田中 春松
- 陸軍歩兵一等卒田中祐造金二百圓ヲ賜フ 田中源三郎
- 陸軍歩兵一等卒折出龜太郎金二百圓ヲ賜フ 折出 庄市
- 陸軍歩兵一等卒山口定七金二百圓ヲ賜フ 山口 國松
- 陸軍歩兵一等卒梶井米吉金二百圓ヲ賜フ 梶井 ト七
- 陸軍歩兵一等卒中本末市金二百圓ヲ賜フ 中本 トナ
- 陸軍歩兵一等卒實廣廣一金二百圓ヲ賜フ 實廣 京平
- 陸軍歩兵一等卒新庄龜藏金二百圓ヲ賜フ 新庄 島次郎
- 陸軍歩兵一等卒天野正吉金二百圓ヲ賜フ 天野 忠平
- 陸軍歩兵一等卒院去次郎金二百圓ヲ賜フ 院去彌三郎
- 陸軍歩兵一等卒榎原藤平金二百圓ヲ賜フ 榎原 シナ
- 陸軍歩兵一等卒武笠銀太郎金二百圓ヲ賜フ 武笠 コメ
- 陸軍歩兵一等卒佐々木一一金二百圓ヲ賜フ 佐々木彦市
- 陸軍歩兵一等卒越智茂一金二百圓ヲ賜フ 越智 ツチ
- 陸軍歩兵一等卒木本與作金二百圓ヲ賜フ 木本 トラ
- 陸軍歩兵一等卒横川佐吉金二百圓ヲ賜フ 横川 マスノ
- 陸軍歩兵一等卒川田末吉金二百圓ヲ賜フ 川田 ハナ
- 陸軍歩兵一等卒中原勇太郎金二百圓ヲ賜フ 中原佐太郎
- 陸軍歩兵一等卒廣藤徳平金二百圓ヲ賜フ 廣藤 角平
- 陸軍歩兵一等卒惠藤喜六金二百圓ヲ賜フ 惠藤 重右衛門
- 陸軍歩兵一等卒溝下周一金二百圓ヲ賜フ 溝下 ミチ

- 陸軍歩兵一等卒泰一平金二百圓ヲ賜フ 泰 シナ
- 陸軍歩兵一等卒黒川太郎金二百圓ヲ賜フ 黒川 正助
- 陸軍歩兵一等卒升岡吾市金二百圓ヲ賜フ 升岡 タヨ
- 陸軍歩兵一等卒山崎秀吉金二百圓ヲ賜フ 山崎 光吉
- 陸軍歩兵一等卒佐竹關太郎金二百圓ヲ賜フ 佐竹 キヨ
- 陸軍歩兵一等卒沖野悦藏金二百圓ヲ賜フ 沖野 ツルヨ
- 陸軍歩兵一等卒加土常太郎金二百圓ヲ賜フ 加土唐四郎
- 陸軍歩兵一等卒竹野豊太郎金二百圓ヲ賜フ 竹野 國平
- 陸軍歩兵一等卒池田吟三郎金二百圓ヲ賜フ 池田 カメ
- 陸軍歩兵一等卒今川佐之助金二百圓ヲ賜フ 今川 藤四郎
- 陸軍歩兵一等卒大森次作金二百圓ヲ賜フ 大森 清吉
- 陸軍歩兵一等卒今岡健一金二百圓ヲ賜フ 今岡 吉藏
- 陸軍歩兵一等卒河田榮一金二百圓ヲ賜フ 河田 吉兵衛
- 陸軍歩兵二等卒古本柳三郎金二百圓ヲ賜フ 古本 柳右衛門
- 陸軍歩兵二等卒川口四太郎金二百圓ヲ賜フ 川口 宇三郎
- 陸軍歩兵二等卒木村市太郎金二百圓ヲ賜フ 木村 仙太郎
- 陸軍歩兵二等卒土井林一金二百圓ヲ賜フ 土井 文助
- 陸軍歩兵二等卒藤尾重四郎金二百圓ヲ賜フ 藤尾 仙助
- 陸軍歩兵二等卒高橋増吉金二百圓ヲ賜フ 高橋 吉平
- 陸軍歩兵二等卒西本序一金二百圓ヲ賜フ 西本 ハツノ
- 陸軍歩兵二等卒山根繁市金二百圓ヲ賜フ 山根 藤次郎
- 陸軍歩兵二等卒山根保吉金二百圓ヲ賜フ 山根 守七
- 陸軍歩兵二等卒寶山馬一金二百圓ヲ賜フ 寶山 直平
- 陸軍歩兵二等卒中尾京市金二百圓ヲ賜フ 中尾 タノ

陸軍歩兵二等卒有安吾市金二百圓ヲ賜フ 有安 タツ
 陸軍歩兵二等卒牧田佐太郎金二百圓ヲ賜フ 牧岡助太郎
 陸軍歩兵二等卒世羅增平金二百圓ヲ賜フ 世羅勘四郎
 陸軍歩兵二等卒木下正雄金二百圓ヲ賜フ 木下 リエ
 陸軍歩兵二等卒青木卯市金二百圓ヲ賜フ 青木 七次
 陸軍歩兵二等卒木田幾太郎金二百圓ヲ賜フ 木田 喜兵衛
 陸軍歩兵二等卒阿曾沼平太郎金二百圓ヲ賜フ 阿曾沼平
 陸軍歩兵二等卒堀本徳次郎金二百圓ヲ賜フ 堀本キチヨ
 陸軍歩兵二等卒岩崎次郎金二百圓ヲ賜フ 岩崎 シモ
 陸軍歩兵二等卒長谷山與作金二百圓ヲ賜フ 長谷山 卯右衛門
 陸軍歩兵二等卒平野多次郎金二百圓ヲ賜フ 平野 新助
 陸軍歩兵二等卒瀨田幾松金二百圓ヲ賜フ 瀨田 チカ
 陸軍歩兵二等卒久野喜定金二百圓ヲ賜フ 久野 邦太郎
 陸軍歩兵二等卒多田實信金二百圓ヲ賜フ 多田 ハル
 陸軍歩兵二等卒矢野三吉金二百圓ヲ賜フ 矢野 プン
 陸軍歩兵二等卒鎌野小太郎金二百圓ヲ賜フ 鎌野 勘次郎
 陸軍砲兵一等卒津森傳太郎金二百圓ヲ賜フ 津森 兼松
 陸軍砲兵二等卒三輪三金二百圓ヲ賜フ 三輪 村吉
 陸軍砲兵二等卒村重吉右衛門金二百圓ヲ賜フ 村重キミ
 陸軍砲兵二等卒大下嘉助金二百圓ヲ賜フ 大下 熊藏
 陸軍砲兵二等卒坂井坂助金二百圓ヲ賜フ 坂井 三右衛門
 陸軍砲兵二等卒堀江貞之助金二百圓ヲ賜フ 堀江 林藏
 陸軍砲兵二等卒加藤重太郎金二百圓ヲ賜フ 加藤傳一郎
 陸軍砲兵二等卒中島倉太郎金二百圓ヲ賜フ 中島 ハル

陸軍砲兵二等卒中野乙藏金二百圓ヲ賜フ 中野 乙松
 陸軍砲兵二等卒政廣佐助金二百圓ヲ賜フ 政廣 龜吉
 陸軍砲兵二等卒中田萬七金二百圓ヲ賜フ 中田 ヨシ
 陸軍砲兵一等卒花本政太郎金二百圓ヲ賜フ 花本 シノ
 陸軍砲兵一等卒山本喜市金二百圓ヲ賜フ 山本 柚吉
 陸軍砲兵二等卒豊島記録金二百圓ヲ賜フ 豊島庄三郎
 陸軍砲兵二等卒佐々木徳太郎金二百圓ヲ賜フ 佐々木エイ
 陸軍砲兵二等卒森田宗平金二百圓ヲ賜フ 森田新太郎
 陸軍砲兵二等卒定本榮太郎金二百圓ヲ賜フ 定本 アキ
 陸軍砲兵二等卒山下初太郎金二百圓ヲ賜フ 山下 鹿成
 陸軍砲兵二等卒久保八彌金二百圓ヲ賜フ 久保 谷吉
 陸軍砲兵一等卒宇都宮竹一金二百圓ヲ賜フ 宇都宮ミカ
 陸軍砲兵二等卒村上曜作金二百圓ヲ賜フ 村上伊三郎
 陸軍砲兵二等卒品川岩二金二百圓ヲ賜フ 品川 フエ
 陸軍砲兵二等卒品川松太郎金二百圓ヲ賜フ 品川 兵衛
 陸軍砲兵二等卒大西藤太金二百圓ヲ賜フ 大西 伊藏
 陸軍砲兵二等卒河原數一金二百圓ヲ賜フ 河原 豊吉
 陸軍砲兵一等卒八幡倉捷金二百圓ヲ賜フ 八幡 常吉
 陸軍砲兵二等卒山本幸七金二百圓ヲ賜フ 山本助五郎
 陸軍砲兵二等卒玉谷要三金二百圓ヲ賜フ 玉谷宗右衛門
 陸軍歩兵特務曹長勳七等竹下一清金五百圓ヲ賜フ 竹下 マツ

陸軍歩兵特務曹長勳八等西岡治輔金五百圓ヲ賜フ 西岡 カツ
 陸軍歩兵曹長大歳健次金三百五十圓ヲ賜フ 大歳 吾作
 陸軍工兵曹長原田佐次郎金三百圓ヲ賜フ 原田 源助
 陸軍歩兵軍曹近木伊佐夫金二百七十五圓ヲ賜フ 近木喜代馬
 陸軍歩兵軍曹廣本新太郎金二百七十五圓ヲ賜フ 廣本 才八
 陸軍歩兵軍曹時末重左衛門金二百七十五圓ヲ賜フ 時末 クノ
 陸軍歩兵軍曹松田賢一金二百七十五圓ヲ賜フ 松田七藏
 陸軍歩兵軍曹中西郡太郎金二百七十五圓ヲ賜フ 中西 怒一郎
 陸軍歩兵軍曹岡村輝明金二百七十五圓ヲ賜フ 岡村 隆
 陸軍歩兵軍曹山松菊雄金二百七十五圓ヲ賜フ 山松 エイ
 陸軍歩兵軍曹久保利八金二百七十五圓ヲ賜フ 久保文五郎
 陸軍砲兵軍曹佐々木薫金二百七十五圓ヲ賜フ 佐々木保太郎
 陸軍歩兵伍長久保田佐太郎金二百五十圓ヲ賜フ 久保田久吉
 陸軍歩兵伍長川井利三郎金二百五十圓ヲ賜フ 川井 與吉
 陸軍歩兵伍長高橋新十郎金二百五十圓ヲ賜フ 高橋 文藏
 陸軍砲歩伍長溝口隆一金二百五十圓ヲ賜フ 溝口 阪藏
 陸軍歩兵上等兵細田鶴松金二百五十圓ヲ賜フ 細田 シナ

陸軍歩兵上等兵寺尾隼登金二百二十五圓ヲ賜フ 寺尾 法順
 陸軍歩兵上等兵本川勘次金二百二十五圓ヲ賜フ 本川 ミツ
 陸軍歩兵上等兵大田仁三郎金二百二十五圓ヲ賜フ 大田 セン
 陸軍歩兵上等兵岡本喜市金二百二十五圓ヲ賜フ 岡本 甚五郎
 陸軍歩兵上等兵山本喜代市金二百二十五圓ヲ賜フ 山本 文四郎
 陸軍歩兵上等兵栗栖源一金二百二十五圓ヲ賜フ 栗栖 島平
 陸軍歩兵上等兵賀谷七郎金二百二十五圓ヲ賜フ 賀谷 頼母
 陸軍歩兵上等兵鍵浦運平金二百二十五圓ヲ賜フ 鍵浦源四郎
 陸軍歩兵上等兵佐々木市之丞金二百二十五圓ヲ賜フ 佐々木市作
 陸軍騎兵上等兵村上勇一郎金二百二十五圓ヲ賜フ 村上貞四郎
 陸軍砲兵上等兵中村新平金二百二十五圓ヲ賜フ 中村 利八
 陸軍歩兵一等卒緒方治助金二百圓ヲ賜フ 緒方藤三郎
 陸軍歩兵二等卒中山清吾金二百圓ヲ賜フ 中山 鼎三
 陸軍歩兵二等卒本間利平金二百圓ヲ賜フ 本間鶴千代

陸軍輜重輸卒末岡辰太郎金二百圓ヲ賜フ 未岡 久吉
 陸軍歩兵軍曹辻井萬五郎金二百七十五圓ヲ賜フ 辻井 増平
 陸軍歩兵軍曹井上市太郎金二百七十五圓ヲ賜フ 井上 徳藏
 陸軍歩兵軍曹原嘉吉金二百七十五圓ヲ賜フ 原 政造
 陸軍歩兵軍曹田尻甲滿金二百七十五圓ヲ賜フ 田尻主見
 陸軍砲兵軍曹林六造金二百七十五圓ヲ賜フ 林茂一郎
 陸軍歩兵上等兵財滿吾助金二百二十五圓ヲ賜フ 財滿芳太郎
 陸軍砲兵上等兵永江常太郎金二百二十五圓ヲ賜フ 永江 ナカ
 陸軍歩兵一等卒神代淨音金百二十圓ヲ賜フ 神代 周音
 陸軍歩兵一等卒山中豐三郎金百二十圓ヲ賜フ 山中フテ
 陸軍歩兵二等卒藤井常太郎金百二十圓ヲ賜フ 藤野三吉
 陸軍歩兵二等卒土肥清太郎金百廿圓ヲ賜フ 土肥ナツ
 陸軍歩兵二等卒安野隣吉金百二十圓ヲ賜フ 安野市祐
 陸軍歩兵二等卒佐々木富士吉金百二十圓ヲ賜フ 佐々木千代藏
 陸軍歩兵二等卒中付市藏金百二十圓ヲ賜フ 中村 太吉
 陸軍歩兵二等卒福谷淺藏金百二十圓ヲ賜フ 福谷 勘介
 陸軍歩兵二等卒山田市太郎金百二十圓ヲ賜フ 山田庄太郎
 陸軍歩兵二等卒大島小次郎金百二十圓ヲ賜フ 大島恆藏
 陸軍砲兵一等卒石橋登茂惠金百二十圓ヲ賜フ 石橋吾老

陸軍砲兵二等卒淺田藤平金百二十圓ヲ賜フ 淺田 寅吉
 陸軍輜重輸卒見崎才一金百二十圓ヲ賜フ 見崎保太郎
 陸軍輜重輸卒高村牛太郎金百二十圓ヲ賜フ 高村 伊助
 陸軍輜重輸卒玉元利藤太金百二十圓ヲ賜フ 玉元源五郎
 陸軍歩兵二等卒山崎喜一郎金二百圓ヲ賜フ 山崎 ユウ
 陸軍歩兵二等卒杉野勘作金二百圓ヲ賜フ 杉野 忠夫
 陸軍歩兵二等卒木原政一金二百圓ヲ賜フ 木原 仁作
 陸軍歩兵二等卒竹重月夫金二百圓ヲ賜フ 竹重 壽
 陸軍歩兵二等卒垣内彌平金二百圓ヲ賜フ 垣内 仙助
 陸軍歩兵中尉從七位山澄清三六圓ヲ賜フ 山澄 テツ
 陸軍歩兵軍曹寺戸富太金二百七十五圓ヲ賜フ 寺戸久治
 陸軍歩兵二等卒西川友市金二百圓ヲ賜フ 西川 玉藏
 陸軍歩兵二等卒角鹿太郎金二百圓ヲ賜フ 角 佐藏
 陸軍歩兵二等卒前竹治郎金二百圓ヲ賜フ 前 龜松
 陸軍歩兵大尉從六位勳五等勝野惣二郎金四百五十圓ヲ賜フ 勝野 ムメ
 陸軍騎兵上等兵生田虎人金百三十圓ヲ賜フ 生田 フシ
 陸軍工兵上等兵田中純一金百三十圓ヲ賜フ 田中 國三郎
 陸軍工兵上等兵伊藤彦太郎金百卅圓ヲ賜フ 伊藤 平次郎
 陸軍歩兵二等卒池田榮六金百二十圓ヲ賜フ 池田 榮次郎
 陸軍歩兵二等卒安村政輔金百二十圓ヲ賜フ 安村 直次郎
 陸軍歩兵二等卒濱田新吉金百二十圓ヲ賜フ 濱田 長吉
 陸軍歩兵二等兵八幡増市金百二十圓ヲ賜フ 八幡 ナヲ

列國 支那戦争記第拾編

(十一月十日發行)



戦記

嗚呼、矛盾——撞着

聯合軍の西進

北清今日の勢如何、唯矛盾と撞着の外なし何となれば清國の爲す所列強の行ふ所殆ど全く矛盾と撞着とを以て充たされたれば也北京陥落後本國を出發したる獨逸のワルデルセー元帥は清國政府の媾和使たる李鴻章と相前後して天津に入り李鴻章が天津の海軍公所において頻りに露公使等と折衝するの傍らに於てワルデル

セー元帥は列國軍の參謀を會して保定進撃の策を講じ李鴻章が兎にも角にも列國と休戦條約を議定せんが爲北京に到着せる十月十一日を以てワルデルセー元帥は其統轄の下に列國軍隊聯合の觀兵式を天津城外の觀馬場に舉行し而して明十二日を期し聯合軍の一部は北京天津より路を分ちて保定正定兩府の遠征に向はんとす即ち北清今日の情態は一方には秘密閣議として天地暗さが如くなるも他方には又一道の日光線に雲間より洩れ出で来るものゝ如し若夫れ聯合軍の一部が北京陥落を以て満足せず更に保定正定に進撃せんとするに反して露軍は全く北京を撤退しす所は公使館の護衛兵一小隊に過ぎざるの顯象に對照すれば其矛盾撞着の跡更に一層を加ふるを見るなり

今先保定正定進撃の事を叙せんに元來此の進撃を爲すに至れる理由を尋ねるに其理由甚だ多端なり

曰く保定は名義上に於ては今尙直隸省の首府なり故に宜く之を占領して直隸全省を占領の義を全うすべし

曰く保定には宣教師の二家族并に其信徒義和團匪の迫害に遭うて一箇の壘壁中に籠城し今尙は固守して餘命を全うし居るものあり正定も亦同様宣教師の一族今尙は匪徒の迫害に遭うて救援を待ち望めるものあり宜く速に之を救ひ出さざるべからず

曰く保定并に正定方面に於ては宣教師及び其信徒の難に罹れるもの甚だ多く且つ團匪及び官兵今尙は盛に集合し居れり宜く之を剿討して其懲罰の恐るべきを知らしめざるべからず

曰く保定は現今北京聯合軍に對する清國各軍の根據地なり宜く之を征討して其根據地を奪はざるべからず

セー元帥特に英のノール將軍を指名したりと云ふ我軍よりは第五師團の伊藤參謀衛兵十數名を率ゐて觀望視察の途に上る筈なり

初め聯合軍の北京に入るや狼りに廣瀾の地域を占領して其兵力を散漫ならしむるの不利なるを察し北京城の東面通州より天津に達する一路を守備するの外は敢て遠く兵を派せず即ち北は土城關(即ち元代城壁の古跡にして今尙は土壁の現存する所)一帶の土壁を限りて我守兵を置き西は北京城壁を限りて城外一步又守兵を置かず唯萬壽山頤和園の一角のみ露兵一時之を占領し守備せるのみ其南面に至りては南苑の敵を掃蕩するが爲と鐵道修葺の必要とより黃村附近迄我兵を派遣せるを亦敢て同地方一帶を占領せるにあらざる故に北京城内は聯合各軍の威力甚だ大なりと雖ども城外數里の地は今尙義和團匪の跋扈跳梁する所にして南苑、西山の

からず

大凡そ此等諸般の理由はワルデルセー元帥の帷幕に參せる列國軍の參謀官をして遂に保定、正定進撃の議を決せしめたる所以なりと雖ども若露骨に保定、正定進撃の真相を説明するを得ば北京攻撃に間に合はざりし獨をして功名手柄の地を與ふるものたるに外ならずと謂はざるを得ず

聞く此の保定、正定の進撃に與る列國軍は獨を主力とし英、佛、伊を加へ都合四箇國にして日、米、露、韓の四國は之に與からず其兵數は獨軍五千英軍二千佛軍二千伊軍一千總計約一萬にして其内獨佛二軍は天津より直ちに保定に向ひ英、伊兩軍は北京より保定に向ひ共に明十二日を期して出陣し兩路の軍安肅の附近に於て相會して共に保定を攻め之を陥落して後更に部署を定めて正定府に向ふ筈なりと云ふ其指揮官はワルデル

兩方面時々警報を傳ふ天津方面に於ける蓋又然らん故に天津、北京より兩路兵を進め以て保定を占領し更に進んで保定を占領せば直隸省の中央を東西に貫通して聯合軍の足跡を印するを得べく直隸の土民を威服するの手段としては或は一妙策たるを知るべからざるも其進撃は大局に於て格別の利益なく却て損害を與ふる者の如し元帥幕裡の參謀會議に於ては此回の進撃に就ては格段に敵の抵抗あるを期せざる者の如く而して之を攻陥占領して相當の懲罰を土民に加へたる上は早速撤退して北京と天津とに引揚ぐることに決定せる由なるも而も山東より直隸に至る一帶の地域を占領せんとするは獨帝年來の宿願にして此回の舉は取りも直さず宣教師救援の好名義の下に聯合各國の助力を得以て其宿願の地を爲さんと欲するものなれば保定、正定占領の後には更に如何なる提議を爲さんも亦知る

べからず想ふに山西の邊疆に蒙塵せる西太后の政府は聯合軍の保定、正定に進撃するを聞きて更に西方に巡狩すべき平將九山西、河南、陝西の清官兵も尙兵を按して動かざるを得るや否や今や時高秋に屬し寒からず又熱からず壯士皆飛舞を思ふの時獨、英、佛、伊の諸軍此時を以て遠征の途に上る正に是れ「黃沙百戰穿金甲、不破樓蘭終不還」の意氣あり其勝算の歴々として沿道各地の土民が如何に恐るべき懲罰を蒙るべきかは想見するに餘りあり余輩は獨兵が此の役に於て其平生磨し來れる伎倆を揮はんことを信ずると共に無辜の土民が兵亂の慘禍に罹るを想ふて氣の毒の狀に堪へざるなり

休戦の使節

聯合軍の一部が十月十二日を以て保定に向へるは前段既に略敘せる所の如し而して之と相反して清國の媾和

使たる李鴻章は昨日を以て通州より北京に到着し一先づ其従前の寓居たりし賢良寺に橋輿を卸せり

慶親王京に在る以上は縦し媾和談判の場所天津と定まらるも李鴻章は慶親王を迎ふる爲め必ず一たび北京に來到するを得べしとは何人も想像せし所なるが李鴻章も露國の提議に係る媾和談判の場所を天津とするの意見も列國多數の容るゝ所とならず露國公使ギルニス氏が我若し衆議の如何に關せず先づ天津に下り去らば列國公使も我決心の固きを見己むを得ずして天津に下り來らんとすの横着なる仕打は却て列國公使の感情を害したるが如く露獨公使の外には列國の公使皆北京に留り其差當り困り居れる衣服調度の如きは商人に託して上海より購ひ來らしめ以て久住の準備をなし媾和談判の場所を天津とするの一議は到底成立の見込なきに至り且つ慶親王より屢次我野戰電信に託して其の上京を促

し來れるより兎に角俄に北に至るに至れるものゝ如く其一行中には關内外鐵路總辦張翼及中外日報主筆曾廣詮等あり其從者及び行李等も流石に支那的に甚だ多く簡易を尙ふ外國人は國家危難の階尙ほ且つ斯かる大仰なる旅行をなすを訝からざるものさ程なり一行は支那兵數十名に護衛せられ更に其前後を露兵二中隊に警護せられ昨日早天通州を發し午後零時四十分を以て朝陽門に達し直ちに賢良寺に入れり通州邊にても露兵一切警護して容易に他國人の面會を許さざりしが當地にても同様なるべしと云へり是れ賢良寺は金魚胡同にして露國占領地内にあるが爲めなり慶親王の邸は我占領地内にありて同王は其歸來の當初より我軍隊の手に保護せられ李鴻章の寓は露國占領地内にありて又始終露軍の手に保護せらる蓋し亦奇異なる現象と云ふべきなり

夫れ既に慶親王同り李鴻章來れり缺く所は西太后の政府が更に媾和全權委員に追加せる榮祿其人のみ榮祿は十一日頃保定より水路天津に出づるの豫定なりしと云へるも果して何のいを以て北京に到着すべきか未だ分明ならず殊に慶親王、李鴻章の二人に對しては列國共明かに清國政府の全權たることを承認せるも榮祿に對しては何國も未だ敢て其全權たることを承認せずと云へば列國は兎に角慶親王、李鴻章の二人を對手として談判を開くの外餘術なかるべし目下露、獨の兩國公使は天津にあり故に列國全く同一の歩調を以つて談判を開始するに至るや否やを斷言する能はざるも今日迄の成行によれば日、英、米等北京に在留せる諸公使の間には既に大體の協議成り兎に角清國政府の指令特派したる慶、李二人の全權委員たることを承認し之に對して休戦其他に關する假條約を締結し此の假條約の結果

として眞個に清國の政府たるに堪ふべき有力の政府を組織せしめ且つ同政府が本條約を締結し眞成に這回の事局を落着せしむるが爲に指命する所の構和全權委員中に構和條款實行の責に任すべき有力の大臣即ち劉、張等を加へしめんとするに在るが如し李鴻章の上京せざるも道般の消息を聞知し其上京が必らずしも無益徒勞嗤笑を外人に取るのみにあらざるを看取せるが爲めなるべし

然りと雖も清國政府の行爲は由來緩慢にして一舉一動毫も敏活機敏の働さを見ず殊に皇帝西狩の今日に於ては直隸省は全く無政府の狀を呈し此處に官兵の一團あり彼處に匪徒の一群ありと云ふが如く統一なく節制なき兵勇匪賊各地に出没せるが故に假に休戰條約を締結するも北京天津に駐營する各軍隊は固より休戰の故を以て警戒を解くべからず隨つて休戰の實行甚だ難く

休戰の利益も亦甚少し且つ夫れ休戰の事をして十數日前に決せしめたらんには保定、正定の進撃は或は之を防止するを得たるなるべく若し又其以前に於て保定、正定其他各處に於ける宣教師の今尙は生殘れる者を保護して之を國公使に引渡すの手段にても盡したらんには保定、正定攻撃の論は當初より起らしめざるを得たるならんも西太后の政府は北狩西遷唯聯合軍の追撃を恐れて其構和を求むるに急に單に構和の使節を派することを務むるも毫も構和を易ならしむるの手段を盡さず休戰の使者たる李鴻章が京に入るの翌日を以て聯合軍の一部は保定進撃を實行するに至る是れ畢竟清人の緩慢遲鈍國家危急の日尙且つ愆然として毫も敏活機敏の働さを爲すことを欲せざるの罪にして余輩は之を評するの辭なきに苦しむなり一半は晴一半は雨季鴻章の上京保定の進撃又以て北清に於ける列國今日

の狀勢を概見すべきなり

支那は如何にして賠償金を

支辨すべき乎 (下)

鹽は清國税源の大宗たるに近來漸やく疲敝に就くは、吏胥の中飽と、服稅者との多きが爲なり、今日の計は官鹽私鹽の名目を除去し鹽場の商估に給與せる憑帖を回收して民間の隨意に鹽を製するを許し、但だ緊要なる關稅に於て、他の貨物の例に照して、鹽金を徵收するに在り、此の如くは鹽官、鹽吏、鹽勇、鹽船等は、一切廢すべく、特に歲入加増するのみならず、而かも且つ歲々數百萬の經費を省くを得べし、豈に財源に大裨補ならずや、此れ鹽關を設くるは、以て籌款するに足る者一なり。

南方の米を北方に漕すること數百萬石、每石の運送費に十八九兩を要す、北京に抵るに及では、一石の價銀

一兩許りに抵るに過ぎず、上は國帑を糜し、下は民膏を竭すこと此より甚しきはなし、豈に向は姑息すべけんや、今一切米を改めて銀と爲さば、即ち漕督、糧道以下の官員、津局、滬局、通局の一切の委員、司事悉く廢撤すべし、國家歲々二三百萬兩を省き、而して民間も亦誅求の苦を免かる、未だ始めより富を民に藏するの法にあらざるはならず、此は南漕を折するは、以て籌款するに足る者二なり。

阿片煙盛に行はれてより、正金輸出の最大の漏卮たり今其の輸入を禁する能はざるも、其の利權を操縱することを得べからずばならず、香港の成法に照して、商を招て處辨せしむるに如くはなし、煙釐金は歲々數百萬兩を徵すべく、並びに英廷と熟議して、印度の阿片産地に就き、清國より局を設けて、印度人の製せる煙土は、概して官局に交付して買收することとし、官

局より自ら運輸して清國に廻らば即ち其の賣捌の權は清國政府之を操り、其の盈餘の利を得ることとなり若し又將來之を禁止せんとするにも、其だ容易なるべし、此れ官煙を售るは以て籌款するに足る者三なり。西洋印稅の法は、事簡にして行ひ易し、蓋し下に取る者其だ多く、而して上に集まる者甚だ厚し、釐金の人民を病ましむるが若きに非ざる也。今若し新たに印稅條例を訂定し、先づ通邑大都より之を施行し、凡そ行店、交易、家契約等の項を擧げて、原價十分の一の印紙を貼用せしめ、原價の増すに従ひ、稅率を遞加し將來國內に通じて施行するに至らば、則ち總計の額に於て、歲々數十百萬兩を得べし、此れ印稅を行へば、以て籌款するに足る者四なり。此の四項は皆舊眉の急を救て而して善後の計を爲すに足り、行ひ易き所の者なり、其他釐金を全廢して、

稅を加徴せば、則ち釐金の收入も盡く官に入り、私囊を肥すの幣を防ぐべく、現在郵便制度を推廣して驛站の制を廢せば、無用の耗費を節省するを得べし、河防工事には、嚴に官吏の侵漁を絶たば、歲後の費省減すべく、冗員を實際の政務に照して淘汰せば、素餐の費輕らすべし、かくて實力奉行せしめれば用を裕にするの道は、即ち用を節するの中に在り、何ぞ貧弱を患へんと、然るに此の議論の得失は、猶ほ疑問の中に在り。

日英交渉の公文書

(承前)

七月四日ホワイトヘッド氏は東京より電報を以て左の如く報道し來れり

余は本月二日附閣下訓電の要旨を昨日青木子爵に通告せしに子爵は即時之を首相に提供すべき旨を約束せり而して子爵は曰く自分の意見にては外國軍隊の

接近は虐殺の合圖となるべきを以て列國公使館の救援は實際に能はざる所なり余は南清總督の手を假りて清國政府と交通せんとしたるも南清の各總督も矢張り北京との聯絡を遮断せられ居るなり云々且つ曰く今日の季節に於ては北京遠征に少くも七萬の軍隊を要すべしと

之に對しソールズベリー侯は同日重てシーモア中將よりの電報をホワイトヘッド氏に廻送して曰く此電報に依れば形勢は極めて危急なり貴下は直に此電報を日本の外務大臣に通知せらるべし迅速に援兵を天津に派遣し得る處は只日本あるのみ孰れの一國も歐洲にて此處置に異議を唱へたるものなし然るに七月五日附にて東京の英國代理公使より左の電報を受領せり

昨日の電報に關し日本外務大臣は昨夜一通の覺書を余に致せるが其大要に曰く日本政府は清の動亂を以て外面に表れたるよりも根底深く其範圍も亦大かりと思料す日本政府は列國協定の行動を確守するの準

備を爲せるも今や北京の遠征は非常に困難にして且つ大軍の必要なるを確認せり故に日本政府は列國が刻下の事局に適應すべき一致の處置に關し相互に意見を交換するの有利なるを認むと謂ふにあり余(英國代理公使は)日本の外務大臣が關し各國へ齊しく此の覺書を提供したるものと信ず同大臣は其の所謂其一致の處置が如何なる處置たるを要す可き乎を明示せずと雖も思ふに外務大臣の眞意は日本政府は豫め列國の同意を以て列國が今後起る可き總ての紛擾より日本を保護し且つ經費兵員の支拂に對し相當に償還せらるべき事を保證するに於ては大兵を派遣すべしと謂ふにあらん日本政府は太沽天津の守備を援護するため既に派遣したるもの、外更に即時約二萬五千の軍隊を派遣せんとす

此に於てソリスベリー侯はホワイトヘッド氏に宛て更に二通の電報を發して曰く北京救援の熱心なる希望に對し成功の見込を以て運動し得るものは只日本あるのみ若し此際躊躇せんが日本は重大なる責任を負はざるべからず英國政府は

既に動亂地方に派遣せられたる軍隊を増加するがために如何なる財政上の保証にても之を興ふべし
英國政府は北京救援の時機に後れざる迅速の行動と今後計畫せらるべき別種の行動とは明確に之を區別せんことを希望す而して今後計畫せらるべき別種の行動に關しては將來更に協議する所あるべし

同日ホワイトヘッド氏よりの電報に曰く
七月四日附閣下の電報に關し日本外務大臣は只今余を訪問して在清日本軍隊の總數二萬に達すべく救援隊を能く限り迅速に派遣すべき旨を通告せり
以上日本の出兵に關する日英兩國の交渉頗未はソールズバリー侯より歐洲各國及び米國の政府に夫夫通報したりと謂ふ (元)

北京籠城録 (承前)

八月五日
午前二時响喊の聲起ると共に銃聲四圍に激す、英國公

使館最も其衝に當れるが如し
總理衙門の引上要求に對し各國公使は今や絶對的に之を拒絶すべからざるに至り暫く一時を編織して聯合軍の救援を俟つの策を取り總理衙門に回答して曰ふ
各國公使は各自の意思にて自由に駐在國を撤退するを得ず、各國公使は本國政府に對し清國政府の意思を報告して訓令を請ひ其命令に従ひ去就を決せんと欲す、清國政府に於ても各其在外公使をして各國に其意思を表明せむことを望む
此時に當り北清より世界の各地に向て發する電報は先づ人を馳せて山東の首都濟南府にすらしめ此處より上海を經由して四方に送電するの外なし、
北京より濟南に至るには少なくも四日を費すべく愈本國政府の訓令到達する迄には少くとも十日を経過せざるべからず、客月末に於て將に天津を發せんとしつ

ありしといふ聯合軍は遅くも此時迄には北京に入るを得ん是れ各國公使の頼む所ありし也、若し援軍此時を以て北京に入らず各國政府より萬一引上の訓令來るか又は清國政府が各國公使の回答を以て引上拒絶と看做すことあらんか事態或は更に一層の難を加へ來らんとす
六 日
聞く總理衙門より公文來れり吾公使は之を秘密に付して公言するを憚るものゝ如し乃ち外人間の風説を聞くに其公文は政府は特使を濟南府に派して各國公使が引上に關する請訓の電報を各本國政府に取次がんとことを請し且昨夜は外國兵が清兵を攻撃したるに由り不意の騷擾を惹起したるに以後は如此事からんことを望む云ふにありし由若し果して是のみならずは秘密に附するを要する理由果して何にかある

頃來の風説に據れば董軍と義和團とは其關係甚親密なれども武衛中軍と義和團とは殆んど水火相容れざるの狀あり國爭常に絶えずと但其眞偽を知らず
七 日
今日は舊曆孟蘭盆の十三日あり因て檜原書記官以下戦死者の爲に心計りの追善を營み陸軍隊、義勇隊皆詣つ、夏草深き處を以て蓋はれたる新墳總て八箇各嘗て杉山書記生の爲に用意せる造花とビール瓶の空瓶に挿みたる草花とを供へたるやどいづれか深き種からざるはな

既に於て英公使館の方面に銃聲を聞く
八 日
昨日の上諭に李鴻章を議和大臣とせし各國外部と和議を電商せしむとありし由苦力の云ふ所に據れば交民巷一帶の敵兵著しく減じ多く城を出で去れりと

英國公使館に赤痢患者二名を生ず

今日總理衙門大臣連名にて李鴻章、赫和大臣に任せられ上海に於て談判を開く旨通知し來れり

義勇兵某謎をかけて曰く援兵を付けて一、大晦日の市と解く。心はまづばかり、曰く籠城をかけて一、下手な宗匠と解く。心は句(食)に困る。夜間敵より打ち出し終宵安靜を缺く。

九 日

晝間無事、午後公使館に於て風呂を立て沐浴す、清爽言ふべからず肅親王府附近の敵大に喧噪を極む其狀新舊交代せる如し、教民曰く歌唱の聲山西の音なりと府東「張」と記せる一大旗を樹てたり

十 日

午後二時銃聲盛に四方に起る暫くにして休む。數日間援軍の消息絶え果て人々今は援兵來さへなと云

進み來り其五六名殺されたりと之を聞きたる吾義勇兵は此日より特に銃の外日本刀を以て哨線に立つ義勇兵は銃あれども剣なければなり

午後八時雷雨至る、四面の敵突然大に打出し雷鳴銃聲一時耳を聳す雨聲、風聲、雷聲、人聲、犬聲總て是れ驚かされ易き敵の發砲の因となりざるはなし

援兵來 愈確らしく北京籠城紀念章製造の議各國人の間に起る

十一 日

援軍の消息全く絶えたる時は人々復た援兵を言はずして徐に運を六に任すの覺悟をなせざるも愈二三日後となれば造次顛沛も之を忘るゝこと能はず真に一日千秋の思あり

總理衙門の信あり、英公使館附近に市場を開かん爲明朝九時人を派して商談せんとなり。馬肉と粉米と怪し

るに至りたる時秘信あり、是れ八日午前八時二十分南蔡村二吉羅砲廠より發したる福島少將より致せる者也、曰く

日英米露の聯合兵は支那兵を破り只今行々此地に來り柴中佐の書に接し北京の狀を詳にし衆心奮激す意外の變なくば十日馬頭、十一日張家河、十二日通州に至り十三十四兩日に於て北京に進入すべし

二箇月以來援兵の來るを待ち而も來らず偶接する信通は常に事實とならず、今や運を天に任せて行く處まで行かんと思惟し居たる矢先に此確報を得たること、士氣何ぞ振はざるを得んや

今日、昨夜の敵襲に就て英國公使より總理衙門に詰れり衙門は答へて曰く此等抗命の兵は已に業に處罰せり昨夜敵襲の時英公使館の方向にては義和團壘を出で、

き麥粉にて造りたる饅頭の外食ふ物とては皆無の時際し市場開けて更に好味の食を得と思へば嬉しき限なし

十二 日

午前十一時銃聲盛に四方に起る、頃刻にして止む佛國公使の言ふ所を聞けば昨日張家河にて大戦あり清兵一千人負傷せりと一苦力は語れりと

敵、銃眼を狙撃し監守の兵死傷する者各國共少なからざるを以て外を窺ふ時の外多く之を塞ぐことゝなれり夫の福島少將の書信に據れば明日明後日は援兵が北京に來るの日取なれば今日頃は遠く砲聲を聞く事もあらんかと竊に待ち居たれども終に聞えず、總理衙門の人亦來らず

李秉衡張家河にて陣亡せりとの噂あり援軍帝都に近ければ敵兵は思ふに最後の攻撃を興ふべ

しとは身方の豫期せる所果せる哉午後五時頃より翌曉に至る迄盛に小銃を亂發して殆ど止む時なし、英國公使館の方面最も激しく海岱門上より打放つ怪しき大砲の音さへ聞ゆ蓋し休戦以來の大攻撃也

十三日

昨日總理衙門より端郡王以下諸大臣平和談判に就き商議せん爲本日午前十一時英公使館に來ることを通知し來り各國公使は之を待ち受けたるに時至りて彼等遂に來らず一書を寄せて曰く清國政府は平和の關係に復せんことを切望すれども各國兵は昨夜交りに吾兵を撃て其二十六名を殺せり各國公使の意既に平和の關係に復するを好まずとすれば吾輩今諸君と相見ゆるも其何の効あるを知らざる也云々
夕總理衙門より各國公使へ本國政府よりの電報を轉送し來る引上に關する訓令にはわらず

兵は遂に來りたるか午前二時半に至り黒面黃被の兵あり海岱門と前門との間なる城壁下の水道を潜りて玉河河床に現れ出でたり之を何國の兵とすす曰く英國の印度兵あり聯合軍と交民巷との聯絡は實に此黒人の手に由りて先づ開かれたりしなり (畢)



彙報

杉山書記生痛惜の親電

大清國皇帝より我 天皇陛下へ杉山書記生を痛惜せられし親電は左の如し(前記參看)

大日本國皇帝

大日本國大皇帝の好を問ふ曩きは貴國書記生杉山彬水定門外におひて口舌の細故をもつて扱はれたるにより深く隣誼に悼るゐるを恐れ即時に旨を下して匪

午前十一時頃東南に砲聲を聞く其打ち方清兵の流に非ず思ふに聯合軍の近づけるなるべし
午後十時敵は激烈なる攻撃を始めたり時に雷雨並び至り物凄き事言はん方なし我は彼が最後の攻撃たるを知れば勇を鼓して防戦し喇叭を吹き呐喊を發し大に聲威を壯にす此強は頃刻にして止みたれど翌曉に至る迄の間に哨兵線に兵を増加すること再度

十四日

豫報の如くんば今日は聯合軍必ず城外に寄せ來るべしと片唾を呑で待ちたるに午前二時突然東便門と朝陽門との中間なる觀象臺附近にて野砲とカッタリングの聲を聞くこと盛なり衆驚喜爲す所を知らず午前八時に至り朝陽門邊盛に野砲の聲起り十時に至り漸々連發暫も止むかす既にして報あり今曉外兵二百餘東便門を越えて城内に入れりと嗚呼六句の間窟裏待ちに待ちたる扱

を緝し懲辦せしむ該書記生被殺の情事を追念せば愈深く惋惜す本日既に明に諭旨を下し禮部右侍郎那桐を派して以て祭を致さしめ並に祭費料五千兩を賞給し靈柩貴國に到着の上は内閣侍讀學士李盛鐸をして參贊官員を派して再び典儀を行はしめ要て朕が惋惜して忘れざるの意を示す貴國は清國と文字同く素より和誼を執ふす此大清國罪を友邦に啓きたるも大皇帝の極力維持せらるるを被り感激の忱曷ぞ已に極まらん遠望むらくは各國を諭勸して早く和議を定め乃ち東方の大局を保全し裨益實に多し朕臨切盼切の至りに堪へざるなり

我陛下の御返電

前記清國皇帝の親電に對し我 天皇陛下より送らせられたる御返電左の如しと承る

大日本國大皇帝

大清國大皇帝に復す此頃國電に接して即ち大皇帝は帝國公使館書記生杉山彬が貴國官兵の殘忍暴戾なる舉に由りて害はれ死去したる情事を追念せられ既に貴國禮部右侍郎を派し往て祭を致さしめ並に祭費料五千兩を賞給し靈柩本國に到着の上は貴國公使館參贊官を派して再び典儀を行はしめ以て欣慰す又言ふ各國を諭勸して早く和議を定めば東國の大局を保全

し利益實に多し、臨切の至りに堪へず等の語あり、平和を克復するの一節に至りては、特に大皇帝陛下所のみならず、朕も亦深く是を望む。惟大皇帝陛下如し果して平和を切望しなば、宜しく須らく明に諭示を下し、斷じて守舊頑固の人を擧用せず、丞かに應に中外に重望ある有爲のものを選派し、派して大臣と爲し、別に一新政府を建つべし、並に望む大皇帝陛下に幸せず、直ちに北京に還り、以て民心を靖んじ、面して罪を友邦に聞かれたる謬を自覺する實據をせば、各友邦之を諷するを免さざるの理あらんや、努め望らくは、大皇帝陛下が此誠實なる勸言を接納あらん事を朕翹望の至りに堪へず。

獨帝清帝の應酬

十月二日の伯林電報として、米國新聞に記載する所に據れば、九月下旬清國皇帝は、獨逸皇帝に宛て、左の親電を送せられたり。
陛下の公使が突然清國に勃起し、朕が官寮の續歴する能はざりし暴徒の犠牲となりしは、朕の深く哀悼に禁へざる所なり。朕は上諭を以て、同公使の靈前に供物を備へ、參贊官長をして、神酒を手向けしめ、且つ南北兩部

の各道臺に命じて、同公使の遺骸輸送に關し、必要なる措置を施さしめたり。遺骸の貴國に到着せる上は、更に祭壇に供へしむる所あるべし。
貴國は常に清國と親密なる關係を維持せられたり。故に朕は陛下が憤怒の心を去り、速に平和を克復して、將來一般の和親を計るの途を作られんことを希望す。
此親電に對し、ウヰルヘルム皇帝は九月三十日附を以て左の如き返電を送られたり。
清國皇帝に致す朕は陛下の親電を受領し、陛下が清國宗教上の典禮に則り、朕が公使の醜辱なる虐殺に對し、哀悼の意を表せられたるを喜ぶ。然れども、獨逸皇帝として、又一個の基督教徒として、朕は彼の殘虐なる犯罪が單に神酒を手向けたることに依りて、正當に報償せられたり。と認むる能はず。獨り公使の虐殺せられたるのみならず、基督教を信奉する同胞僧正、宣教師、婦人及び小兒の多數は、皆其の信仰の故に依り、悲惨の最期を遂げたり。此等の可憐なる被害者に對する罪惡は、果して陛下の命令に出でたる神酒を以て、輕減せらるべき乎。朕は各國の間に不可侵權を保有する公使館に對する暴行及び各國の在留民其他基督教を信仰する陛下の臣民に施せる兇暴の所爲に對し、陛下に其責任ありとせず。然れども、陛下在延の臣僚は、基督教國の各國民

を戰慄せしめたる兇行に對し、到底有罪の責を免れざるなり。若し陛下にして此等の犯罪者に相當の處罰を加ふるに於ては、朕は之を以て始めて基督教國民を満足せしむべき報償なりと認むべし。
陛下若し以上の目的に對し、陛下の權力を行使することを希望せられ、之れが爲め各被害國の援助を要せらるるに於ては、朕は之に同意すべし。朕は又陛下の北京に還幸せらるるを歓迎するものなり。之れが爲めに、ワルデルセー元帥に對し、朕は單に相當の敬禮を以て陛下に奉待するのみならず、若し陛下の希望せらるるに於ては、軍事的保護をも與ふべき旨を訓令すべし。朕は犯罪を處罰し、損害を賠償し、且つ清國に於ける外人の生命財產に對し、擔保を得て、以て平和を克復せんことを希望す。殊に將來自由に宗教上の任務を遂げしむるは、朕の切望に堪へざる所なり。

英佛白三國の感謝及回答

本邦駐紮英國臨時代理公使より青木外務大臣に宛てたる八月二十九日附書簡譯文左の如し。
書簡を以て啓上致し、候陳者在、北京外國公使館救援の事に當りて、日本國軍隊の勇武壯烈にして、好く戰闘に堪へ、速かに奇捷を奏し、以て救援軍の成功によつて大

に力ありたるは、英國政府の洵に嘆賞する所に有之。仍て其旨英國政府の名を以て閣下へ開申致し、候。英、佛、白三國大臣ソールスベリー侯より電訓有之。候。聞此、敬得貴意候。
本使は茲に重ねて閣下に向ひ敬意をし表候。敬具。
右に對し、九月一日附を以て、青木外務大臣より英國臨時代理公使へ送りたる回答左の如し。
以書簡啓上致候陳は、北清の戰闘中、日本軍の發揮したる勇武に對し、貴國政府の熱心なる賞賛の意を、本大臣に傳致する様、ソールスベリー君より電訓有之。之を以て去月二十九日附來書の旨、領承致し、候。右御挨拶は、帝國政府の深謝する所に有之。候へども、聯合軍の顯著なる成功は、勇敢なる貴國兵の奮戦に負ふ事も亦大なる義と存じ、候。日本國軍隊と貴國其他關係列國軍隊と終始協同一致して、以て速に在北京列國公使館救援の効を奏したるに對し、帝國政府は茲に慶賀の意を表し、候。本大臣は茲に重ねて閣下に向つて敬意を表し、候。敬具。
又十月二日附本邦駐紮佛國公使より青木外務大臣に宛たる書簡譯文左の如し。
拜啓陳者在、清國日本軍及び日本官廳は、諸公使館并に宣教師の救援及び佛國の負傷者看護に力を盡され、以

て佛國軍及び佛國官廳に對し貴重なる補助を與へられたる趣清國駐劄佛國公使に出征中の佛國海陸軍指揮官より報告有之佛國政府は日本國に於て右様好意を表彰せられたるに對し深く感謝の意を致し且日佛兩國の兵員相提携して勇進奮闘したる戰爭場裏に在りて互に善なる好誼を表したるは國政府の欣喜に堪へざる所なり就ては速かに本使より以上の意を日本政府に傳陳致すべき旨本國外務大臣より電訓有之候に付不取敢此段及御通知候本使は茲に閣下に向つて敬意を表し候敬具

右に對し同日附を以て青木外務大臣より佛國公使に送りたる回答左の如し
書簡を以て啓上致し候陳者在北京列國公使館及び宣教師の救援並に貴國負傷者の看護に對し帝國軍隊及び官廳の補助なからざるの旨を在清貴國公使及び出征陸海軍司令官より貴國外務大臣に報告ありたるに就ては帝國政府に對し右好意に向つて陳謝の意を表し且戰闘にて彼我兩國軍隊の間に生じたる友誼の爲貴一政府の感せらるる満足の意を表する様貴國外務大臣より閣下へ訓令有之候趣本月二日附貴簡を以て御申越候處帝國政府は貴國其他關係外國兵の勇敢なる行動に依りて迅速顯著なる北京救援成

効を見るに至りたるに對し貴國其他外國政府と其喜を共にする所に有之候又貴國負傷兵看護の如きは畢竟博愛慈仁の主義に基き帝國政府の欣然行ひたる義に有之候處之れにして最も深厚なる御挨拶に接し帝國政府は感佩の至りに堪へず茲に深謝の意を表し本大臣は茲に重ねて閣下に向ひ敬意を表し候敬具
又十月十六日附本邦駐劄白耳義國公使より加藤外務大臣宛てたる書簡譯文左の如し

書翰を以て啓上致候然れば只今本使は我皇帝陛下の政府より左の電報を接手致候に就き茲に及通譯候清國に於ける白耳義國公使館職員は北京に包圍せられたる各國公使救援の爲舉行せられたる戰闘に參與せし日本國軍隊の補助により救助せらるる事を得たり貴官は右の援助は我邦の賞嘆措く能はざる所なる旨を外務大臣に開陳し且我政府の切實なる謝意を同大臣に傳へらるべし
本使は茲に閣下に向て敬意を表し候敬具
右に對し同二十三日附加藤外務大臣より白國公使へ送りたる回答左の如し
書翰を以て啓上致候陳者清國に於ける貴國公使館職

員は北京に包圍せられたる各國公使救援の爲作されたる戰に參與せし日本軍隊の補助に由り援助せられたるに就き貴國政府に於て深く其勞を感銘する旨閣下より日本外務大臣に開陳し且切實なる謝意を傳致すべき旨貴國政府より電報有之候趣本月十六日附貴簡を以て御通譯相成候處尤も町重なる御挨拶は帝國政府の深謝する所に於て帝國政府は聯合軍勇敢なる行動によりて迅速且顯著なる公使館救援の成功を見るに至りたるに對し貴國其他關係列國政府と其喜を共にする儀に有之候本大臣は茲に重ねて敬意を表し候敬具

外人の日本軍大評判記

(一)北京救援に加はりたる日本軍の好評につき外國人の筆に成りて外國の新聞に現はれたるもの其例少からず二三の既に本誌に抄譯したるものありと雖も尙ほ左に掲ぐるは總督(ランド)軍事通信員ランドル氏の其新聞に報じたる天津攻略記中の一節あり曰く
「傳ふる所に據れば夜(七月十三日)に至り聯合軍司令官は福島少將の許に至り其兵に退却の令を傳へんこと

を求めたり然るに少將は若し小官にして此隊を指揮し得べしとすれば即ち尙は敢て前進すべしとありと答へたれば即ち全軍は其地に踏み止まり尙は一步づつ侵略し行くに決せり斯くて交戰中常に其先頭に立ちたる日本軍は遂に天津城の南門に達す時に十四日午前三時二十分其門を破壊して之に闖入せり左れども内門未だ抜く能はず忽ち日本兵の敏捷なるもの城壁を攀ぢ踰りて其中に入り全軍鯨波の中に内部より門扉を開き之を進入す英佛の兵之に次げり敵を殺すこと算さし凡る人の日本軍將校及び兵士を賞揚せんとするもの之に如何ある語を用ふるも其過ぎたるを覺ゆ日本兵は何れより見るも最も完全なる軍人あり」と云々
尙ほ藝に南阿非利加の戰爭に従軍してレヂスミスの戦を見たるリンデ氏も近頃一倫敦新聞の通信員として清國に來り北京攻略の記事を神戸クロニクルに送りて

「天津以來聯合軍進軍の状を察し予は直に其先づ北京に入らんものは日本軍あるべきを信じ公使館救援の状を見んと欲せば即ち之に従ふにありとせり依て最近三日(北京陥落前)の聞予は之と糧食を共にし殊に入城前夜の如き敵前僅に三哩の地にありて眠れり寧ろ眠らんと試みたり英國の從軍記者にして日本軍に伴ひたるもの予一人なるのみ今は今に至るも他の軍に従ふの優りたるを見ず實際に敵の抵抗を受けたるもの即ち我日本軍のみなりしを以てなり英米の兵の如きは抗抵を受くることなくして入城したるに過ぎず」と云ひ近距離に於ての激戦は遂にレヂースミスに超ゆるものありしを述べ盛に日本軍の氏に好意を表したるを謝せり

(三)ロイナル北京通信員は北京進軍の趣味ある長電を倫敦に向け發したるが其中に云へらく北京進軍の最後の五日こそ實にも憂てきの限りありけれ、軍隊は痛く

苦しみの寒暖計は百度を示し時には尙ほ其上にも昇りぬ、見渡す限り黄沙塵を没し穀物の低く繁りたる野原は影だに見えず、斯る裡にありて日本人は目覺ましき忍耐の色を現はしぬ、輜重は盡ひ歩調も亂れずして能く揃ひけり、此に次ぐを露軍とし亦能く困難に堪ゆる軍隊の實を現はしぬ、去れど英米の軍は彼等と共に行軍せしは其力の極點をや示したらむとおぼし福島將軍の後ち人に語りて日本人に任せあらんには尙ほ二日前へに北京に着き得たらんと云はれたるも實にころ、誠に日本軍隊は暫しも休まざりしが、其騎兵、其斥候は先頭に進みて曠野を馳りぬ、斯くて營外にありて絶へず敵と衝突を試みたるをもて支那兵も之に堪へ得ずと云はず、食器と云はず、或は衣類調度の類ひなど棄て走るのやむ無きに至りぬ暑熱の爲り米兵は數百人日々遂に倒れぬ、印度兵だに兵苦しむたる有様なれば

怪しくもあらざ

(四)一通信員「キスリ紙上に曰く「十月十二日日本兵の大部隊本國に向け出發す士官の一人語りて曰はく我等は遂に遠く去る者に非ず若し必要に接せば直ちに我等の歸り来るを見るならんと吾人は北清に於て日本兵の減少を悲しむ何となれば彼等は其滞在中特に其試金石たる可き事情の下にありて常に能く壯絶なる勇敢及善行なる品行を以て、自高く稱賛せしめられたればなり」

日本の英獨協商加盟

去月十六日倫敦に於て英國外務大臣ソールズベリー侯と獨逸國全權大使ハツツンフルド伯爵の間に左の協定を爲したる旨本邦駐劄英獨兩國公使より夫々本國政府の訓令に依り去月廿四日を以て我政府へ通知し我政府が此協定に記載せる主義を認容するや否やを問合せたり其の本文は左の如し

獨逸國政府及び英國政府は清國に於ける其利益及び現行條約上の權利を保持せん事を希望し同國に於ける其相互の政策に關し左の主義を守るべき事を約す

(第一)清國の河川及び沿海の諸港何國の差別なく總て各國民の貿易及び其他各種正當の經濟的活動に對し自由開放し置くは列國に協通する永久の利益なりとす依て獨逸國政府及び英國政府は苟くも其勢力を及ぼし得る限り總て清國領土に對し此主義を守るべき事を約す

(第二)獨逸國政府及び英國政府は現下の紛擾を利用し自己の爲め清國版圖内に於て何等領土上の利益を獲得せざるべく且其政策をして清國領土の狀態を變ぜずして維持するの方計に向はしむべし

(第三)他の列國にして清國現下の紛擾を利用し形式の如何に拘らず領土上の利益を獲得せんとする時は

獨國政府及び英國政府は清國に於ける自國の利益を保護する爲め採るべき措置に關して豫め協商を遂ぐ可き事を保留す

(等四)獨國政府及び英國政府は他の關係列國殊に佛蘭西、伊太利、日本、埃太利、匈牙利、露西亞及び北米合衆國に本協定を通知し之に記載せる主義を認容せん事を勸告すべし

此れに對し我政府は前記協定に記載せる主義を認容する者は全然協定者と同一の地位を有すとの證言を英獨兩政府より得たるに因り該協定に加入し之に記載せる主義を認容する旨去月二十九日を以て在本邦英獨兩國公使へ夫々回答せり

談判基礎參案一致す

元惡處罰に關する獨逸の提議と韓和談判の基礎となるべき事項に關する佛國の提議は既に先頃の路透電報に

據り其要旨を記載せしが當時兩國政府より列國に照會せる公文及獨逸の提議に對する米國政府回答の全文は左の如きものなり先十月四日附獨逸外務大臣ビニューロー伯の公文

帝國政府は曩に義和團に援助を與へたる二三親玉及顯官の處罰を宣告せられたる山東省の道臺より清國皇帝の上諭を傳達せられたり帝國政府は列國政府も定めて同様の通報に接したるならんと推測す我政府は反證の擧らざる限り疑心を拂ひの意なきを以て此上諭を眞正なるものと見做して勘考するに今や清國に於ける秩序の復立に對し實際的基礎に向て一歩を進めたるを見る故に帝國政府は此際列國が清國に駐劄する自國の公使に訓令を發し左記の諸項を調査し併せて之に對する公使の意見を求められんことを希望す

第一 上諭に見ゆたる人名は何れも果して罰せらるべき人物にして又罰すべき人物は右を以て足れりとするべきや否や

第二 其提言されたる處罰は果して其罪に相當すべきや否や

第三 如何なる手段を以て列國は其刑の遂行を監視し得べきや

又十月四日附を以て米國政府が清國官吏の處罰に關する獨逸の提議に對し回答したる所左の如し

米國政府は清國皇帝の上諭を以て清國政府が列國公使館及列國居留民の被りたる損害並に暴行に對する列國の正當なる要求に應ずるの希望を表明したるものなりと思考せんと欲す尤も某々顯官の受くべき處罰に關し大統領は北京に駐劄する列國公使の證言に據り今回の暴動に最密接の關係あるもの一人と指

目せらるる端郡王にして萬一にも處罰に洩るゝか若くは剛毅趙舒翹等にして正當なる處罰を受けざるが如きとあらば遺憾之に若くものなき旨を豫め駐米清國公使に警告し置けり

此等の諸點を判斷するため米國政府當然處罰を受くべきものは 上諭に記載せられたる人々のみなりや否や又清國の申出でたる處罰の方法は犯罪に合恰するや否及び如何なる方法に據り米國及列國は満足なる處罰の實行を保證すべきか其意見を報告すべき旨を北京駐劄の米國公使に訓電せり

更に佛國政府は十月五日付を以て左の公文を發表せり 外務大臣は在外公使をして極東に於て佛國と協同したる列國に對し清國との談判上各國共通の綱目となるべき事項の一致を希望する旨を通告せしめ且つ左の公文を列國政府に通告せしめり

列國が清國に軍隊を派遣するや第一の目的は公使館の救援にあるを宣言せり幸にして列國の能く一致したるに列國軍隊の強勇に依り此目的は既に達せられ今や残る所の問題は慶親王及李鴻章に談判の全權を委ねたる清國政府より既往の行爲に對する相當の報償と將來に關し充分の保證を得るの一事あるのみ從來列國政府の言明する所に照らし佛國政府は左記の諸項を以て實際列國の感情に投合するものと確信し之を講和談判の基礎とせんことを提議す

- (第一) 北京に於ける列國代表者の指定する犯罪人の首魁を罰する事
- (第二) 兵器輸入の禁止を繼續する事
- (第三) 列國政府、團體及び個人に對し相當の償金を拂はしむる事
- (第四) 列國公使館保護の爲め北京に常置護衛兵を組

續する事

- (第五) 太沽の砲臺を破壊する事
- (第六) 北京天津間二三の地點に守備兵を置き以て北京より海濱に出でんとするの列國公使及び海濱より北京に入らんとするの列國軍隊の爲めに通路の自由を保たしむる事

此の提議に對し我政府は大体賛同の意を表したるも永久に兵器の輸入を禁止するは清國をして平和秩序を回復維持すべき當然の責務と並に外國人の生命財産を保護すべく條約上の義務を全うせしむるの趣旨と相容れざるの感あり又公使館護衛の爲め國籍言語を異にするの兵卒を以て一の部隊を編成するは實行上頗る困難なるが故に各國協議一致の上相當と認むる守備兵を各自其の公使館に設置するを可とするの意見を附して回答したり

我政府は十月十七日英露佛獨埃伊米各國駐劄の我公使に電報し駐劄國政府に發議せしむるに左の件を以てせり清國に對する商議の基礎たるべき一切の要求は商議の開始に先だち豫じめ北京に於ける關係列國代表者の審査推蔽に付すべし

我政府の信する所に據れば此手續に依て一定せられたる要求は皆列國の協同翼賛を受くるを以て實際の審議上大に簡單なるを得べし

佛國政府は日本政府の意見と共に他の列國より申込みたる修正意見を採り左の通り確定すと爲し同時に右提議に記載せる商議の基礎は北京駐劄列國代表者より夫々同文を以て清國全權委員に交附せん事を提案し十月廿日本邦駐劄佛國公使より其旨我政府へ照會せり

(第一) 北京駐劄列國代表者に於て指定する犯罪首魁を罰する事

- (第二) 列國間に協定すべき條件に依り兵器の輸入禁止を繼續する事
- (第三) 政府、團體及び個人に對し相當の償金を拂はしむる事
- (第四) 在北京公使館の爲め列國各自永久護衛兵を創設する事
- (第五) 大沽の砲臺を破壊する事
- (第六) 列國協議の上指定すべき或る地點を軍事的に占領し以て海濱に出でんと欲するの公使館員及び海濱より北京に入らんと欲するの軍隊の爲めに常に其通行を自由ならしむる事

右確定提案を見る時は佛國政府は其提議の原案に對し我政府の意見を全然採用せりと雖も我政府は前項の發議を爲し居るが故に該發議の趣旨を保持して佛國政府の提議を賛成し且つ商議の基礎を清國に提出する手續

に付きては佛國政府の提案に同意する旨を回答せり
然るに佛國政府は更に我政府に照會し佛國政府が其確
定提議を作るに當り原案に對して我政府の意見を容る
ゝに勉めたるは該確定提案の上に明かなれば右六個條
を記載する同文の公書を清國政府に提出するの意向を
以て列國同僚と協議する様日本政府より在北京日本公
使に速に訓令せんことを請ひたり我政府は佛國提案六
個條を清國に提出するに先立ち正當の用意として之が
實行以前に必要なべき審査推蔽を爲さんと欲するの意
見なりと雖も列國の協同一致を増進せんと欲するの餘
り意見の實行は他の關係列國の希望に副ふに決定し佛
國所望の如く北京駐劄日本公使に訓令に及びたり但し
關係列國の代表者協同して佛國政府所望の手續を履行
すべき事我履行の條件として保留し置けり

獨逸軍冬營地何如

北清事件の現況は已に戰爭行為を經過して平和談判時
代に推移せしに付ワルデルシー元帥も正定府攻撃を見
合せ専ら冬營準備に着手せしは頃來北京電報に見ゆる
が如し今後元帥は列國兵の爲めに如何なる冬營計畫を
定む可き乎は明かならねど元帥到着前已に聯合軍議會
に於て協定せし守備區域に對し甚だしき變更は爲さ
るならん只だ將來注目すべきは獨逸彼れ自身の冬營地
なり蓋し膠州灣保定府間の聯絡を執らんとするの意志
は獨逸が今に至りても抛ち兼ねる所なる可きが此の聯
絡の爲め兵力を各方面に分つは戰術上甚だ不利とする
所殊に冬營には一層の不利を感ずべし露國が北京よ
り撤兵して山海關方面に其力を集中せんとするは此不
利益を除却するが爲めに外ならず割合に大なる兵力を
有する露國さへも此の獨逸の困難は想像するに足る現

在の兵力にては殆ど之を奈何ともする能はざる可し然
ば最初より抱し聯絡計畫を抛つ可き乎或は又他に巧妙
なる新案を造り出す可き乎現に獨逸元帥は聯合軍總指
揮權を取が故に他國の軍隊を動かして自家の便宜とす
る土地に冬營せしむるが如き事も場合によりては出來
ざるにわらず此の邊に就ては猶注目の價値ありといふ

匪魁引渡に關する獨逸政府の

提議と米國政府の回答

國務卿閣下 下名は帝國大宰相の訓令に依り左記の件
々を閣下に通告するの光榮を有す
獨逸皇帝陛下の政府は北京に於ける國際法違反の暴行
に關する實際の犯罪者の引渡を以て清國政府と外交談
判を開始するの豫備條件なりと思考す機械に使はれた
る犯罪人の数は餘りに多くして悉く之を處罰するは文
明的良心の許さざる所なるのみならず假令其の中にて

重立ちたる匪魁を確認すべしとするも一々之を嚴罰に
處するは事情不可なるものあり然れども罪跡の顯著な
る少數のものに至ては他迄も之れが引渡を要求して嚴
重に處罰せざるべからず思ふに北京駐劄の列國公使は
之を調査する上に於て充分有效なる證言を與ふべく處
罰を受くべき犯罪人の員數如何は重立ちたる教唆者若
くは匪魁を捕縛するの問題に比較すれば稍輕少の要件
なり帝國政府は此事たる列國政府の同意を要するもの
なりと確信す何となれば正當なる處罰に關する意見の
相違は犯罪の賠償に關する意見の相違と同一なればな
り
此故に帝國政府は列國政府は北京に駐劄する白國の公
使に訓電を發し犯罪の教唆若くは遂行に關し明白に有
罪なる清國官吏を指名せしめんとを提議す
他の關係列國にも同一の趣旨を通告せり

千九百年九月十八日

駐米編逸代理公使ステルンブルグ

此提議に對する合衆國政府の回答左の如し
 貴下 北京に於ける國際法違反の犯罪者處罰に關し合衆國政府の採るべき態度に就き十八日貴下の留議に對して下名け左の回答を爲すの光榮を有す合衆國政府は八月三日の回答を以て言明せる如く當初より合衆國及他列國の臣民に加へたる暴行に關し責任ある清國官吏を處罰するを以て其目的とせり而して此等の兇惡は獨り北京に於てのみならず數多の他方面に於ても演行せられたり斯の如き兇惡を處罰するは同様なる暴行の再演を防止し且つ清國の平和を回復するに有效なる處置の必要條件たるべきを確信す然りと雖も既に被りたる暴行に對する賠償の手段を以てする懲罰的處置は效力なく將來の訓戒として清國政府をして自ら責任ある官

人を處罰せしむるを可とするを以て之を實行すべき機會を清國に與ふるを適當なりと認む合衆國政府の所信以上の如くなるを以て我政府は清國政府と外交談判を開始するの豫備條件として犯罪人の引渡を要求せんとするの貴國政府の提議に同意する能はず
 然れども合衆國政府は獨り北京に於てのみならず其他各所に演せられたる暴行の最高責任者を處罰するを以て最後處分の談判中に含まるべき重要な條件となすの主義を保持するものなり我政府の目的は可成速に清國と事局を談判するため全權委員を指定し同時に適當に權能を附與せられたる清國政府の代表者と商議するの權能を北京駐劄の米國公使に附與して豫備條約を締結せしめ此に於て列國と清國との談判終了するまで清國に於ける外人の生命を保護し且つ秩序の維持に關し帝權の行使を充分ならしむるにあり

九月二十一日

代理國務卿 ヒル

露國の北京撤兵策

近到の「ノウオエ、ウレミヤ」は「撤兵に關する政府の通牒」と題して曰く露國政府の撤兵の通牒は列國に如何なる感覺を惹起せしめたる乎請ふ左に聊か之を述ん夫れ露國政府の撤兵に關する通牒は佛國政府に於ても之に賛同するや疑なく紐育「ハマド」新聞の報道する所に據れば既に四箇國但佛國除くは露國政府の提議に賛同を表明せられたれども餘の二箇國は未だ撤兵の議を承諾せざるなり、而して米露新聞は其二箇國とは乃ち獨、伊なりを曰へり
 獨逸新聞は大概露國政府の提議に賛同を表明せざれども唯「コエルニシエ、ツアインツ」其他二三の半官報は北京撤兵の議を非難せり風説に據れば獨逸政府は北京撤兵の議に賛同せずして英國政府は撤兵の議に賛同せり但英國新聞は撤兵の議を非難し非撤兵説を喋々唱道せり北京撤兵の議に反對する論者は曰へらく北京の占領は清國政府を抑壓する一手段にして北京に駐屯する軍隊を増加するだけ其抑壓の度を重くする所以にして列國の同盟政府に對する要求を之に因て迅速遂行せしむることを得ん若し夫れ北京より撤兵せんか清國人は列國が軍隊を到底北京に駐在せしむること能はざるものと見做し平素の驕傲自負心を再燃し列國の勢力を輕侮し之に因りて遂に列國の清國に於ける勢力は衰退し歸する可し此の所説一理なきにあらずと承だてて撤兵の

議を排斥する資料を爲すに足らず吾人が清國政府は北京を占領せらるゝに因りて列國の要求を迅速に遂行す可しと思惟するはそも誤り清國政府は今や俄西疆に逃避せり自今必要に應じて尚又西安府若くは其他の都會に遷居せんこと計畫せり且つ情勢斯の如くなるを以て清國政府に勝利を獲んこと容易ならず唯終に至る迄忍耐し能く持久する者遂に勝利を獲ん故に列國は其軍隊を北京に駐屯せしむることも滿一箇年間若くは之より長く駐屯せしむること能はざる可し夫れ然り絶東に於て行はる事件は歐洲人の尺度を以て測量すること能はざるものあり西歐洲の某國は北京の占領は遂に全清國を蔽ひしむるに足らざると思惟せり然れども清國に於ては斯く容易に行はれざる事情ありて存す縱令北京は占領せらるゝと雖も之れが爲に全清國を告げしむる如きものは爲らざる可し蓋北京は最初より首府にありざりし如く又最終の首府と爲るにありざる可し聞く所に據れば目下清國皇帝、西太后の駐蹕し給へるゴアング江の上流は直隸省よりも明る清國の中心に位置する(中略)夫れ然り而して北京撤兵の問題に關して又西歐洲人の尺度を以て測る可からざるものあり往々にて北京を占領して清國人を恐怖威嚇するは對清策に於て其度を得たるものと曰ふべからず此際に於て若し列國の軍隊北京を撤去したらんは清國政府は住慣れし首都に復歸すべし左すれば談判の開始を願ふ迅速ならしめ且容易ならしむるに足らんと思惟するは敢て不當の見にあらざるべし由來露國の提議に賛同をせざる者は露國政府と見解を異にせる方面より觀察すればなり露國政府は一日も速に清國に於て平和を克復せんことを企圖せり東亞の平和を毀肩し荷ふ者は我露國なり吾人は爰に於て世人の注意を請ふんと欲するものありは露國外務大臣の在外公使に宛て北京

撤兵の訓電を發送せし日は八月二十五日(舊曆十二月)にて撤兵勅令の公達は八月二十九日(舊曆十六日)なり即ち露國皇帝が萬國平和會議を召集するの勅令を發布したる日と恰も符合せること是なり此符合は豈に偶然ならんや露に露の萬國平和會議を海牙に召集したる勅令の精神と今般北京撤兵の議を主唱せし精神とは自ら相一致符合せり露國公使を北京より引揚げるに共に又露軍を北京より引揚げて清國政府と談判を開始することを容易ならしめ一日も速に平和を克復せんとせば平和の主たる露帝の深き希望する所なり若し夫北獨逸政府は北京駐劄の自國公使ケツレル氏を殺害せられたるを以て特別の賠償を要求し強固なる復讐を遂行せんことを欲すれば我露國も又アラゴエウエニエンスク府を砲撃せられ又黑龍江に遊又往來せる船舶をも砲撃せられ且又東清鐵道を破壊せられ其役員は殺害せられたるを以て復讐と同じく特別の賠償を要求し強固なる復讐を遂行するを得可し然れども我露國は隣邦の友誼を重じて斯る殘忍非道の復讐を遂行するものにあらず清國の匪徒は滿洲の境界より露國に向て挑戦せしり我露國は敢て怒を忍び平和と仁愛の行動を以て清國に懲罰しつゝあり清國たるもの我露國の恩義を以て徳を感ずるべからず又列國も露國皇帝の平和主義を以て北京撤兵の勅令を發布せられたる叙述に深く感佩せざるべからず云々

北京陷落後の列國意嚮

省て北京駐劄の獨逸公使たりしブランドは支那通を以て目せらるゝ人なるが近頃ドウチエ、ランドドスチ

ヤウ雜誌に論文を寄せ各國の對清政略を論述せり爰にその大意を抄譯す
北京悲劇に對する賠償問題は露國に取て太なる價值を有せず聖彼得堡政府は向後其の終東に於ける地勢、西比利の發達に干渉する利益并に西比利大鐵道利用の條項を參照して對清政略を定むべし英國の對清政策は主として經濟、通商上の利益に關聯するの傾向ありソルスベリー侯は清國に向ひ強硬の態度を執るを危ぶむものゝ如し何となれば斯る行動は清國をして英國を厭ひ露國に親しましむるものなればなり刻下英國の勢力稍て衰へ爲めに殖産通商上の利益も漸次減退するの徴候あればソルスベリー侯は愈々眞面目にこの方針を執るべしと思惟せらる

干渉を施すべきの點に就き政事兵事上の試驗を行ひ歐米列強が支那問題に深入りするの冀望なきを發見せり併し「支那謎」を解くに當り露人の意嚮は模糊として到底たるの感覺を生せしめたり日本人の眼を以て露國を看れば猶ほ暫時の間は「未知數」たるを脱れず露國は他の列強に較べて二個の特権を具へて之を利用するの便を有す二箇の特権とは則ち議會の無き事と時日之

像を實現するに干戈を動かすの機會を得ざるも早晚對手國の過失に乗じて着々その實行に取掛るは火を暗るより明瞭なりとす

支那政府が前後矛盾する通牒を發せざりしならば米國は喜んで之れを商議せしならん米國が支那の眞意嚮を確に認識する曉には商議を開くのみならず進んで仲裁の勞を取り歐羅巴と清國と和睦せしむるや疑を容れず歐洲にして這般の現象の可能を疑ふあらば抑々大なる誤謬なり由來北米の商業政治界に馳驅する者は米國が必ず太平洋を占領せざるべからずと信せり勿論この想

刻下北京駐劄の公使の安否を氣遣ふの必要なく徐徐特殊の政治推定は緊要の地位を占むるに到るを危ぶむべき時機に近づき然と極東の形勢を觀察するに日露英米一として謹慎の色を作らざるはなく清國に向て提出する要求をして或る範圍を超えざらしめんと決心せざるはなしされば獨逸の這般傾向に處する亦困難なりと云ふべし聯合軍は秋の到らざるに北京に陥落の必要を認め獨逸兵の到着を待たずして北京に入れり故に渠等は獨逸の列國の援助なくして單獨に戰爭を爲すを望まざるや明白なり吾國は極東の實況を探り并に支那と衝突若くは戰闘するを抑止する他國の德勢厭忌を知悉するを要す否らざれば支那政府と衝突するは愚ろか或る一

國又は數國と葛藤を醸すの虞あるべきなり。

聯合軍總司令官フルデルシー元帥の渡清するは列國の
求心運動(則ち各國の特殊利益に關する)の熾なる時な
るべき疑を容れず之れ元帥の職權に取りても獨逸の特
殊利益に取りても危懼すべき事にあらざるか
現時焦眉の急務の獨逸政策の趣旨を判定するにあり
々たる國民は支那問題の眞相價值を知らずして五里霧
中に彷徨す果して然らば極東政策の趣旨を確定し之を
縮少するは尤も緊要なる事なり「自己の問題を縮むる
の能あるを見てるの腕を讀る」て「格言を遵守する者
は實踐的政治家たるを得べきなり



小説

金鵝勳章 (四)

入營の前夜、清三郎は一切の事情を解し得たのである
叔父平兵衛が五年前商用で大阪へ行つた時に、同じ宿
屋に泊り合せた古書番商の佐野と云ふ、表皮を脱げば
大絹の襦袢を着て安坐をかねて居る、金箔附の天竺麩
博郎と、商業上の慾張り咄から懸念になり、遂に其
の娘のかつ子、是は云はずと知れた大の毒婦に引ッ種
ツて、少からぬ金圓を強請られた事が有つた。其後間
もなく佐野は東京へ巢をかへて、相變らず表面さの商
賣ははんの申請だけ、彌売町に出入して内職に勉めて

居る。かつ子も例の腕で稼いで居るのであるが、其
の術が巧者に成つたためか、近處でも餘り氣が注かぬ。
斯くして既に五年を経來つたのであるが、其の間に彼
の掌中に翻弄せられた者は、老若合せて十八人、山形
清三郎君も其の中の一人である。

始めの間はかつ子も、是が大阪で逢つた平兵衛の甥と
は知らなかつたのであつたが、間もなく夫が知れたの
で、通常の者なら手を退いて了ふのであるが、大膽な
かつ子は、夫から尙更好都合と、先方から云ひ出すを
待ツて、自分は何處迄も知らぬ顔のお半さんで、令嬢
然とすまして居たのである。

是等は芝居で演るつらぬの様に、彼自身が平兵衛と清
三郎との居る前で述べたので、最後の云ひ草は即ち他
では無い。清三郎は戦に行けば生きるか死ぬるか解ら
ぬ然、よし生きて歸つた處で私を嫁と云つた處でさ

りもすまい。寧此處で別れる事として、さて手切の金
が千圓と云ふ要求であつた。

萬事は松井か間へは入ツて、半金で手を拍つ事にした
のは二三日過ぎた後の事で、清三郎は後に保はす入營
して、間もなく敵地へ渡ツてしまつた。

發憤と自暴自棄とは、浪速の葦が伊勢で濱萩と云ふ格
で、異名同躰である。唯成功したのと、しないのとに
依ツて、他から呼ばれる稱呼が違ふだけで、チエスト
姦自暴自棄だ。と、身を捨て、かゝつた業でも、成功
すれば發憤して成就したと云はれる。

清三郎君は即ち發憤せられたので、叔父よりも叔母よ
りも、財産よりも、また自分の命よりも大切に、頼も
しく思ツて居た佐野令嬢が、思ひの外な大の假面冠り
であつたので、失望落膽唯一死國に報ゆるの大責任が
あるために生きて居るので、さもなくば疾くに自殺

でもしたのかも知れない。

が、今は夫どころではない。殊に敵は名にしおふ文明國であるから、従前の様な頑迷な支那人を對手にしたのとは違ふので、我軍の苦戦は一通りでない。此の辛苦艱難の中では、どんなのんきなものでも故郷の事を考へる隙はない。殊に清三郎は、断然思ひ切つて居るのであるから、宅へ手紙を出す事などは無い。又叔父、叔母、松井などから来た手紙も、受け取つたら破つて棄てる許り。他の者は唯一通の手紙でさへ待ちかねて開くのに、彼は他の者が故郷の便を樂む間は、人の居ない處へ行つて、夢ともなく幻ともなく、ぼんやりして居ると、未練らしく樂しかつた昔、否つひ先頭の事が目に見える様で、此の時許りは下宿やの二階に燻つて居た清三郎に戻るものであつた。

消されて、忠實義勇、奉公専念の一勇者となるのである。彼は元來生きて故國へ還らうとは思はないのであるから、随分思ひ切つた危険を侵す事があつて、夫がために大功を樹てた事がある。某處の戦争に敵の堅城へ先登した事も、某所の夜襲に慮らざる敵の秘窟を知つて、其の彈藥の貯藏倉庫へ火を放つて爆發させた事も、彼は唯自分の死の手段を講じた已耳で、別に功とも思はない。幸にも生命が救かつたのが、彼自身は反つて不満である位である。

り響いて、山形君の名は聞え渡つた。

日本での評判はまた殊に大したもので、さう今度の戦争では、第一が誰某、第二が誰某、第三は山形清三郎君の名譽で、各新聞は争うて肖像を載せ、略傳を掲げゐる。悪口新聞は、佐野の事を書き始めたが、後には憚つて中止してしまつた。各小學校の生徒は、彼の功と謙讓の徳とを稱へ上げた軍歌を歌つて歩く。日本は外國と戦争すれば、必ず勝つべし。と云ふ明文が萬國公法にのるといふのも無いが、必ず捷つは實際に徴して明かである。今回も連戦連勝、遂に敵の首府に逼つて、城下の盟とまで事が運んだので、此處少しは休戦である。

ら降つて来て身を飾つて呉れる。やがて勲功賞とさういふ、金鵄勲章を貰ふ事がある。さうあつたどて彼の優しい、美くしい、氣立の面白い佐野は、ヤツぱり惡妻で、毒婦で、皎潔玉の如く清い心の處女とはならないのだ。何の馬鹿々々しいと、又しても迷想に耽つてしまふのである。

さあ休戦になると、皆今迄張つて居た氣が弛んで、胡歌牧笛征夫の袂は濕りがちである。つまらないのは清三郎で、死さうと思つて死なれず、最大の名譽は天か

の清三郎殿とはあるか、中は優しい女文字、是はよお子の信書である。それか一ツ開けて見様。ハテ誰れにしゃふか、と、少時彼方此方ひつくり返して見て居るか、何となくよお子が見たい様な氣になつて、夫を

開た。前文は例の通り「やさそ」の行列である。「此の度御いさをし誰知らぬものもさく擧ぎ渡りて、日々喜びを述べに参り候もの引きも切らず、中にも驚き候は昨夜松井様と佐野様と御同道にて、佐野様は大丸鬘に結び松井様と並びて参られ、さる人の媒にて今度夫婦になりたりと仰せられし事に御座候。夫れにつき前便にもあらずし申上げ候へども、尙此頃をかしき事聞き出し候さく一寸申上存じ。おひまの御讀下され度候。前にも申上候通り、松井様はなかく巧のある御方にて、先日髪結ひのおつたさんからの話には、彼のかつ子さんとは、元よりのなかにて、或る時少の云ひ合ひより、松井さんが私の婿となりて私方へ参るか、がつさんが清さまの嫁となりて宅へ参られるか、腕籠を致さうとの事にて、夫故兩人とも一生懸命にあられし由に御座候。夫には尙五百圓とかの賭も

ありしどの事なれど、是は判然とは致さず、兎に角をかじき事故御知らせ申上候。……アハハハ、馬鹿事事を爲たものだアハハハ、。がだ併し前便に松井の委しい事が書いてあつたのだらうが……惜しい事をした破つてしまつて……こんな面白いことなら讀んで見るのであつた。併し松井と佐野と共謀して居たのが、全然反對に両方とも此峰とらになつたのは何より仕合せだが、曰が其の事を覺れなかつたとは……少夢然して居たのだな。アハハハ、馬鹿々々しい。エート夫から……何ぞそ御身御大切に……か、極り文句だ序に、叔父のも見てやらう。

「かうとこの邊は極り文句でらう……何だ……もはや大低戦争も終なるべく、就ては未だ歸朝の日取は

定まらず候やど、日々待ち暮し居候。實は先頃申上げし如く、兎に角よね子の件御承諾下されたく、さすれば家督等も直に……エ、こんな事を云つて寄送さずとも可いのは、若し戦死した際に、こんなものでも持つて居様ものなら、夫て笑はれる原因だ。没分曉にも困るなア。

跡は口の内を讀んで、グッ〜と丸めて衣囊へ押し込んでしまつた。

大きく伸をして四邊を見回すと、遙かの向ふには四人五人つゝ一團になつて、何かガヤ〜樂しさに語り合つて居るが、離れて居るので清三郎の方には氣の注ぐ者もあらず。

彼は再び衣囊たら叔母の手紙を出して讀まうとしたが、何となくまたよね子が見た様氣がして、夫を出して押し開いて見る。こま〜書かれた一字一

句、野暮な叔父の手紙を見るよりも面白い様に、樂しい様な氣がするので、二度三度遂に數回讀む間には、一種の感情に驅かれて、彼は歴々とよね子の情を讀み得たのである。

今月今日最大吉辰に當つて、山形屋の奥坐敷に銀燭はゆく照しつらねられて、金鶏勳章の飾られた床の間の前で、芽出たく若夫婦は合衆の式を挙げて、此日から此の家の主人。平兵衛夫婦は樂居の、唯初孫の顔を見るを待つ許りてある。嘗て清三郎の親友であつた、今は待合三吉野の御亭主松井君と、佐野令嬢即ち今の松井令夫人ではない、三吉野の女將にも、恨みもつらみも無い、是非御來賓と云つてやつたが、彼等の影が此席に見えきいので考へると、可愛想に、彼等はまた大した悪漢でもなかつたのである。(完)



雜 錄

兩陛下の英兵御慰問

我天皇陛下には井上侍從武官を、皇后陛下には北嶋女官を十月二十五日午後横濱なる英國海軍病院に差遣はされ親しく傷病兵を御慰問あらせられたり承はる

西公使の辭任

西駐清公使は渡清後健康兎角勝れず昨冬は殆んど病中に過したる程にして殊に本年は北京籠城等一方あらざる困苦に遭遇したることとて公使の友人等は此冬期に於ける公使の健康に付き頗る憂ふる所あり公使も亦以前より歸朝静養の希望ありたるより今回愈々歸朝を許すこととなり後任者の北京着次第出發歸朝の筈なりと

云々又西駐清公使の後任は現任露國公使小村喬太郎氏と内定し既に同氏に其旨を傳へ氏は十一月三日晚香港發の汽船にて一應東京に立寄りたる上赴任すべしといへり

武功調査會に就て

北清事件に關する武功調査に就ては海軍も陸軍も略ぼ同時に調査委員會を設くる筈なるが海軍の同委員は多分上村軍務局長を委員長として委員は各局部より選定せらるゝならんといふ海軍の調査委員のみは既に選定せられたるが如き説ありは全く不日選定せらるゝならんといふの誤傳なりと

歸還兵上陸の模様(廣島)

御用船小倉丸は去十五日午後六時五十分、土佐丸は同十二時着港せしが夜中の事とて上陸を見合せ翌十六日午前より檢閲を終へ上陸を始めたり小倉丸の乗込部隊

は馬場工兵中佐以下の工兵第五大隊本部及び三橋工兵大尉の第一中隊并に坂砲兵大尉の指揮する野戰砲兵第五聯隊第四中隊にて坂大尉及び前日歸還せる山岡砲兵大尉は何れも陸軍大學生にて今般復校を命ぜられ不日東上する筈なり、土佐丸には野戰砲兵第十六聯隊第一大隊(長山川少佐)歩兵第十一聯隊第一大隊本部(長林少佐)同第一中隊(長若井大尉)乗組り歩兵先上陸して午前十一時廣島に入り工兵積上陸を終へ砲兵は砲車、馬匹の上陸に時間を要し午後四時過ぎ漸く終了して廣島に來り此日は朝來風強く砂塵を吹き散らし旋風字品海岸御幸通入口に設けたる凱旋門を吹き飛ばせる等稍荒模様なりし幸に好晴にて上陸には故障なかりと

第十二聯隊歸還(多度津)

九龍備戍歩兵第十二聯隊は去月十七日夜多度津着の御

用船大連丸にて北清より歸還の筈なりしが門司にて荷物揚陸の爲時間後れ翌十八日午前七時着船せり是より先き東嶽より、渡邊香川縣書記官、白上同警部長、近藤香川郡長、小田高松市長及び各名譽職縣屬、赤十字社員、尙武義會員等、西嶽よりは松崎三豐郡長、各名譽職員其他孰も前夜來りて待受け居り乃木第十一師團長、荒川香川縣知事は十八日午前四時舞子より歸り一陸をもなす歸還兵を埠頭に迎へり頗て大連丸の港外に接艦するや數十發の花火を打上げて之を報ずると共に歡迎の各團體、各學校生徒歸還兵の親族等埠頭及び沿岸に集りて尺寸の地を餘さざりし隊兵は九時より十一時までに上陸し豫て設けある通信省用地(二千餘坪)に於て半時間程休息し此間官民有志より寄贈の茶菓の饗を受け十二時過ぎより九龍に向ひ同所の西練兵場に整列して乃木師團長、小島第二十二旅團長の臨場を待

ちて分列式を行ひ管内に入りたるは午後二時半頃なりしが同兵等が多度津上陸の際には字品通信支部出張員高草木少佐憲兵に命じて將校以下總ての歸還者に對し携帶品を嚴重に調査し差押へたる物も少からざりしが右は分捕品にあらざるの證明を爲す以上追て下渡さるゝ等なりと因に記す歸還兵歡迎會は翌十九日に執行すへかりしも皇太子殿下行啓の事と師團小機動演習との爲に來月末まで延期したり

凱旋將校の談

運送船大丸第十一師團より北清派遣の歩兵第十二聯隊第三大隊其他の輸送指揮官杉浦少佐の談に我が軍隊も戰爭中は意外に健康なりしかを昨今風土病に冒されたる者少々あり我等の知りたるものにて石橋參謀、永田大佐、高瀬少佐、佐伯少佐等も之に罹り入院治療中なるが日ならず治癒すべし、獨逸の今回北京に送兵す

るは一萬五千内目下天津に駐屯するもの約一萬以上なるべく元師も今に天津に在り、保定攻撃の事は擧げられ獨逸今日の勢にては必ず決行するならん露、英、伊及我より出せる各二名の將校(福崎少將に立花少佐)と元師とは履アストルハウスに於て會食する等の事あれ他の列國よりは一も列席せしことなし、此一事より推すも其間多少介意することあるを知るに足らん獨逸軍隊になかゝ規律嚴重なり、天津の民政廳は我が青木中佐、英のボーア中佐、露のウオーガク少將を長官として組織せるが是は最初兵力の大小に由たるものなるが後佛國大に兵力増して長官の一員に加はりたしと要求ありしかを會議の結果之を容れず頃日ウオーガク少將病氣の爲缺席せしかを代理を置き濟すことの前例を作りたるは今後の執務上至極の便利を得たり昨今は其事務も稍閑にして相互通話の稽古などに関

日月を通る有様にて至極好都合に運びあり、我隊は天津攻撃以來死傷合せて八十餘名病氣二十餘名爲に入院せしもの一時六十六名ありしかを漸次恢復し現に二十名許残るのみ割合に少數なりしは仕合なり云々と

獨逸元帥野戰家屋

獨逸元帥ワッデルセー伯は世界の陸軍に其模範を示すべしとの氣概にて種々新式武器を携へたる其中に石綿造りの野戰家屋なる者ある由にてアルフレッドカメルン會社が請負にて製造したる者大體の骨格を木にて造り之に石綿の板を張り屋根も亦石綿を以て葺く總面積二百十方米突、間口十七米突(約八間半)高五米突、大なる部屋七箇を有す先づ門を入りて應接間あり其右に當りて從卒室二箇、左に當りて元帥の事務室、其後に當りて寢室、化粧室、浴室、副官室、談話室等あり室内は何れも太西洋通の郵船の船房に倣ひ設備さる此家

は火に燒けず水に害されず又最も好く寒暑を防ぐ運搬の際には解き放して箱に收め極めて輕便なり解き放しには二時間半、組上げには八時間を要すれば可なりと云ふ

總指揮官北京に向ふ

總指揮官並に幕僚は十月十四日を以て北京に向け天津を出發せり尤も楊村迄は鐵道を以てし夫より騎馬に於て旅程四日間を要すべく到着の上は西太后の宮城を以て臨時舍營に供する筈にて三週以内には天津に歸來する豫定なり

露國と鐵道

軍司令部と露國との間に鐵道に關し爲したる協議の要領左の如し
山海關楊村間の鐵道及び山海關停車場の各時運行及び守備は露軍之に任じ而して列國軍は軍事上の目的の爲

め此鐵道を使用するの權を有す又協同の電線にて發送する通信はモールヌ記號或は露字を以てす、露軍は是の鐵道を直隸省外牛莊或は新民國迄利用することを得然れ共列國軍の用に供する爲一日に少くも二回或は三回各方面に發車せしむるに足るべき材料を直隸省中に預置くべし

揚村北京間の工事に關し露軍は該地方に現在する材料及び已に充用したる材料を軍司令部に供給す

慶親王の訓示

慶親王は一二國の勸告により保定府の清兵統領等に外國軍の優勢にして抵抗するは却て社稷の爲不可なる事を訓示したり之によりて聯合軍は抵抗を受けず占領の目的を達したるならんと信せらる

保定占領の目的

ワルデルゼー元帥は某參謀官の問に答へて保定府占領

は鐵道線路の保護と北京遊襲の防止とを目的とす占領後守備を嚴にしたる上は刻下の形勢更に聯合軍を前進せしむる必要無きを認むと明言したり

保定占領

十月二十日天津發外務省着電左の如し
歩兵一大隊砲二門騎兵一分隊より成る佛國軍隊は十月十三日抵抗を受けずして保定府を占領し又保定府鐵道をも占領せり他の聯合軍は十月十九日保定府に到着すべし豫定なり右は佛國軍隊の公報なり

山海關との交通

上海關には日英露共同棧橋を造り鐵道を延長す、秦皇島は獨佛の上陸點とし鐵道を延長す、山海關より塘沽までの汽車は毎日二回發車す、蘆臺周各庄十餘里の間は破壊に就き線路に沿ふ或る運河に藉り運搬を通す破壊の箇所は約二箇月に修繕し得べし、電線は約一月の

内開通すべし、山海關塘沽間の通信は各國にて毎週一回塘沽を月曜に發し山海關を木曜に發す、山海關には我郵便局を開かれたり同地は平穩なり

各國艦隊の冬營

目下大沽に碇泊中の各國軍艦は來る十一月中旬何れも山海關に集合して冬營すべく我艦隊の大沽に在る淺間高砂、千代田、明石も其頃山海關に赴くべく塘沽に在る烏海、愛宕は芝罘にて冬營するならんと長崎プレスに見ゆ

北京情報

團匪討伐の爲め楊村より寶坻縣に向ひたる田邊少佐の隊は十月廿六日河西務に達せり到る處團匪を見す反て歡迎せられたり
各國公使は十月廿八日第二の會見を爲す筈
廿日保定府發公報に依れば

十三日涿州に支那兵ありしも佛軍の先頭達するや兩方に退き踪跡を失へり十四日涿州通過の節團匪の首八級あり支那兵の所爲ならん十五日高碑店に達する時支那官吏來 鐵道の保護を請求し且天津より來りし佛軍十三日保定府に入りたることを報せり十八日安肅休止の日、獨軍騎兵西方二十キロメートルに出で支那兵に出遇ひ其一人を殺せり他は降伏せり十九日保定府に達する前支那官吏出向ひたり佛軍は保定各門を守備し列國兵は城外に宿營す他の天津より行つたる甲縱隊は未だ着せず佛は停車場を占領し鐵道修理を爲す保定府と曹河鎮間は鐵道保存す他は破壊されたり

二十一日保定府發公報に依れば
城内を四分して英、獨、伊、佛の占領區としたり列國軍隊は尙ほ城外にあり二十二日より獨の大部佛、伊

の一部は城内に入る筈

天津よりは三縦隊各別の道路を進み佛は十三日獨、伊は二十日英は二十一日當地に達せり途中一の敵を見ず

鐵道は當地より南六十哩完備す車輛は十餘輛より成る

天津迄運河の便ありと土人謂ふ

七月上旬團匪五萬あり宣教師二十餘人慘酷に殺されたり

榮祿は北方安肅より來り五六日滯在の後十月十日頃出發目下河間府にあるならん「ショウウチイ」(?)も同行せり

信すべし報に依れば董福祥は嚴罰に處せらる

在北京及び保定府行の列國兵數

十月二十三日某所着の電報によれば十月二十日調の在北京列國兵及び十月十二日北京天津より保定府に向ひ前進せし列國兵左の如し

一、十月二十日調へ北京現在の列國兵
英、少將パロ、第七ベンガル第一シイク筋二十四
バンシヤブ第二十六ボンベリーの四歩兵大隊豫洲陸
戰隊第一及び第十六ベンガル槍騎兵聯隊第十二野
戰砲中隊砲兵大隊

露、大尉の指揮する一中隊
獨、少將ヒョツブナ、海軍歩兵二大隊砲兵九十野砲
二門

佛、海軍大佐コント、海軍歩兵第十八聯隊の二大隊
同第十七聯隊の一大隊砲十一門

米、中將チャファイ、歩兵第九聯隊(千百十)歩兵第十
四聯隊(千三百六)騎兵第六大隊(四百四十五)砲六
門、但し歩兵第十六聯隊と騎兵の大部撤去せり
伊、海軍大佐コルリ(?)歩兵一大隊(五百)陸戰隊二
百五十機關砲二門
澳、海軍陸戰隊三百六

二、十月十二日保定府に向ひし列國兵

第一、天津より出發せし隊(指揮官少將バイエー)分隊

(第二獨伊軍支隊)二大隊を有する歩兵一聯隊騎兵一小隊四門より成れる加農砲兵一中隊野戰病院一箇ヘルザングリネリー一大隊(一中隊缺く)六門を有する砲兵一中隊工兵二支隊(第三英軍支隊)豫洲海兵一中隊(機關砲二門十二斤海軍砲一門を備ふ)バンシヤブ第二聯隊の六中隊香港聯隊の四中隊マドラス工兵聯隊の二中隊ボンベリ騎兵第三聯隊の二中隊ベンガル槍騎兵一小隊砲兵B中隊六門速射砲一小隊ボンベリ砲兵第二中隊の半部
第二北京より出發せし隊(指揮官中將ケーヌリー)
第一佛軍支隊(海軍歩兵二大隊)
第二佛軍支隊(歩兵二大隊歩兵二大隊騎兵十二名加農砲兵第三中隊の砲二門海軍砲兵中隊の砲四門伊國歩兵一大隊)
第三英軍支隊(歩兵二大隊騎兵一聯隊(四中隊)乘車砲兵第四中隊の砲六門鐵兵一中隊)

戰爭奇談の吹寄せ

酒湯に飛込む 北清戰爭に就ては随分様々の奇談もあ

るが是は去る八月八日の事である聯合軍が北京總攻撃の爲に北進して河西務に着いたのが丁度夜七時頃のことと途々支那兵と戦ひつゝ且つ災天に燒かれ饑渴に苦しめられて居るから其疲勞さ加減は一方ならずアア何より早く喰物と云ふので其處ら此處らを搜索するイヤ自分の事許り考へて馬の斃れるにも氣が付かぬ人間は一日二日の我慢は出来るが此奴はさうは行かぬぞと左様だと云ふので各自に玉鬮を二合づゝ取來りて先づ馬に食を宛てがひ夫から誰彼れとなく茄子を持て來る胡瓜を取て來る獲物々々と二頭の豚を引摺つて來て夫を屠る鍋は有るかイヤ無い早く分捕て來いと云ふ様な騒ぎで何も彼も一所に打込んで雜煮にする無格好の手付で餛飩粉を投げる様にして攫み込む扱て此宿營地の近傍は義和團の家許りであつて或は突然襲撃して來るかも知れぬと云ふ氣遣があるから風の音にも耳

發て、警戒怠りなかつたが一向夫等のこともなく無事に口腹の欲を満たすことが出来た然る處に誰か水を澤山に見出した物がある水は熱天焦地の行軍に最も貴重のもので是まで咽喉を潤はすべき一滴の水もなく喘ぎ、若しんだ程であるから今水を澤山に見付けたと聞ては誰も手を打て喜んだので往て見ると成程一家に七八十の大瓶が並んで水が一坏に入つて居る、では湯に立てゝ道入らうと云ふ説が出て皆々大賛成を爲し難て瓶風呂が出来た何にしろ十數日間も湯に道入つた事がないので實に此時の湯浴は千金の價ある位である夫で先づ第一に或士官が道入る筈で素早く真裸體になつて飛込ひや否やアツと叫んで非常に顔を擧げ乍ら周章てくさつて飛出した之はドウした事と聞て見ると久しく湯と云ふもいへ入つた事がないので先生田邊が出来て居た併し餘り刺激が烈しいと云ふので能く氣を付て

見ると夫は水に非ずして丁度燒酎の様な支那酒であつたのである多分其民家は酒屋でもあつたのであらうと云うたさうだが其驚き加減と云つたら面白い實に此時の笑止しきには跡で手を打て大笑ひであつたさうな

印度兵の滑稽 酒と云へば印度兵の滑稽が實に可笑しい是はまだ天津駐在中のことであるが餘り各國聯合軍の兵士が暴飲しては軍紀にも關する或は又喧嘩衝突を惹起しては宜しくないと云つて成るべく酒飲みを禁じて置いた併し印度兵は非常に酒好きでドウしても飲まずには居られない又日本酒は二合十錢は甚だ廉價であるから隠れ、日本の酒保へ印度兵が遣て来る左うして其店に酒を注である一合入のコップがツラリと並んでるのでチヨコ、ツと駈けて来てはグイと一盃引掛けて逃げる様に駈出す又邊りを見廻はして人の知ら

ぬ様な時を見てはチヨコ、ツと駈けて来て急いで逃げて行く其風が實に可笑しい又彼奴は中々狡猾で日本軍の宿營へ遣て来てはアンペラを持逃して行くから夫を見付けてコラ、と大聲に叱り付けるとお釋迦様の髻の様なクル、と渦巻きに縮れた髻だらけの顔でチヨイと人の顔を見て逃げて行く其風付が可笑しので一度は叱付ても笑つて仕まら左うすると又々遣つて来て喉物を撥拂つて往くから今度は引捕へて遣らうと思つて手を掛けると妙な手振りにその滑稽な顔付でチヨイと人の顔をのぞいて逃げ出るので何としても可笑しくて溜まらず吹出して仕舞ふ段々様子を見ると隊長から命せられて物取りに来るので彼奴も如何にかして取つて往かうと勉めるのであつた

である北京占領の後兵士は無聊閑散であつたから國の土産話しにどて或日三名の士官が兵七十名を連れて見物に出掛けた當時既に萬壽山は露軍の占領に歸して一個中隊で守備して居つた門口に警衛して居た兵は白服白帽に長剣を佩た一見曹長位と見ゆるものであつたが双方面より日露の語に通じないから我よりして先づ拜觀に來た見せて呉れると云ふ意を通ずるとが出来ない其處で一士官が双手を擧げて兩眼を指さしオーツト兩手を四方に擴げて眼界を開くの意を示したが彼は陸強り了解しない側に見て居る他の士官が笑止さに吹出し乍ら我輩が遣て見せると云つて前へ出る笑ひつゝ一人は退くスルと其先生體を直立して左手を曲げ拳を横腹に當て、首を左右に見廻はし見物の様子を示した一同クス、笑ひ出す露兵は尙ほ未だ情らぬと云ふ始末雖て彼は椅子を出して坐に付け指し挨拶して内へ遣

萬壽山の參觀 萬壽山は北京の郊外にある西太后の別荘で支那帝國に二つとなき善盡し美至れる壯麗の邸宅

又つて折しも士官は庭池に釣を垂れて居た様子で中尉と少尉の二名各羊の手にして出て來たが最も矢張り分らぬ處が其少尉が佛語に通ずることを知り我其中尉が多少之を解するに依りて少し緩くり話して呉れど云ふ様な調子にて何うやら拜觀を士官丈に許すと云ふ迄に分つて幸ひ此日は敵哨兵の更替日であるので夫に紛れで案内者を付けて見せて呉れた萬壽山は凡る周圍二里位、高丘で高橋を以て廻らしてある城門を入りて長廊下を傳へ階段を攀せて又廊下に出ると云ふ工合にして知らず、山を登る數石も階段も悉く大理石で都て美を盡してある禁庭の裝飾は殆んど金銀づくめにて柱時計には十二支の字の内に一個づつ豆大の電氣を點じ銅や鐵の形の中に現はるゝ如何にも田舎者には珍らしきものが十六個飾である夫から金製の鉢に珊瑚を載せる置物一及許りの金の鉢杯が各室に備へてある是等

は皆各國皇室の奇贈品で支那固有の物は殆んど見受けない獨逸國の贈物にはグヰルヘルム皇帝の肖像を畫いた美しい植木鉢がある實に限から限まで金色燦爛目を眩する許りの立派である庭池は不忍池を三倍した位の大きで一面に蓮花を植ゑてある園圃の雅致なる山林の鬱葱たる珍禽奇木を取集めて綠林中に一の高塔を望む都て容易に見る可らざる美觀勝形である
朝陽門の火焰 北京城内に入りても宮室の邊草花々たる有様で更に見るべきものがない却て一の壯觀は朝陽門の火炎に依りて見られた十五日の戦闘止んで兵士は皆露營に愉快の夢を夢みる際打込まれたる彈丸の途端に依りて出火せしか屹然たる朝陽門が焼出して雖ては眞の火柱と化し暗夜に光明を放て見々と輝き滾々と火花を散らす有様は宛然仕掛花火を見ろが如く非常の壯觀であつた後に萬壽山の美麗と朝陽門火災の壯觀と熱れが美ありや云ひし位であつた

北清事變幻燈映畫發賣

●北清事變幻燈映畫
十五枚一組 金三圓(小包二百目迄)
字品乘船、北京、古領、遼、歐、風、光、線、畫
弊店技師深谷、駒吉氏從軍攝影

●北清事變實地映畫
右は字品、港にて山口師團長以下將校諸君各聯隊の乗船、太沽、天津、北倉、通州、北
京に至る實況を從軍中撮影せしものにて有之候

●清國各地名所映畫
大形三十枚一組 金六圓(小包二百目迄)

●清國風俗幻燈映畫
大形五十枚一組 金十圓(小包二百目迄)

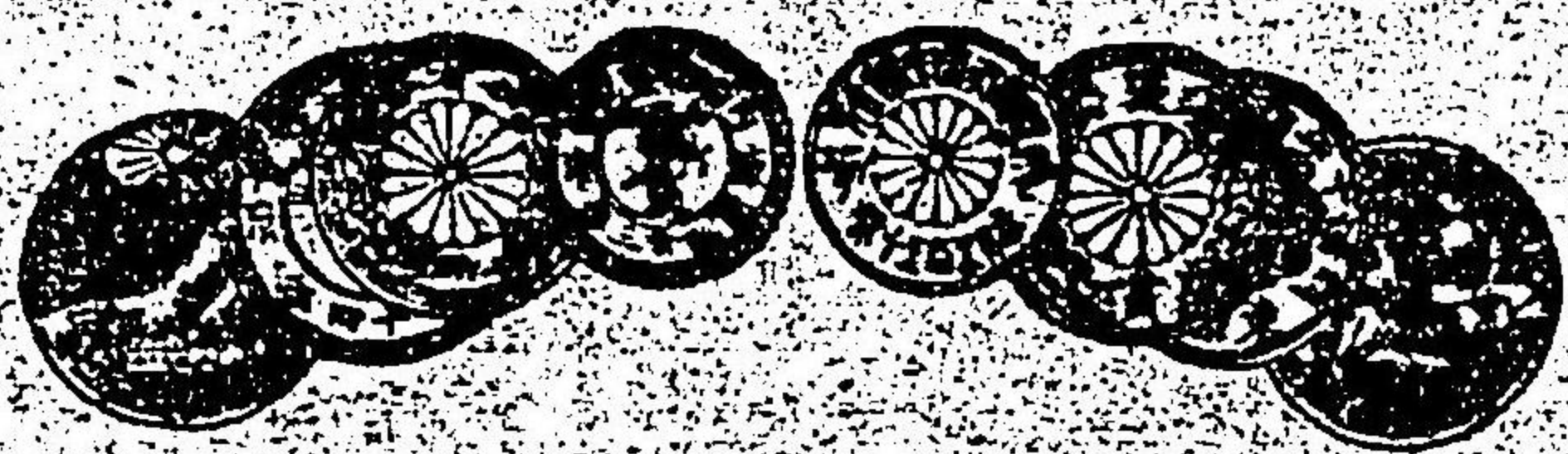
●幻燈器械
普通幻燈○携帶幻燈○酸素瓦斯幻燈○白熱瓦斯幻燈○電氣幻燈○等數十種有之候
(原率無比保險附)

●活動寫眞器械
右各種並に教育、宗教、衛生、實業等の幻燈映畫定價表は御報知次第進呈可仕候
弊店技師深谷、駒吉氏從軍攝影

●北清事變中寫眞帖 第一回出來
廿四枚入り一冊 金二圓八十錢(郵税八錢)
東京新橋南金六町
十三

吉澤商店幻燈部
(電話長距離新橋三百七十八番)

宮内省御用品
最上醬油



最上醬油

常陸國稻敷郡旭崎村
釀造元 上菱醬油株式會社

東京及各國有名なる酒醬油店にて販賣す

第三版刷成

天皇 皇后兩陛下及 皇太子
殿下乙夜ノ 御覽ヲ賜ハル

小松宮伏見宮兩殿下及大給
總裁岩倉公爵の揮毫に係る
莊重なる大文字を觀よ
爾著筆格五岳の概あり

讀者は必編纂趣旨及凡例を閱
讀すべし
文字悉壯能
く實事を副
扶す

明治忠孝節義傳

名 東洋立志編

紅雲霞夜章各
種ノ色劇真圖ヲ
著ヨシ哀章ハ民
人ノ至榮ニシテ
輝章華綬ノ光
シテ偉功
一世ヲ蓋フ

橫田竹泉之題詩
餘情流露於楮墨間
我孝子節婦義僕其他志士仁人の偉
傳を讀め
至誠貫日月
苦節泣鬼神
敘事亦精緻にして評贊更に肯綮を
獲たり

THE CHUKO-SETSUGI-DEN.

PRESENTLY, We deplore that the Nationality of Nippon is destroying away; that is, filial piety, fidelity, chastity, and chivalrous courage, etc. This book comprehends the record of these noble actions, in order to stimulate the Nation and reveal abroad

Published by KUNI-NO-ISHIDZUE-SHA.

社礎之國 目丁二町本森五部本市京東 所行發

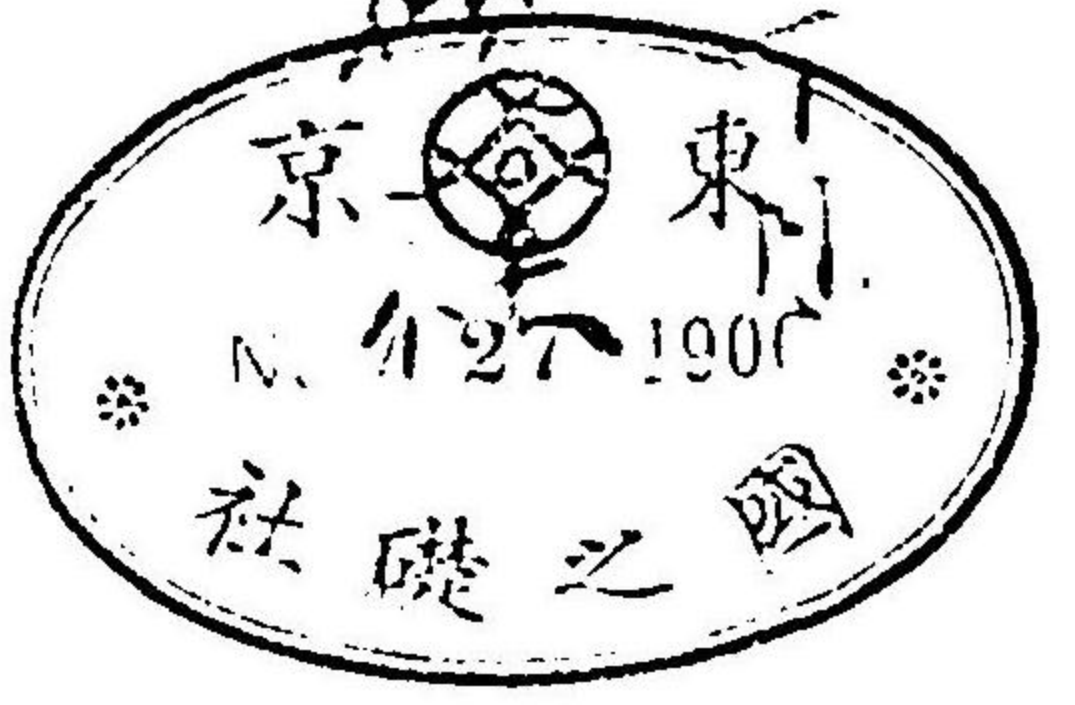
明治三十三年十二月二十七日再版印刷

東京市本郷區春木町二丁目

發行所 杉本勝二郎

東京市本郷區春木町二丁目

發行所 成之社



明治三十三年十二月二十七日再版印刷

東京市本郷區春木町二丁目

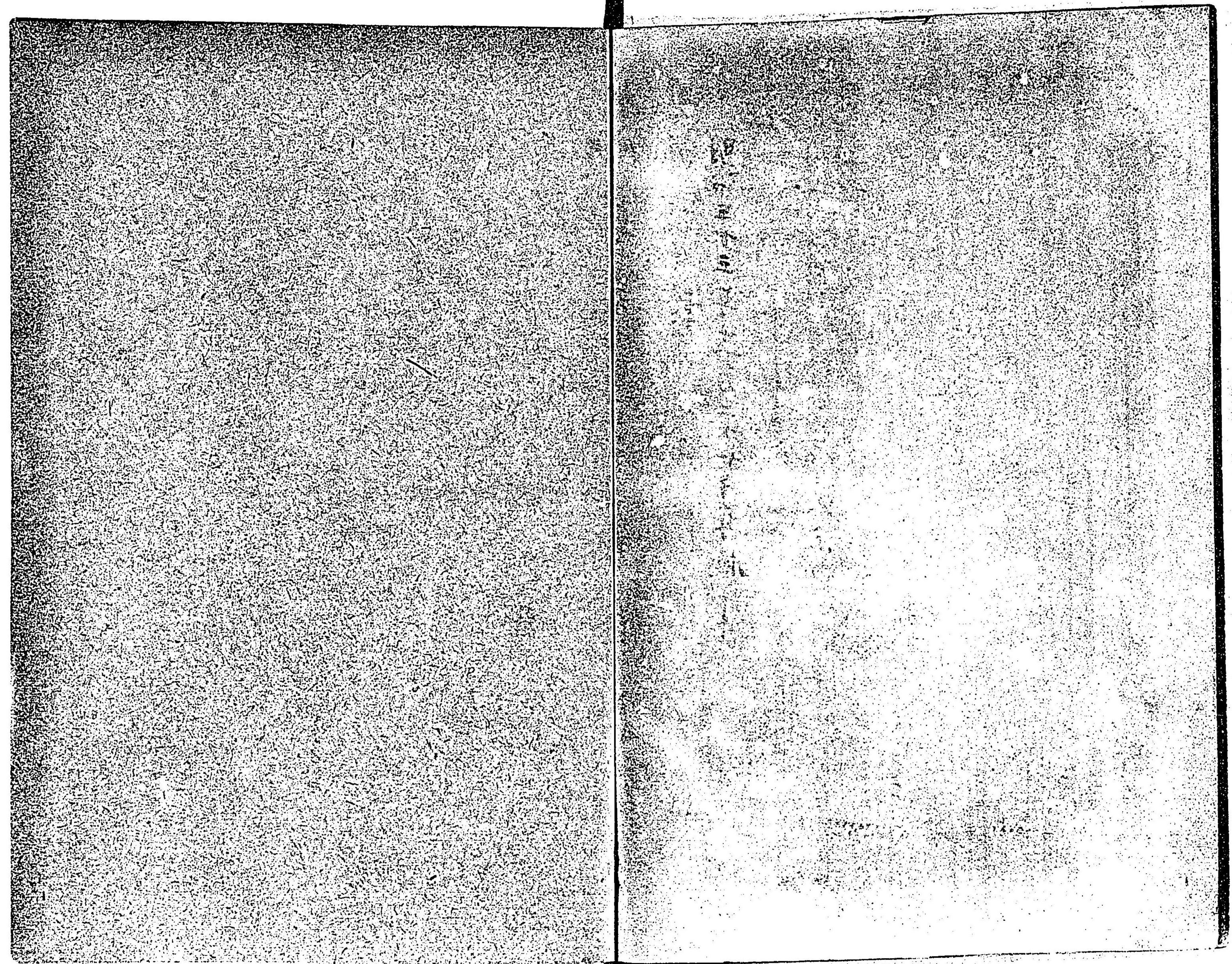
編纂者 杉本晴二郎

東京市本郷區春木町二丁目

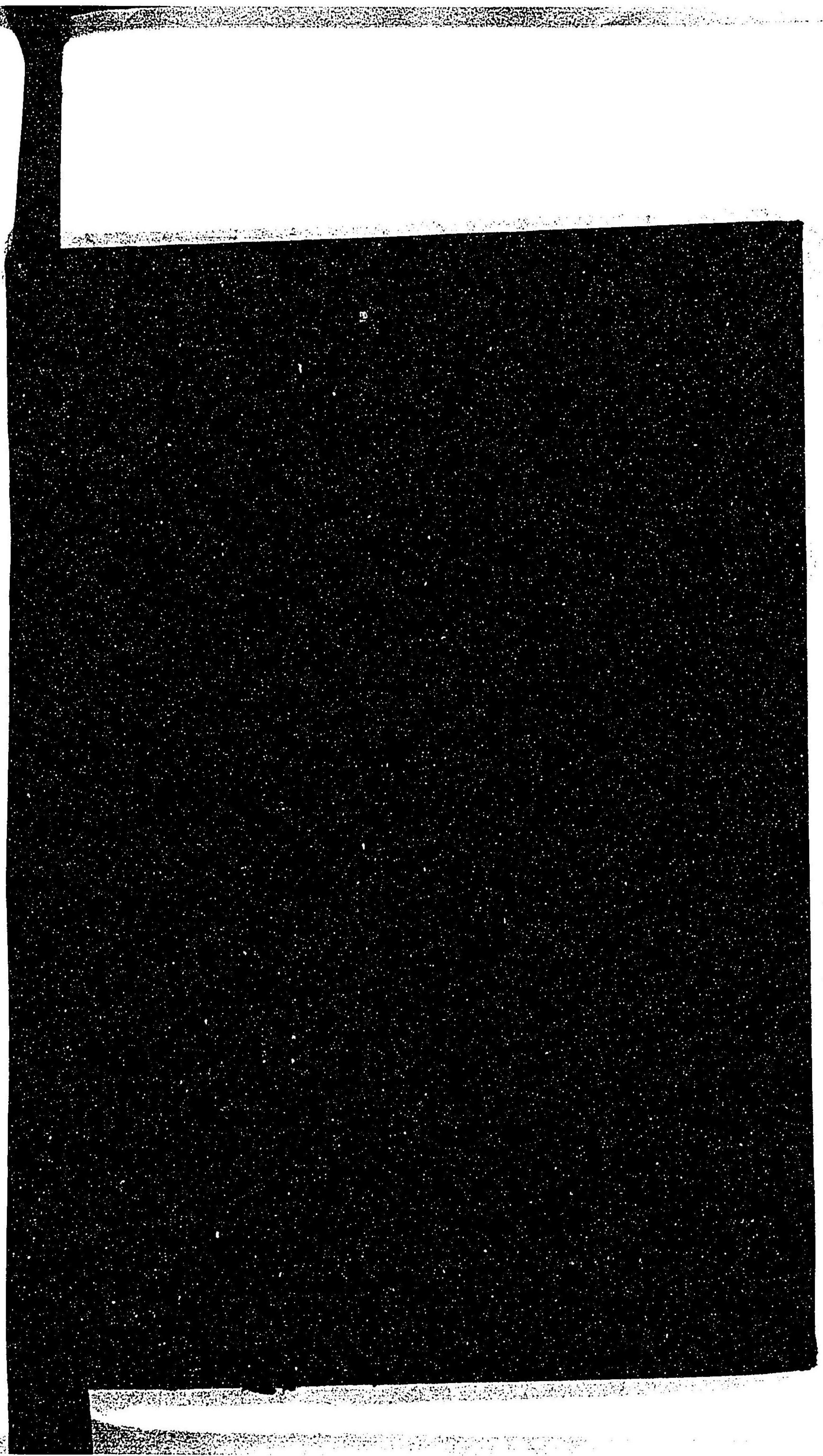
發行所

國之礎





87
129



002976-000-6

87-129

列国聯合支那戦争記

杉本 勝二郎/編

M33

ACB-6570



